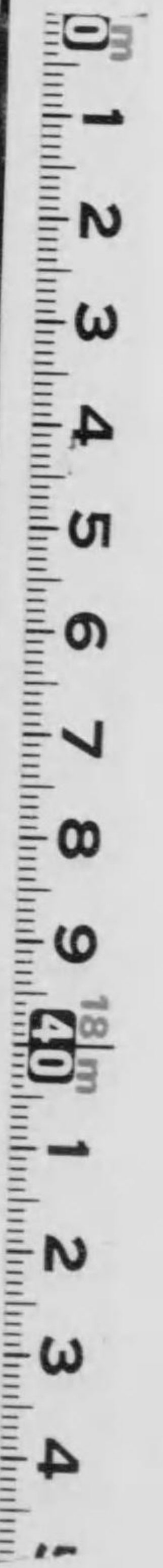


21
458



始



21-458



江戸川柳吉原志

文學博士 佐二 醒雪
西原柳雨 共著

大正
5. 7. 21
内交

社會資合
院書英育
兌發

自序

江戸文學研究の聲然く久しくして、眞の江戸を解する者の何ぞ然る稀なるぞ。由來、西鶴や門左は難波津の贅六にして、芭蕉は伊賀の淺黄裏のみ。近江の其角、淡路の嵐雪、僅かに江戸文學の機微を示すといへども、要するに元祿享保は未だ江戸兒のち江戸にあらず、丹波椽が公平の怪談、才牛が暫の筋隈、箱根の此方にも未だ化物を見る世にして、誠の江戸兒が十八大通と生れ、川柳、黄表紙、洒落本に生粹の風俗を謠はれしは、まづは寶曆明和を始とすべし。予この説を持つること久し、嘗て流行會の同人と黄表紙の風俗研究を企て、未だ成るに及ばざるに、柳雨君が既に多年川柳研究に盡瘁せらるゝを聞き、喜んでその事業に共力せんことを誓ふ。本書はその第一歩なり。されど本書に於ては、予は唯編纂の方法や二三の解説に關して助力するところありしのみ、忠實なる分類彙集は皆柳雨君の功なり。合著者として、敢てその成に居らば、心苦しからぬにあらねど、柳雨君と書肆とか切なる要求の否み難くて、刪定補修、略大過なきを期せり。遮莫、元來微言を尙び、諷諭を主とするこの種の句に於ては、疑ふべく、惑ふべきもの尙尠からず。その疑義あるものも、今は多く刪除せず。參照としてこれを存せんことの、本書の如きものに於ては、寧

る便利ならんことを思へばなり。

抑、大宮人が遊宴の地は主として禁庭と寢殿なりしが如く、江戸兒の社交場は専ら花街遊里なりき。されば花街遊里を外にして、江戸文學を解せんとするは、宛も禁庭や寢殿に通せずして、平安朝文學を解せんとするに等し。小袿、出衣の風俗にして研究に値すべくば、襦袢、羽織、豈に等閑に附すべけむや。彼に節會あれば、これに紋目あり、彼にお局あればこれに部屋持あり、八朝の白襲は五節の小忌衣に比ぶべく、おいどの勤番者はさすくなる空昌に似たり。予等がこの種の研究は、決して單なる好事にはあらで、學徒として去り難き研究の階梯なり。若しそれ、川柳の描きたる吉原を徒に淫靡なりといふものあらば、試に枕草子の霧ふたがる曙を見よ、源氏物語の浮舟が深間を讀め。忠實なる江戸文學研究者に對して、敢て本書を薦めんとするに際して、茲に編纂の由來を叙し、并せて解嘲の一語を添ふ。

大正五年初夏

佐々醒雪識

凡例

一、著者は少壯の頃から川柳の古書を愛讀し、最初は單に嬉笑遊覽の具に供したに過ぎなかつたのであるが、古句の解釋に就て、聊研鑽を積むに従ひ、何時とはなしに江戸なるものに就て非常に趣味を生じ、終にその時代の風俗人情を窺ふに足る唯一の好資料は、川柳であるとの考を起し、茲四五年の間、忙しき職務の餘暇を偷み、事情のゆるす限り、各種の書物を獵り、一面先輩古老に質して教を乞ひ、刻苦精勵の結果、兎も角江戸時代後半前期、即ち寶曆以後約百餘年間に亙り、風俗史の參考となすに足るべき古句數萬餘首を蒐集し、試に其中より吉原に關する句だけを摘録して見たのがこの一篇である。

一、されば苟も此目的に適ふものは、出来るだけ収録して遺漏なきを期し、敢て妄に佳句と駄句とを取捨せぬこととしたのは、一は古人に敬意を表し、一は僭越の譏を免れんが爲である。

一、既に世界が吉原といふ、女を土臺に築き上げた題目である以上は、色情戀愛の意義を含める句多きに居るは、別に不思議はないが、さりとて餘りに露骨に極端に、劣情に投じたる所謂破禮句なるものは、たとひ時

代風俗を窺ふに足るものと雖ども、務めて収録を避けたいのである。

一、遊里遊女遊客の三者は、元より相互連關し、強ひて彼此類別することは甚だ困難なる問題で、中には全く類想の便をはかりて、按排したるものもありて、序列必しも適所を得てはゐない。それ等は讀者任意に對照せられんことをのぞむ。

一、口語或は副詞等には、間々片假名を混用した所があるが、是等は唯讀み易きを主としたる迄にて、別に嚴格なる主義からではない。

一、秀句語呂合等のところには、句間に()印を施して割書をなし、又難解の文句には、鼈頭の欄に、簡短なる評註を加へておく事にしたのである。尤も難句といひ、平句といふ、もと讀む人の造詣如何によることにて、絶対に難易はないのである。此書固より初めて柳門に遊ぶ人を以つて標準とした。

一、又、川柳に解釋を附するは、野暮な汰沙であるとは、動もすれば斯道先輩の口吻に洩れ出る氣焰であつて、成程柳風の妙味といふものは、自ら窮めて自ら得るといふより外には先づ道はないのであらう。けれども前項の理由によりて、予は甘んじて野暮の嘲笑を受くる覺悟である。

一、とは云ふものゝ、予實は大門がどちら向いて居るかさへ知らぬ川柳子の所謂淺黄裏にて、江戸時代の吉原を云爲するなどと云ふ粹な資格は根本的に缺けてゐる。されば定めて噴飯に堪へぬ様な間違も多々あるであらうが、そこは何分寛大のお目こぼしを以て、充分の御叱正あらんことを、幾重にも御願ひ申して置く次第である。

一、毎句の上には符號を附して年代を示してゐいた。但し、大體は柳樽に依つたのであるが、一句にして兩様の年代あるものは、すべて古い方をとることにした。又、抄記の際書洩らしたり、又は原書の年代が不明であつて、年代の判然せぬものも少數ある。句體其他により、大凡の想像は附くものもあるが、萬一の間違を恐れて、それ等は暫く無印の儘に残しておくことにした。

大正五年五月

柳 雨 識

年代略符表

寶	寶曆及其以前
明	明和
安	安永
天	天明
寛	寛政
化	文化
文	文政
天保及其以後	天保及其以後
▲	柳樽拾遺中に年代不同とあるもの、蓋し天明以前の句なるべし。

江戸研究 川柳吉原志目録

第一編	吉原の沿革	一																		
第一章	吉原の由來	一																		
元吉原	新吉原	一																		
第二章	吉原にて起りたる出來事	四																		
失火附假宅	紀文、奈良茂の大散財	仙臺、禰原、名古屋侯の放埒	治郎左衛門の刃傷	權八小紫の心中、及び狂言戯作上の情話等	四															
第二編	吉原の遊廓	二一																		
第一章	廓外	二一																		
衣紋坂	高札場	見返柳	五十間	御齒黒瀨	中田圃等	二一														
第二章	廓内	二三																		
大門	附四郎兵衛番所	仲の丁	附引手茶屋	水道尻	秋葉の常燈明	五丁町	(江戸町一、二、揚屋町、京町一、二)	伏見町	一堺町	角町	大中小籠	附當時の名妓	西河岸	羅生門河岸	切見世	廓内商店	九郎助稻荷等	二三		
第三章	吉原の四季附紋日	三九																		
元日	附松の内	大黒舞	大盡舞	夜櫻	附花魁の道中	梅卷	七夕	草市	盆	附燈籠	俄	八朔	明月	附後の月	重陽	雪見	節季	狐舞	夜蛤等	三九
第四章	吉原の朝夕	六〇																		

夜明—晝見世—晩景—仲の丁張—見世張—素見—引ヶ
四ツ等

第五章 吉原の夜上……………七〇

初會—引附—床—廻部屋—貫引—後朝—居續等

第六章 吉原の夜下……………八五

二會目—三會目—花—紙花—床花—無心—名代—口
説—手管—起請—心中立—總仕舞—積夜具—敷初等

第七章 揚代金附吉原細見……………一〇一

第八章 吉原の制裁……………一〇五

桶伏セ—附ヶ馬—始末屋—散ン切—女郎の密行—女郎の
駈落—折檻等

第三編 吉原の遊女……………一一三

第一章 遊女の身の上……………一一三

身賣—附女術—突田シ—身揚リ—月經—附懷妊—病氣—灸—
出養生—鳥屋—鞍替—身受—年明—新世帯等

第二章 遊女の風俗……………一二六

部屋—服裝—粉裝—言語—起居—動作等

第三章 新造附老人客……………一三五

第四章 禿……………一四一

第五章 鴝母……………一四六

第六章 女郎屋者總幕裡……………一四九

吉原藝者—幫間—お針—若い者—妓夫—消炭—文使用
女郎の艶書等

第四編 吉原の遊客……………一五八

第一章 吉原附近の地理……………一五八

向島(隅田、梅若、竹屋)—柳島—龜戸—柳橋—船宿—附猪牙
舟—首尾の松—嬉の森—駒留石—多田薬師—駒形丸堂
—聖天—山谷—附非式—眞崎稻荷—淺草觀音—附年の市—馬
道—六郷邸—富士淺間社—田町—八丁土堤—附四手駕—鷺
神社—附西の町—正燈寺(附録眞間の紅葉)—大音寺—箕輪—
坂下—上野等

第二章 武士……………一九二

第三章 僧徒……………一九八

第四章 息子附親の異見……………二〇〇

第五章 亭主附女房の格氣……………二一三

第六章 遊客總幕裡……………二二〇

店者—地廻—其他一般の遊客等

第五編 吉原以外の遊所……………二二五

第一章 岡場所……………二二七

深川—仲町—新地—土橋—石場—裏表橋下—掘堀—
鷺—松井町—常盤町—金猫—銀猫—根津—以呂波—

香羽町—毛吳紹—五十雜—三田三角—山猫—高輪等

第二章 夜鷹附私娼……………二四一

柳原—撞木橋—吉田町—鮫ヶ橋—舟役頭—提重—綿擔
—矢場女—茶汲女—酌婦等

第三章 藝者と踊子……………二五二

第四章 陰間……………二六五

第五章 四宿……………二六九

品川—新宿—板橋—千住等

参照繪圖目次

元吉原附近の見取圖……………二—三

元吉原の圖……………二—三

新吉原の圖……………二二—二三

文化 吉原細見表紙裏附……………一〇四—一〇五

七年版 吉原附近の見取圖……………一五八—一五九

天保時代深川の圖……………二二八—二二九

江戸研究 川柳吉原志目次終

江戸川柳吉原志

文學博士 佐々醒雪 共編
西原柳雨

第一編 吉原の沿革

第一章 吉原の由來

元吉原—新吉原

元和三年三月、庄司甚右衛門が時の政廳に請うて、江戸市内各所に散在せる遊女屋を堺町の附近二町四方ばかりの地に集めて一廓としたのが、抑々花の吉原の根原である。當時其附近は葭茅生ひ茂りたる沼地であつたので、最初葭原と名づけたのであるが、後、繁昌を壽ぎて吉原と改めた。最初はその曲輪を轡形の十字街に區劃して、江戸町角町の二町を作り、追々擴張して、五丁町全く建揃うたのは、草分より彼是十年の後、即ち寛永三年の十月である。それから約三十年を経たる明暦の二年に、現在の地に所換を命ぜられ、翌年の八月に花々しく開業し、元吉原に對して新吉原と號した。茲に江戸の吉原か吉原の江戸かを疑はしむるばかりの一大不夜城が築き上げられたのである。

● 吉原のくにとこたちは甚右衛門

花魁の異名
 一 當時鐘樓ありたり
 一 十軒店近所あり

元吉原二丁町の裏は五丁町なり
 一 二丁町と五丁町とを裏の目に利かす
 一 大門通金物見世多し
 一 大門番人(第二編第二章参照)

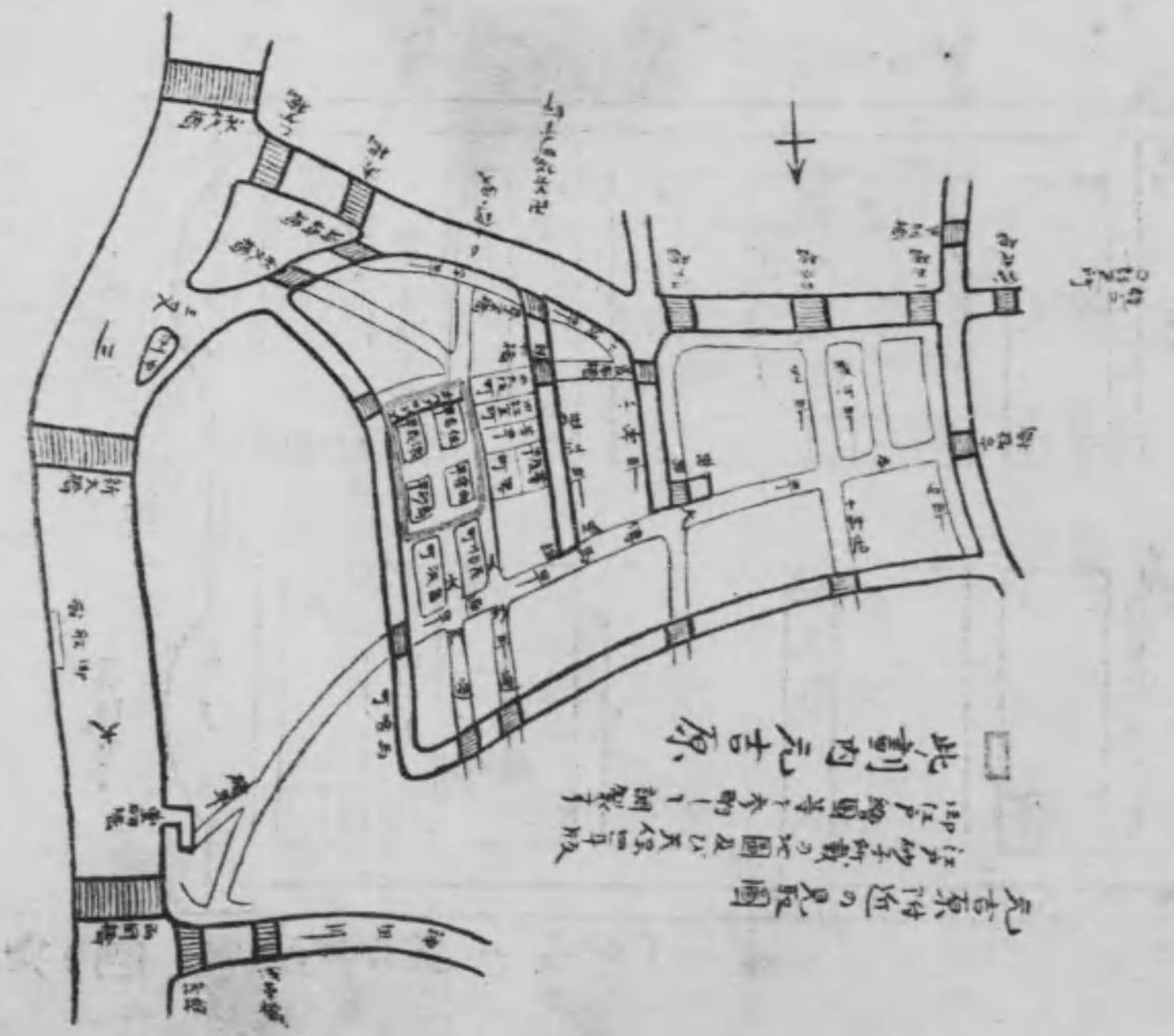
指物見世、女郎の部屋を寓す(第三編第二章参照)

夏草やの振り
 一 張見世の時彈く三味線(第二編第四章参照)

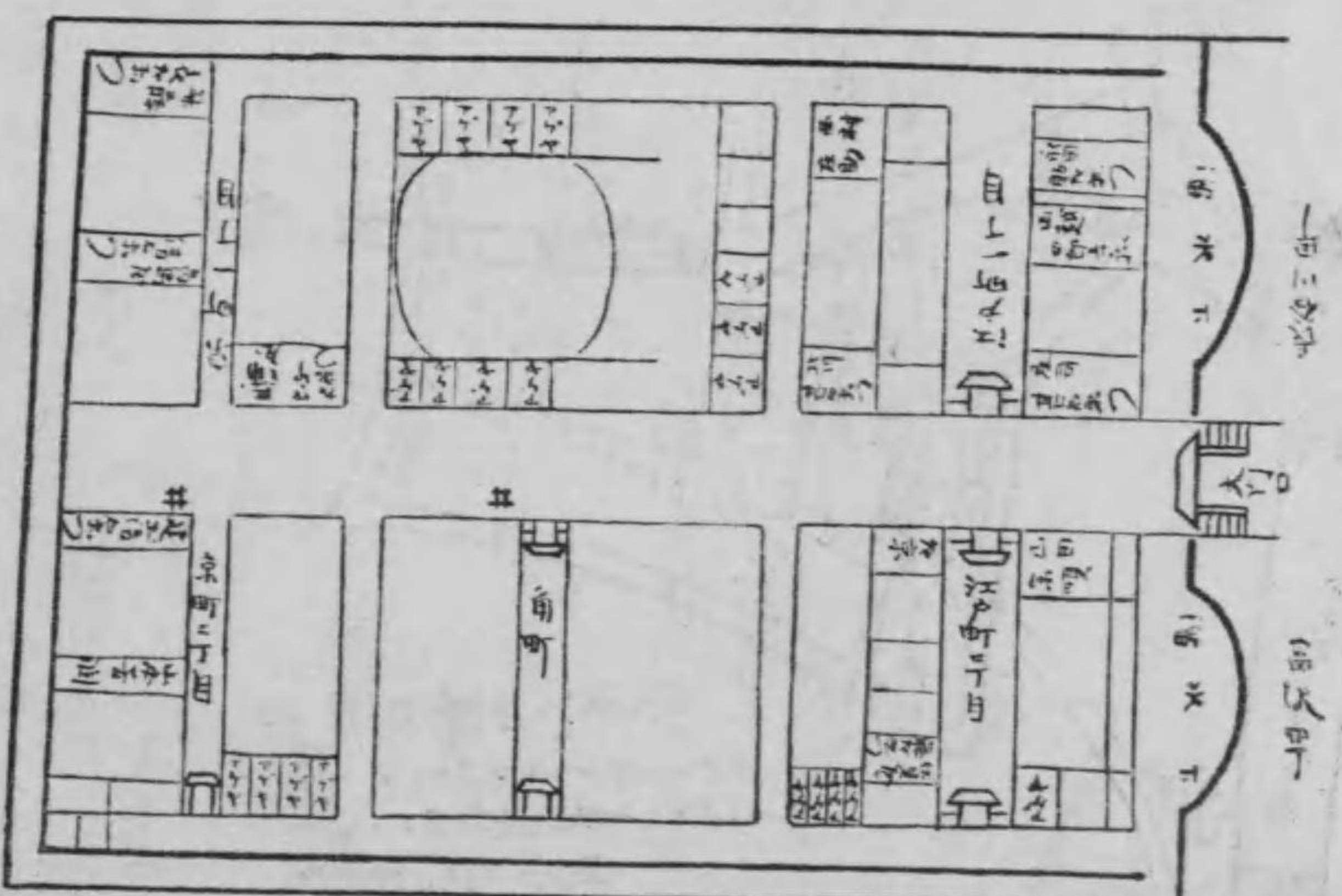
廓内賣店の人を呼ぶ語(第三編第二章参照)

今も鐵砲河岸は切見世なり
 一 龍の口評定所近

- 花 花咲かせ爺々イは庄司甚右衛門
- 花 よしの根は絶えて後には女郎花
- 花 葦切の後に鳳凰今は住み
- 石 石町の鐘で昔は引ヶを打ち
- 石 石町の四つには雛の見世も引け
- 石 石町は無情に遠き鐘の聲
- 芝 芝居をかづけ昔は女郎買
- 二 二の裏は五と芝居から町へぬけ
- 元 元吉原で如露(女郎)を買ふおとなし
- 四 四郎兵衛が昔居たあと金物屋
- 金 金銀をすてたる後へ金物屋
- 大 大門のあとも火鉢で見世を張り
- 元 元吉原も空簞笥ならべとく
- 古 古の亡八(轡)屋今は馬具屋なり
- 大 大丸の向う一萬三千里
- 大 大丸屋傾城共が夢のあと
- 大 大丸のあたりすがき彈いたあと
- 大 大門を呉服屋一家丸にする
- 大 大丸屋向うの人の居たあたり
- 向 向うの人ウの跡仕立屋アなり
- 鐵 鐵砲町あたり昔の局見世
- 常 常盤橋御用の女郎通るなり



元吉原の圖 (異本同巻記圖一抄子)



飯盛

○ 参照

(前略)、傳へ聞く、かの廓御免ありて立置るゝは、御評定所にて御役人方御酒飯を御頂戴御給使のために、日々遊女三人づつ出て勤仕せしとなり。(下略) (神代傳説)

遊女の評定所の御用に通ひしは、明暦大火、前吉原町今の堺町の東にありしとき也。其評定所へいづる遊女各其當番にて、前夜には客をとらず、評定所へ出てたてる舞を挽也。夫よりして今客なきを茶をひくといふ。云々 (東秋飄著、墨水消夏録)

吉原へや行かん、
堺町へや行かん
思案しけるより此
名ありと

荒布橋は親仁橋
の南に架す

○ 参照

(前略)、其町五町にとりたて、その名を吉原町といふ。其五町は京町、角町、江戸町、同二丁目、揚屋町、都合五町。一方口の門を大きく作り、これを大門口といふ。其中通を中の町といふ。されば今に大門通の古名のこれり。その始駿河國より下れる二十五人のもの、各二十四五歳三十歳を過ぎぬものども也。其内庄司甚右衛門四十五六歳ばかりにて下りける故、一列の中心にて彼の甚右衛門をつねくおやちと呼びける。然るに此五町に作りし町の一二丁西の方殊の外霞沼の沙入にて、路次あしく、客人通ひ兼ねゆるゑ、甚右衛門世話をやきて水をはき、橋をか

けて往来せしむ。親父がせわをやき懸たる橋故その名をおやちばしとよび、下略。(墨水消夏録)

御給使でざんすと並ぶ御評席

盛りては品川御給使は吉原

花 思案橋ろくな思案の出ぬ所

花 どの道に歸る思案の橋でなし

政 名を聞いて孝子は踏まぬ親仁橋

政 かけかへて又若がへる親仁ばし

荒布から親仁いそくしてわたり

第二章 吉原にて起りたる出来事

失火附(假宅) 紀文奈良茂の大散財—仙臺、
 榊原、名古屋侯の放埒—治郎左衛門の刃傷
 —權八小紫の心中及び狂言戯作上の情話
 以上は其主なるものであるが、現在の土地に移轉した以來
 あたら不夜城の全部若くは一部の烏有に歸したる祝融の災
 は、十回以上ありて、その都度願濟の上假宅を設けて、一
 時の娼賣を營んだ場所は、多くは今戸、山谷、田町、山の
 宿、花川戸、兩國、深川等である。

- ⑤ 假宅のあと見世を張る今戸焼
- ⑥ 生きた姉さんも今戸に並んでる
- ⑦ あべこべに廓から山の宿へ越し
- ⑧ 假の籬に夕顔の花川戸
- ⑨ 見物は八重九重に花川戸
- ⑩ 四郎兵衛もひやかに行く花川戸
- ⑪ 月雪がなくて氣軽な花川戸
- ⑫ 中洲今馬鹿者共が夢のあと
- ⑬ 若い時泣かず(中洲)に遊んだは親仁
- ⑭ 新地の蛤吹出した五明樓
- ⑮ 五明樓淺黄愚案にあちかねる
- ⑯ あふがれてフハッと上る五明樓

—(第二編第三章參照)
 —夏草やの綴り

—蟹氣樓の見立

—北斗星を細見の星に利かす

—禿の返辭長く引く(第三編第四章參照)

參照

延寶四、十一月失火假宅なし○明和五、十一月失火假宅今戸
 橋場山谷島越○明和八、四月失火假宅同前○安永元、二月失火
 假宅兩國橋邊深川○天明元、九月失火假宅なし○天明四、四月失
 火假宅兩國並木駒形黒船町○天明七、十一月失火假宅大橋邊深
 川新地同八橋前中洲高橋○寛政六、四月失火假宅田町聖天町山
 の宿瓦町○寛政十二、二月失火假宅同前○文化十三、五月失火
 假宅同○(京山百樹著「蜘蛛の糸巻」抜抄)
 天明七年末の十一月九日角町より失火、假宅大橋、深川新地、
 中洲、深川宮永町、高橋(中略)、中洲ありし比は五月節句より
 夜見世あり。鶴市の外見世物、辻賣、千燈萬照、かゝる中に彼
 の四季庵(五明樓(扇屋宇右衛門))をはじめ、北廓の娼家こゝ
 かしこへ假宅して夜見世の賑ひ、天明中の一壯觀、筆にも詞に
 もつくしがたし。下略。(同書)

「沖の暗さのに白帆が見えるあれは紀の國蜜柑船」と謠は
 れてゐる紀の國屋文左衛門が蜜柑船の冒險に暴利を占め、
 其後本八丁堀に材木の御用達を營んで、益々發展し、嘗て吉
 原の大門を打つて一世の豪遊を極め、適(アツク)紀文大盡の名を
 後の世に残した一件などは、深川黒江町の材木商奈良屋茂
 左衛門の大散財と共に、先づ以て吉原史上特筆大書すべき
 出来事と云はねばなるまじ。

—千兩

、⑰ 兩方の手で大門を紀文しめ
 、⑱ 大きな門を材木でしめるなり

—太夫

- ⑤ 大門を八丁堀の客が打ち
- ⑥ 傾城を根太っ切買ふ材木屋
- ⑦ くるわの松をみんな買ふ材木屋
- ⑧ 吉原も一度買べしたところ
- ⑨ 材木で通路のとまるきつこと
- ⑩ 吉原で一人遊は材木屋
- ⑪ 紀の國屋からと大門たしくなり
- ⑫ 紀文へことわり千社参を入れ
- ⑬ 材木に巢をかけて待つ女郎蜘蛛
- ⑭ 材木は儲かるものと遣手いひ
- ⑮ 材木屋見世のあかるいつづれ前
- ⑯ みかん籠(駕)下にくと仲の丁
- ⑰ 紀の國屋蜜柑のやうに金をまき
- ⑱ 千兩の蜜柑五丁へまきちらし
- ⑲ 鳥籠へ蜜柑を入れて口をしめ
- ⑳ 千兩の裏はいまだにつけてなし
- ㉑ イヨ紀の國屋と三千人でほめ
- ㉒ 大騒五丁に客が一人なり
- ㉓ 婬酒にふけて朝起はせぬ奈良茂
- ㉔ 家名からしてなまくらな茂左衛門
- ㉕ 奈良物も五丁町では切れる也

—奈良にて打ち出す刀劍

夫から三圍稻荷の雨乞で俳名滿都を歴したる晋其角といふ

—澤村訥升に擬す

—奈良の朝起に言掛けたる趣向

—吉原

十徳男。紀文の取巻として、例の金屏風の落書など、大分柳界を賑はしてゐる。

—夕立や田をみめぐりの神ならば

- ① 紀文の涼夕立を供につれ
- ② 小便に花をさかせた俳諧師
- ③ 小便は五文字雨には十七字
- ④ 兩便のほまれ野の萩花の山
- ⑤ 鳥居でも書くかと思や花の山
- ⑥ 小便を奇麗にふいた花の山
- ⑦ 雨乞の外小便も名を流し
- ⑧ 五文字足す迄は不興な花の山

—西行はいかなる旅もして見たが萩のはねぐそ是がしはじめ

次は男が好うて金持で、夫で高尾に振附けられた淺黄裏の親玉、仙臺様の廓通であるが、伽羅の下駄だの三又の提軒だの、多くは芝居狂言などより脱化したるものにて、勿論正史とは事實大に相違して居るといふ事は、豫め断つておく。竹に雀の紋、紅葉の紋、紅葉豆腐、島田重三郎などもその好題目であつた。

—紀文と竹に雀

- ① 材木と竹がお客のかしら也
- ② 三浦では吉原雀さまといひ
- ③ 佞人がよつて吉原雀にし
- ④ 紅葉には雀しなよくとめぬなり
- ⑤ 雀をばなるたけさうであひしらひ
- ⑥ 雀にはさゝの相手はいやであす

—高尾の紋、京都、高尾山に因める

一生憎松の位なり
雀の敵
竹に雀の紋を利かす
鳥田重三郎

陸奥の信夫も
ちずり唯故にみだ
れそめにし我なら
なくに
當時の俗、眞面
目の人は思ひず

宮城野

高尾を秤に掛く
仙臺米
越後高田米なる
べし
仙臺米

五十餘郡を枕詞
に利かす

仙臺通寶
仙臺と紀文

陸奥の十符の
菅七符にて君を
ねさせて三符に我
腹ん
陸奥の名産

花 竹の位だと雀ももてるとこ
花 前世では高尾舌切婆々なり
花 鍋敷に葉がありいすとしのふいひ
花 信夫摺よりは高尾は縞(島)がすき
花 又例の下駄の客かと鳥田いひ
花 文字摺はいや縞(島)ちりがようざんす
花 しのぶずり召して女郎にみだれそめ
花 釣臺で高尾へおくる信夫摺
花 國守たる身にあるまじき日和下駄
花 御放埒萩大名の紅葉狩
花 萩の土地紅葉はとんと植附かず
花 濡れにくる萩を紅葉はふりとほし
花 夕買は米屋箱買は材木屋
花 五斗よりも三斗五升の方がもて
花 五斗俵を高尾自由にとりまはし
花 五十の守(石上)ふるとは稀な里の意地
花 全體が高尾米屋に行く氣なし
花 傾城の誠四角な錢をふり
花 角錢と文錢えらいどらをうち
花 七符にも三符にも高尾寝ぬ氣也
花 十符よりも縞(島)の財布がようざんす
花 色町の紅葉細布と胸あはず

我思ふ女の門に
錦木とて染めたる
木片を立つること
陸奥の古俗也
伊達家の二本道
具

深草少將に言掛

田舎武士

唐時の松
神田川掘割

大井川の島田宿
を利かす

第二章 吉原にて起りたる出来事

花 錦木を紅葉に立てる無駄なこと
花 通例の女郎にふれぬ大鳥毛
花 大鳥毛高尾立派にふりとほし
花 大鳥毛其後ねつから振りてなし
花 大鳥毛通す意氣地はさとの伊達道具
花 伊達少將も百夜ほどおん通ひ
花 伊達ざらひ吉原中に只一人
花 釣れぬ筈仙臺堀で紅葉鮎
花 陸(陸奥)言はさらひざんすと高尾いひ
花 三浦では紅葉のゑさで鮎(陸奥)をつり
花 龍宮の揚屋淺黄は鮎(陸奥)の魚
花 黄金花咲くみちのくの客をふり
花 金箔の附いた淺黄を高尾ふり
花 ふつて名の高いは紅葉一つ松
花 山も割る威勢の客をふりとほし
花 紅葉の方といふべきにあしこと
花 すなほにするとお高様く
花 従ふと紅葉の御殿出來るとこ
花 おふられ遊ばすげなと奥でいひ
花 お朝寝の御次高尾が噂なり
花 明女敵とおもへど鳥田齒がたはず
花 揚詰のうち川留に鳥田あひ

一 妾の意を寓す

一 「ほのく」との文句取
一 貧乏侍藏前に持てず

- 〔安〕 島田より金谷の方に受出され
- 〔花〕 高尾の新造島田ばかりを大事にし
- 〔實〕 傾城の島田高尾が結びはじめ
- 〔明〕 島田くずしには高尾は結はぬなり
- 〔花〕 島田には結(云)はぬ高尾の亂髪
- 〔花〕 三浦屋へ島がくれ行くおもしろさ
- 〔安〕 されども島田札差にはふられ
- 〔花〕 焚物を履物にする御放埒
- 〔花〕 無駄足に移香のする御放埒
- 〔花〕 足の裏まで匂つてももてぬなり
- 〔安〕 十九文程ももてない伽羅の下駄
- 〔安〕 結構な御下駄を蹴出す八文字
- 〔安〕 伽羅の御下駄を踏附にする高尾
- 〔花〕 無駄足に召したは伽羅の御下駄也
- 〔安〕 本降(振)に下駄とは君のぬかりなり
- 〔花〕 金のわらぢで尋ねてもない御下駄
- 〔花〕 伊達なこと唐木に穴を六つあけ
- 〔花〕 唐木屋へ下駄屋を雇ふ珍しさ
- 〔安〕 下駄屋でもよつばと伽羅を盗むなり
- 〔安〕 あるく度一二兩づつ下駄がへり
- 〔花〕 天竺の下駄で日本の坂を下り
- 〔安〕 桐でない御下駄鳳凰來儀せず

一 金目と景目との雨方に言掛く
一 日本堤

一 天竺の佛師

一 淺草境内にある石像、戀の類叶ふとて詣つて文を結付くるもの多し

一 早く歸へす呪、蒸るに困る
一 香聞の遊に伽羅でさんすと也
一 豆腐には紅葉の印をつけたり、紅葉豆腐より起れりといふはそれより豆腐屋の窓に下駄を投じたる脚色起れり

高 一 三の数のつく金

一 雪花菜の代なるべし

一 片倉小十郎片眼なりしと
一 政宗も片眼なりき

- 〔安〕 毘首羯磨の作ともいふやうな下駄
- 〔保〕 平内へ内々伽羅の下駄も召し
- 〔保〕 伽羅の香に脊中をひけて名を残し
- 〔花〕 履物に灸も据ゑられぬと高尾
- 〔花〕 客人でさんすと香の札を入れ
- 〔花〕 豆腐屋と下駄屋一度に倉を建て
- 〔安〕 民の竈をにほはせる御放埒
- 〔花〕 すでのこと伽羅で豆腐を焚く所
- 〔安〕 胡麻揚の臭が下駄におつ消され
- 〔安〕 眞鍮の庖丁で下駄削つて見る
- 〔花〕 豆腐屋も下駄目位はしよめたり
- 〔安〕 豆腐屋の下駄を又はく生薬屋
- 〔安〕 鼻をピリ／＼豆腐屋の兩隣
- 〔明〕 下駄を見に入らぬ豆腐を買ひゆき
- 〔花〕 小半丁くんと鼻をひくつかせ
- 〔花〕 大守のお下駄一文で見てかへり
- 〔安〕 豆腐屋の起きたも丁度明の六つ(陸奥)
- 〔保〕 秋(安藝)が来て紅葉の根までほぢり出し
- 〔花〕 御鼻緒は何をすげたと小十郎
- 〔安〕 御放埒臣が一つの目にあまり
- 〔安〕 伊達に目は二つ入らぬと小十郎
- 〔明〕 朝がへり竹に雀の鳴く時分

(孫) 今日も亦ふくら雀でおん歸り
 (花) 朝がへり一つ眼ににらまれる
 (花) 門番へ化けたは一つ眼なり
 (花) 主人相しらず門番國家老
 (花) 六つ(陸奥)時分門に固め(片目)の國家老
 (花) 我門の固め(片目)に殿もおんこまり
 (花) 綱をゆるさぬ門番の國家老
 (花) 朝がへりヤット大木戸あけて入れ
 (花) 伊達ヶ關其頃ならばお供なり
 (孫) なげられぬ手をと角力へ御相談
 (花) もてる手を汝知らぬか梶之助
 (花) 柴(芝)舟へ乗つて三浦へおん通ひ
 (天) 柴(芝)舟で火のつくやうにおん通ひ
 (孫) 芝のなら反魂丹も合ひいせん
 (孫) 無駄足は深草の杓芝の下駄
 (花) ふところへはじめ高尾五百入れ
 (天) すきんせんことちきりにぶら下り
 (天) はかりに掛けて高尾はびんとする
 (孫) おいらん浮雲なうあすと秤をおさえ
 (花) 江戸の張秤へかけてびんとする
 (花) 其時はごふの秤のおもひなり
 (孫) 前表は薄いちきりにぶらさがり

半面に綱宗を利
 伊達の大木戸の
 語を利かす
 角力取

御抱力士
 仙臺屋敷芝にあ、

芝田町四丁目藥
 店堀屋

體量を増す爲な
 らん、目がへの金
 にて身受せられん
 とせるなり

閻魔の廳にある
 といふ秤
 やがて地獄へ赴
 く兆

秤を商ふ家の名

橋姫
 永代橋西詰に宿
 地神の宮あり出
 人いふ仙臺高尾の
 首流れ寄りけるを
 埋めてハ祠を建て

女郎の説
 揚貴妃の殺され
 し所

(孫) 情のなき座敷へ秤もつて出る
 (花) 傾城と下駄に守隨がまかり出て
 (孫) 三浦屋の亭主閻魔の身で坐り
 (天) 尻が小さいと三浦屋まだ不足
 (天) あれなれば貫目があると遣手いひ
 (天) あやかれと後で禿をかけて見る
 (花) 山吹と紅葉兩天秤に掛け
 (孫) 人參のやうにこしらへ三浦かけ
 (天) 其儘で高尾が乗ると沈むなり
 (孫) 船まではあやかりものとみんな云ひ
 (孫) 美しい顔をふくらし船に乗り
 (孫) 亂酒の振舞船中の御手料理
 (孫) 高尾丸仙臺堀へ尻を向け
 (花) 意地を張りつめて氷の下紅葉
 (孫) 高尾からはつきりわかる江戸の張
 (孫) 三又は金で武勇を振ふとこ
 (花) 三又の最期三十日の月夜なり
 (花) 三又と馬嵬和漢のをしいもの
 (花) 傾城のかゞみを船で破却する
 (孫) 橋と紅葉操の海と川
 (花) 江戸の張永代残す貞女なり
 (孫) 樓門を出て三又へ紅流し

——第一編 吉原の沿革——
し也云々と高尾考
にあり
四手糊

く紅葉豆腐に言掛

提斬は身受して
屋敷へ連れ歸る途
中なり
神田川や三又川

袖ヶ崎押込隠居

花 瑠璃(大枚)の櫛三又の四手上げ
 花 大川へ紅葉流しの伊達模様
 花 泥中のはちすを抜いて船で切り
 花 活花にならぬ紅葉は切つてすて
 花 泥水に錦を殘しちる紅葉
 花 鮫鱈のやうに船にて御料理
 花 紅葉は沈み豆腐屋は浮かむなり
 花 名の高い紅葉雀が来てちらし
 花 大守でも傾く城はおとしかね
 花 奥中で高尾が顔を待ぼうけ
 花 あ御家とかく川にて金をすて
 花 御茶の水出来上る頃お目が覺
 花 無理無體雀は袖へおしこまれ
 花 おん心きたへ直して袖ヶ崎
 花 御後悔しぼりかねたる袖ヶ崎
 〇 高尾に肘を食つた腹癒に、薄雲太夫を根引して手活の花と
 詠めたとあるは、三又の提斬と共に取るに足らぬ妄譚なる
 ことは明なることである。句面より推せば薄雲は海老屋の
 抱の様にも見ゆるが、過關録などには、三浦屋の遊女にて
 高尾の次位となし、神原の受出したのは實は高尾ではなく
 て此薄雲であるとする。又墨水消夏録には、仙臺侯高尾を
 受出さんとする間に、不幸にも高尾が病死したので、其

代りに薄雲を根引したといふやうなことが書いてある。
 結局高尾薄雲が事に關しては異説紛々として、何が何やら
 判然分らぬ。そこらはよろしく其道の専門家の考證に待つ
 としておくべし。又猫を愛した薄雲といふのは代達の同名
 異人ならんか。

後指の痕

天 振(降)りさうな名の薄雲はふらぬなり
 花 ふりつゞく後に薄雲なびくなり
 花 薄雲で少しは晴れたお胸なり
 花 薄雲になつて三十日の月も見え
 花 松島へうつすりとした雲なびき
 花 薄雲はいつそ松島見たうおす
 花 薄雲が座敷は伽羅で蚊をいぶし
 天 錦木を薄雲ぢきに取入れる
 花 薄雲は七符をあけて三符にねる
 花 薄雲は當世高尾古風なり
 天 薄雲が脊中其頃指だらけ
 花 餘の客は入らぬと姿海老屋いひ
 花 薄雲で海老屋も鯛をつる氣也
 花 薄雲が猫は鼠をとらぬなり
 花 薄雲は小さな鈴がなると出る
 花 猫のやうな傾城は薄雲なり
 天 通仕立の猫抱へてすゑて居る

一木天蓼、猫の妙

一其角の發句集

薄雲の禿また、びくんなんし

京町の猫は通はぬ伏見町

猫通ふ發句は又の五元(御見)集

通ひけり江戸中の猫揚屋町

揚屋町通ふ按摩も猫脊中

切見世のお職鼠を寵愛し

大船の猫に對し、
御次は見、事情人に成濟し、寛保の元年にとりく十
代高尾を根扱にして、下谷池の端の中屋敷に移し植ゑ、掌
裡の花と詠めたとある。

御次は罷出でたるものは越後高田の城主榊原式部太輔にて

候が、是は見、事情人に成濟し、寛保の元年にとりく十

代高尾を根扱にして、下谷池の端の中屋敷に移し植ゑ、掌

裡の花と詠めたとある。

大門へ神のはひる賑かさ

四天王一人紅葉を根こぎにし

二本目の紅葉車にひかれてく

通ひ車(曲輪)と浮名立つ御放埒

車坂下を二度目の高尾行き

果報いみじく御物見て蓮を見る

一仙臺高尾

一松の位の太夫

一放埒上間に達し
證愼整居を命ぜら
る

一尾崎富右衛門
口を以て高尾は
守り兄弟は
不慮と存し救は
ず申立ちて御家
安泰なりしとなり

三又の後は冥加な蓮を見る

船車同じ流のうきしづみ

仕合はせは車むごいは秤也

仇は船恩は車へつんで行き

運不運後の高尾はお手車

紅葉の賀源氏車へ乗つて行き

紅葉狩したので後は車留

運のいゝ高尾は車留になり

神の威松も根こそぎ引ぬかれ

受出した後は五丁の車留

家老職紅葉をぬいて車留

車より留守居の舌はよく廻り

高尾より器量すぐれた留守居也

傾城を乳母が子にする口車

乳母の子にして尾を出さぬきつゝいこと

申譯 神と紅葉 乳兄弟

安 乳兄弟なら尤で事がすみ

大社 神へ紅葉むすびつけ

天 連理の枝は紅葉と神なり

天 御隣は加賀様かへと高尾さく

天 バットした金三浦屋へ二度はひり

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

天 車屋はひつこみ米屋破船する

○ 偕て傾城三幅對の鈍尻に控へたのが、金の鯨鉾を手玉に取つた春日野太夫である。紀州の吉宗公に八代將軍を取られた鬱憤を洩らして、直押に追手の大門より攻め寄せたる尾張侯にかじり附いて、東海道は五十三次の景を模したる尾庭で名高き外山御殿に、御部屋様に成り濟したとは、講談などにて汎く世に傳へられてゐるが、是亦正史とは無論相違があらう。

— 瑠璃の傘

— 春日野

— 紅葉即ち高尾

— 似たり寄つたり

- 花 籠甲と伽羅は榮華の沓冠
- 花 御放埒春は籠甲秋は伽羅
- 花 大きなどらは春の傘秋の下駄
- 花 傘と下駄オツカツの御大祿
- 花 御下駄はふられ傘は持てるなり
- 花 傘も下駄も三浦は派手なこと
- 花 誠の傾城買傘や下駄なり
- 花 下駄かさにつゞき材木きつこと

— 紀文

- 天 傾城は三人あとは女郎なり
- 花 御納戸金が吉原へ三度おち
- 花 い、御かさ櫛が何枚出来いせう

— 弁

- 花 しのぎの百本も出来るかさを召し
- 花 大枚(瑠璃)の金のかゝつた傘をめし
- 花 鯨鉾はばらふの傘へすきとほり
- 花 傘をさそなら春日野はきつこと
- 花 かがよう似たといひての無いを召し
- 花 春日野も傘の骨ほどさしちらし
- 花 春日のえんで結構な傘を召し
- 花 春日野へしかも名高い一人客
- 花 春日野は四人、となき客をもち
- 花 大三十日春日野一人うらやまれ
- 花 春日野は東海道を八文字
- 花 外山では箱根八の字などで越し
- 花 駒下駄で越すはお庭の箱根山
- 花 駒下駄の旅は外山と仲の丁
- 花 打掛で渡る外山の大井川

— 當時の俗、素人は履かず

大名連中が狐鼠々々吉原通ひをするといふ噂を聞いて、備前光政公が金紋先箱の本供で、ホー先退けノと大門へ繰込んだといふ、頗る振るつた逸話だの、其他芝居や淨瑠璃などの側にて人口に膾炙せる、不破名古屋の鞆當、治郎左衛門籠釣瓶の刃傷、果ては權八小紫、助六揚巻、時治郎浦里の情事だの、柳界の二番目ものが二三句づつ活躍してゐる。

池田家史

池田公にあらざる便
宜上茲にかゝる

〔政〕 蝶空晴れてくる花のさと
〔明〕 からかさの事池田でもいつか知り
〔安〕 本格で行くと曲輪へおさまらず
〔花〕 本供でくると土手中合羽箱

〔明〕 遣手をばばらしはぐつた治郎左衛門

〔政〕 次郎左衛門捕手は猫のくそをよみ

〔政〕 大騒橋を八つに切りおとし

〔花〕 誠ある傾城紅葉かきつばた

〔安〕 苗字からしてすれくの伴左衛門

〔花〕 伴左衛門みんなと仲がわるいやう

〔花〕 泥中の蓮高尾に小むらさき

〔花〕 小紫江戸の氣性を立て通し

〔花〕 江戸町の水で仕立る小紫

〔花〕 比翼塚三十日に月の出た所

〔政〕 戀塚は鳥羽目黒には比翼塚

〔政〕 佐用姫にまけぬ戀塚ひよく塚

〔花〕 揚巻を鉢巻で買う江戸の張

〔花〕 名高い揚巻五丁と五十帖

〔探〕 浦里の襟にヒヤリと松の露

―江戸紫を利か
せる作意

―目黒にあり

―京都鳥羽にある
袈裟御前の墓

―源氏の巻にもあ
り

第二編 吉原の遊廓

第一章 廓外

衣紋坂——高札場——見返柳——
五十間——御齒黒洞——中田圃等

◆ 日本堤から衣紋坂を下れば、右手高札番屋の前に廓内禁制の條々を記したる制札が立ち、左手には例の見返柳が嬌々として風に靡いて居る。夫から大門口迄は所謂五十間として、くの字形に曲つた往來で、その右左には外茶屋がずらりと軒を並べて居る。

―四手駕—猪牙舟、〔花〕 岡着ケも舟で廻はすも衣紋坂

―禿坂より土手に上り土手より五十間へ下る、〔安〕 田町ではそり衣紋ではのめるなり

―吉原は江戸の東北に瀕る、〔花〕 息子には衣紋親仁に鬼門也

〔探〕 衣紋坂こゝも子知らず親知らず

〔花〕 異見する身も踏みはずす衣紋坂

〔政〕 待針を駕にしてゐる衣紋坂

〔天〕 よくむごくしたと追つつく衣紋坂

〔安〕 きつい奴衣紋坂からはづすなり

◆ 衣紋坂夜は一人り明け二人明け

◆ 衣紋坂四斗樽程の目があたり

―縫留の目印にさし置く針

當時江戸の俗花屋の表では柳の木を柳舟で看板となす
出口の柳は京都島原なれども此句吉原にも適用す

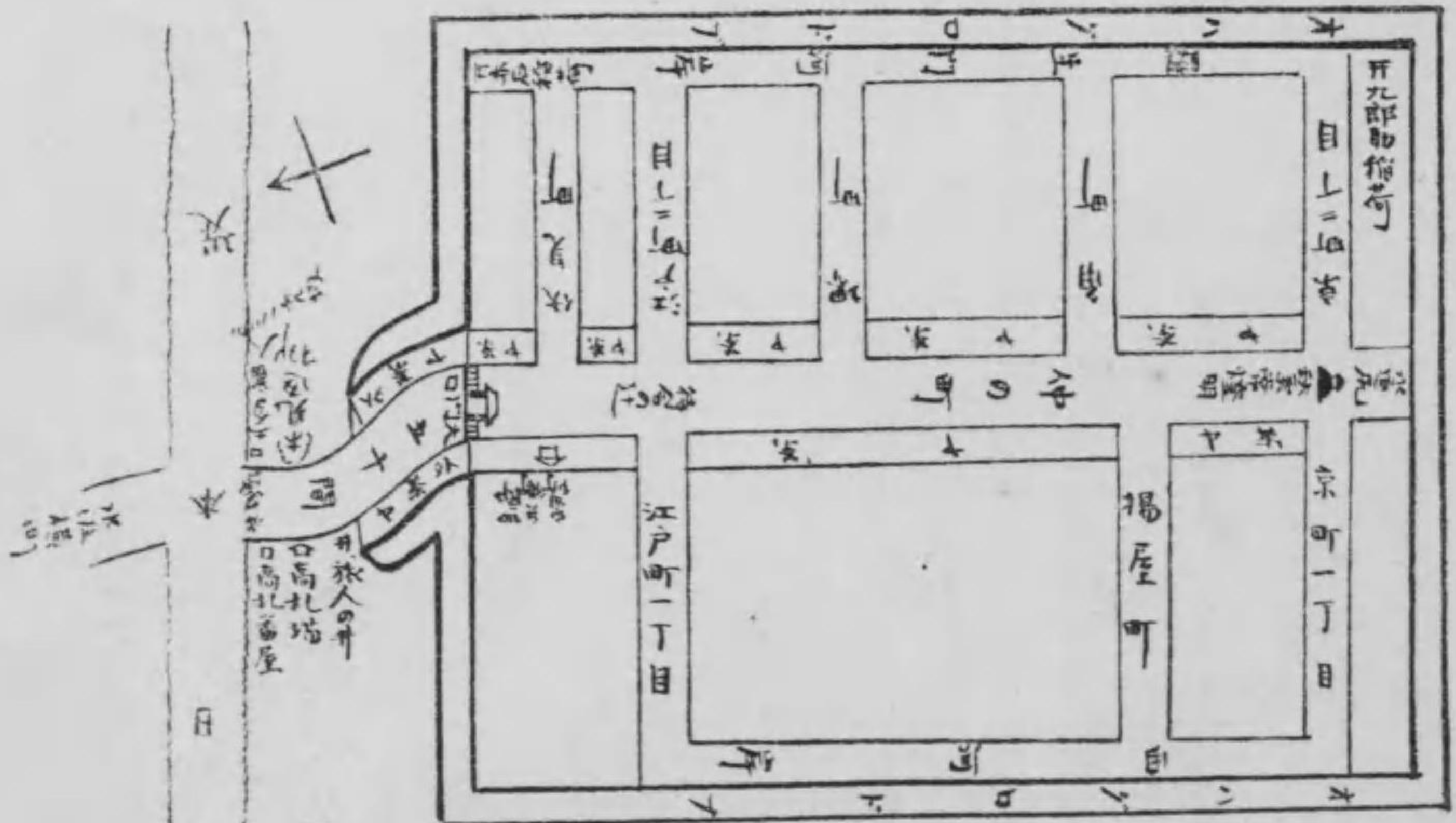
五十間はく字形に曲る
芝、新宿等にあ
見返柳の邊にありし居酒屋

見返と向ひ合ひたる茶屋、合稱して二軒茶屋とも云ひし
衣紋坂を下り十間程行きたる右手の方にありし井の名

大門乗打無用

吉原は月見の場所なれば日本に對し月本と謂ひ合はせたる文の句作なり
鐵漿に酒を混じて光澤をよくすることを利かしたる

探 歸には入らぬ地名の衣紋坂
 探 衣紋坂たびく下りて左り前
 探 人の花賣る目印も柳植え
 探 こんな腰ありと出口に植えておき
 花 出口の看板誰にもなびき候
 花 もてた奴ばかり見返る柳なり
 花 晝素見制札などを讀んでゐる
 花 三曲りの角に曲らぬ御高札
 花 大門と大木戸口に札の辻
 探 柳葉泥鰯見返で飲なほし
 探 柳葉の泥鰯見返る居酒屋世
 探 播磨屋で世界定めた安い奴
 探 旅人を過ぎ道中の仲の丁
 探 極樂と此世の間が五十間
 花 日本から極樂わづか五十間
 探 八丁と五丁の間が五十間
 探 四十四五間目で四手あろすなり
 花 日本を少しありると別世界
 花 日本から月本國の家根が見え
 花 日本からアリンヌ國は遠からず
 探 おはぐろは外泥水は内にあり
 花 吉原の酒は齒黒に流れこみ



新吉原界圖(江戸砂子墨本河房語圖寺所載の圖を今物一翻製す)

作意

〇 國者に家根を教へる中田圃
 〇 嫁菜をば踏附けて行く中田圃
 〇 狐に化かされて田圃を度々通り
 〇 中田圃本氣であるく所でなし
 〇 踏込で通ふ息子の中田圃
 〇 こゝいらに門を欲しいと田を巡り
 〇 此道ばかりは忘れぬと中田圃
 〇 實(身)を持つ奴がまかれてる中田圃
 〇 田圃路そこはぬからぬ小屋の婢
 〇 借下駄の蓮臺で越す中田圃

〇 非人小屋の貸下
 〇 賦を科かす

第二章 廓 内

〇 大門附四郎兵衛番所—仲の丁附引手茶屋—
 〇 水道尻—秋葉の常燈明—五丁町(江戸丁二、
 二、揚屋町、京町一、二)—伏見町—堺町—
 〇 角町—大中小雛附當時の名妓—西河岸—羅
 〇 生門河岸—切見世—廓内商店—九郎助稻荷
 〇 等

〇 ズット大門を通れば、右手の方に内外の出入を監視する所
 〇 謂四郎兵衛の番所といふものがあつて、夫から一直線に秋
 〇 葉の常燈明が薄茫乎と眠つたい光を放つて居る、水道尻の所

までの間が例の仲の丁として、その両側にズラリ引手茶屋の軒簾が掛け連ねられ、此通りの右側に江戸町一丁目、揚屋町、京町一丁目、左側に伏見町、江戸町二丁目、堺町、角町、京町二丁目と算木を置いた様に順々に並んでゐる。左京二は最後に出来たので、又新町とも稱へられ、江戸より京一に至る裏手が西河岸、江戸二より京二に至る裏手が羅生門河岸、俗に鐵砲見世などと稱へらるゝ所で、朝霞も下等の娼戸が軒を並べて居る。

大名屋敷かと思ふ

扉を開閉する櫃の金具、片方に二つ宛つく

千兩を一箱といふ

朝の日本橋魚河岸、晝の芝居、夜の吉原は各日千兩と稱へらるゝ

將軍家御自身に据ゑらるゝ鷹御

江戸見物は大門でどなたさま
千兩で出しになる五十間
大門の扉かた／＼五百兩
ひぢつぽが一つで二百五十兩
大門は片手業ではいけぬなり
蒸籠(青樓)の蓋片手ではべられず
大門がしまると箱が一つ明き
一刻の價一日門をしめ
一日に千兩までは使はれる
橋も堤も日本は日千兩
夜と晝朝とにおちる日千兩
日に三箱ちる山吹は花の江戸
四郎兵衛に非番をさせるさつこと
御拳で日に千兩の門を打ち

鷹野御道路に當るときには大門を鎖したるものと思はる

頻に

須磨の關守に言寄す

禿の名に言掛けて關の字に結びたる趣向

女郎の脱出

九分九厘は虚病

入山形花魁の使ふ捕手
召捕らるゝ

大門を鷹もジロリと見て通り
一箱の主でも駕で入れぬ所
醫者の外乗打無用花のさと
四郎兵衛が關乗込むは醫者ばかり
御免駕中に細見よんでゐる
すだれ越しヤツベシのぞく御免駕
片扉二郎兵衛づつに目を配り
四郎兵衛は幾夜寝さめの姿也
四郎兵衛が關にも千鳥通ふなり
我通路の關守は四郎兵衛
四郎兵衛が關へ手形を女房出し
花守の生れかはりは四郎兵衛
門番にさへ通名をつけるなり
四郎兵衛(白堀)が尻はずらりと黒い堀
かつ走りたがるるへ堀をかけ
大門を出ると思案にけつまづき
大門をソットのぞいて娑婆を見る
大門を出る病人は百一つ
女の童大きな門に附けてあき
振袖の捕ったり二人、茶屋に待つ
山形が組子花かんざしで出る
あもしろさ仲の丁にてお手にあひ

一 驟の刑位では済まず格子戸附の揚り屋へ打込まれる覺悟を要す

一 禿の句以下數首伏しは限らず便宜上茲に並べたるのみ

一 帯の前に挟む金入 一 録引

一 仲の丁を通らず横に切るゝ恐あり 一 駒下駄一足

兎 鳥籠の口にひよっ子客を附け
 安 禿につかまると入墨ではすまず
 兎 通らねばならぬ所へ禿たち
 兎 仲の丁奇麗に袖にすがる所
 明 羽二重の急所を禿ひつつかみ
 明 死ねばつて放しはせぬと禿いひ
 明 ちよろこいやうでももげぬ禿の手
 逃げて見なんしと禿の高慢さ
 兎 二番手の禿前巾着をとり
 兎 三保谷になつて大門かけ出し
 天 禿を袖にぶらさげて逃るなり
 兎 からうじてのがれ羽織に紐がなし
 兎 叱られる禿羽織の紐ばかり
 兎 伏勢の大將軍は遣手なり
 ▲ 伏勢は大門口を楯にとり
 安 伏勢を置くは鐘四つ過のこと
 明 伏勢のあぶれはノロリノロリ来る
 安 伏勢にえり残されし笑ひずき
 兎 新造は伏見街道目をくばり
 天 駒二疋櫻の本へぬぎすてる
 明 ぞだくと駒下駄をぬくすばらしさ
 兎 駒下駄を早め伏勢をどり出し

一 文字に

一 番頭新造

一 今日親の命日の寺参りぢやはなせくなり

一 懐中一步切の客

一 死人ある家に簾を垂る

一 花の山の幕より仲の丁の簾

一 浮世産とて市松の丁のみには限らず

一 山口巴は仲の丁、茶屋なればなり

明 駒下駄を履きノ主をつかまへる
 兎 七文字へらして客をおつかける
 兎 番新が助太刀をして切っかける
 安 正真(精進)のうそを禿が引いてくる
 兎 駒下駄で生捕をひく仲の丁
 安 生捕を先へ引かせて八文字
 兎 素一步は用向のない仲の丁
 天 茶屋なしに行きやれ得たとひやかされ
 兎 皆同じやうな簾で門ちがひ
 兎 仲の丁忌中の札のないばかり
 兎 白い手で簾をかける仲の丁
 天 幕よりも簾の花がおもしろい
 兎 簾まで張を持つてる仲の丁
 兎 極樂の左右にならぶ鬼すだれ
 兎 堅くない座敷備後の石疊
 明 棒のない提灯で行くおもしろさ
 兎 おもしろさ箱提灯で花見なり
 兎 仲の丁銅鑼(放蕩兒)と太鼓幫間で大騒
 天 いつそもう氣をもんでさと茶屋でいひ
 明 仲の丁異見もしたりすゝめたり
 兎 巴に卷いた山口の青すだれ
 兎 山口よりぞ咲初めるさとの花

第二編 吉原の遊廓

唐詩選の文句
「船頭多く船を山に
乗上ぐといふ體」
詩を秀句に云へる趣向

「大門より江戸一角に至る間に並びし茶屋」
「猿屋町角敷の内、麥飯薯汁にやあらんか」
「君は今胸形あたり時鳥」の地口
「此章の末にあり」
「江戸二の入口角にありたる茶屋、冬は頭巾夏は菅笠に屋敷を記して貧民に施行したり」

参照



聲の物質圖の如き菅笠を腰に下げたる圖を描けり(石川雅望著「吉原十二時」)

山口は花間笑語のえみはじめ
山口へ船頭多く客をあけ
三人は巴に坐る山口屋
七軒ではうれん草のこともいひ
七軒(賢)の客竹林で腹なほし
野暮は今七軒あたり犬の聲
竹村の近所七軒(賢)人ならび
竹村の折七軒(賢)の暑氣見舞
森田屋は親をかぶつた後かぶり
内をかぶつて森田屋をかぶるなり
無雅でかぶるは森田屋の檜木笠

失策することを被るといふ
傾城買の糖味噌汁(謎)
「秋の夕暮の歌三つ共淋しきには似ぬとなり」
「三尺棒に言掛けて意氣な地廻りの哥兄さんなどをいふ」
「廓内に辻便所なく大門口に只一ヶ所ありたるのみ」
「吉原の地はもと水戸屋敷の茶捨場なりしと聞く」
八丁と五丁
「これはく」とばかり花の吉野山」
「葎屋町堺町の歌舞伎芝居」
江戸と京
三ヶの津皆揃ふなり
六丁
「家根に天水桶あり」
「昔武藏野にありて石の枕をさせし」
「森守田屋の頭巾寒夜勘彌を凌がせる」といふ
「森田屋が息子のかぶり仕舞なり」
「頭巾で来たが森田屋のお客だよ」
「練味噌の上汁を吸ふ仲の丁」
「三夕の外夕暮仲の丁」
「仲の丁末頼母しくないところ」
「明田舎者水道尻まで突當り」
「三千の化粧流る水道尻」

第二章 廊内

大門を口といふので水道尻
吉原の正面を張る秋葉燈
別世界常燈明を尻へ上げ
秋葉から左三尺帯がもて
肥溜も掃溜も見ぬ五丁町
五丁ある掃溜うさのすて所
五丁四方は錢金をまく畑
おもしろく田地を五丁おっふさぎ
子をすてる藪とは見えぬ五丁町
土手ともに十三丁の名所なり
これはく」とばかり花の五丁町
化けるのが二丁化かすが五丁也
粹(酸)な土地その町敷も梅の花
面白い筈二ヶの津が寄つてゐる
角町をのけて入れたき浪華町
大阪を入れると唐の一里也
地震には雨垂のする五丁町
吉原の才牙虫は屋根に涌き
人の見ぬ月影宿るさとの家根
行かぬかと天水桶へ指をさし
化かす家根天水桶へ狐拳
「一」家のあたりも今は塗枕

第二編 吉原の遊廓

と傳へられたる鬼
遊女の住家
遊女三千と稱せ
らる
吉原

江戸紫川京紅、
紫朱を頼ぶの意
を寓して京町の全
盛中頃より江戸町
に移りしことをい
ふ

紙子とまで落ぶ
れしは京町に通ぶ
なり、京町と江戸
町との間に揚屋町
あり

田圃の景女郎の
鏡臺に映る

蝶
「布團着て寝た
る姿や東山」

四九尻つた
花魁の道中と道
中双六とに言掛く

第二編(第八章
参照)
「喰はんか舟に言
掛けて張見世女郎
の居眠

其ほとり石よりこはい塗枕
六千の枕半分あてがなし
嘘(鸞)といふ鳥は大きな籠へすみ
ありがたひ八百もいふ江戸の町
江戸町へもどれば初手の顔はなし
江戸町は京町の色奪ふなり
紫と紙子をしきる揚屋町
京町へくるほづきはえり残り
京町へとまり鳥の袖頭巾
京町の鏡をあるく田草取
早乙女の名などを太鼓よんでみる
早乙女の仰向いて見る大一座
菜の花にアレ見や主の紋が飛ぶ
京町で居續客の東山
田圃くる客二階から當つくら
京町へ江戸をくらのた奴がくる
京町へ行つても張は強いなり
道中を見て京町へ上る客
新町で顔をひかれる安い客
桶伏々に似た新町の辻の井戸
籬でも夜舟漕いでる伏見町
居續も伏見は早く落城し

第二章 廊内

道の幅狭し
鐵砲疵なるべし
羅生門河原百文
の切見世へ行く安
客

江戸一の角にあ
りて細見の第一頁
に出づ
江戸一、松葉屋
の向うにあり暖簾
に火焰玉を描き出
せり

夜櫻を吉野に擬
して静の語を活か
したる趣向
明暦三は萬治元
年にて新吉原開廓
の年、扇屋は江戸
一にあり
旭丸屋中萬字屋
等
江戸一、扇屋宇
右衛門
畫三
「お職の意」本藍
甲の筭叙

「書花扇と解し
あり花扇は筆書に
堪能なりし名代の
遊女なり要は又婆
人とも書したる本
あり或は別に要人

酒くらはんか素小二朱の伏見町
雨垂におひまはされる伏見町
傘を輪違にする伏見町
疵のない人は通らぬ伏見町
百助は伏見町からスツト抜け
角町はなほく書に見物し
角町へ股引の客つきがよし
表紙をはねると松葉屋半左衛門
あつくなり火焰玉屋へ通ふなり
けんまくで火焰玉屋へ女房くる
花火からそれて揚るも火焰玉
玉屋の暖簾ふかしたて唐の芋
吉原の吉野玉屋の静出る
記(萬治)屋は草分ケらしい家號也
宇餘の家名をつける五丁町
扇屋のあたり五町のかなめ也
扇屋の要黒星二つなり
扇屋の骨本甲を十二本
扇屋は要傘屋は六郎(轆轤)兵衛
扇屋の要東江流に書き
江戸町に身は末廣の花扇
大文字を書くが扇の要なり

と呼ぶ遊女ありしが如くも思はる要を身家の丸黒柱と解すれば一人にてもよろしきか聊疑を存しおく

―長者の意
―普通他店にては二朱也

―京一の扇屋八郎兵衛をばらく扇屋といふ

―江戸一
―江戸二、鉢の木を利かす

―江戸二

―江戸二、百人一首を利かす

―京二

―江戸二、八景を利かす

―京二
―丁子屋別號、江戸二

三歩金東江流の扇なり
 扇屋へ行くので唐詩選ならひ
 夜市(興一)から息子扇屋的にゆき
 扇屋で息子萬燈あふぎ消し
 さすが扇屋新造も一步金
 扇屋の女衞箱入買あつめ
 見世を張らせるはばらく扇也
 佐野槌と後合はせの大黒屋
 佐野松へ雪のふる夜の坊主客
 坊主客滅多にふらぬ佐野松屋
 袖打はらふ佐野松の格子先
 赤蔦の籬に素見からんでる
 暖簾まで秋を染めたる赤蔦屋
 赤蔦が枯れて芽をふく久喜萬宇
 君が爲若菜屋に張る仕舞札
 若菜屋でつむ蒸籠も君が爲
 鈴はふる客はふらせる若松屋
 平野屋のむつごとつも暮の馬
 尾張屋の内所を客の佐屋廻り
 雞舌樓をブンくと淺黄下り
 丁山は見世での丁子頭なり
 丁子のあたり見物も上氣する

―道中双六の文句取り

―一族九十餘人朝比奈小林に言掛く同上

―京一にも角町にもありいづれも交り見世なり

―水道尻にあり、此下京一の角に岡本屋海老等あり以前三浦屋もこゝにありたり

―岡本屋の名妓
―新内に岡本流あり

―委海老角海老等
―京二

―旭如來參詣に託して新造の畫買をなす御客は蓋し耳袋に數珠を掛けたる老人なり

―京町の旭如來と九郎助精荷

一人あまらぬ大津屋の繁昌さ
 和田酒宴ほど小林屋大一座
 初對面味にくはせる小林屋
 仇な算段小林屋朝直し
 手際よく松をつくるも高砂屋
 火の見櫓の正面が三步なり
 五丁の立者長太夫吉十郎
 長太夫どこの御師だと親仁さ
 岡本長太夫新内かとははけ
 泥水に餘の魚はなし海老ばかり
 木曾殿の守本尊丸屋持ち
 吉原の彌陀木曾殿のゆかり也
 旭如來は女菩薩の地へ安置
 籠甲の後光旭の彌陀へさし
 吉原は夜も朝日を拜むとこ
 旭をば賣つて新造畫間買ひ
 旭の利益新造の客をよび
 みいらとり旭丸屋で殺される
 破れ後光で新町の彌陀へ行き
 黄昏に息子旭の彌陀へ行き
 細見の目貫一佛一社なり
 吉原は儒道が一つかけて居る

○ 参照

朝日如來又追分の彌陀と云ふ。惠心僧都宇治平等院におはせしとき、朝日の欄間にうつりたるに三尊の來迎あり、そのすがたをみづから彫刻し給ふと也。故に欄間佛ともいへり。信心のもの望めば拜ましむ。これは新町丸屋甚右衛門といふものゝ所にありしが、俗家の汚穢をいとひ、今は別庵に安置して新町北がはのうらにあり。(菊岡沾涼著「江戸砂子」)

△ 一體は地者きらひの彌陀もあり

西河岸小見世、
丈の句
第三編第二章參照

△ 茗荷屋の客寝忘れて朝がへり

△ 西河岸で向うの人は田植なり

△ 吉原も中仙道は難所也

△ 綱も及ばぬ角町のうら通り

△ 彫物の渡邊も行く羅生門

△ 羅生門腕をぬかれるかとおもひ

△ 其後は指や手を切る羅生門

△ 寄つて行きなんしとつかむ羅生門

△ 金札を立てさうな所でタタ百

△ 百日玉骨へからんで鼻へぬけ

△ 北狄の輕卒百の飛道具

△ 鏡砲の疵年をへて鼻へぬけ

△ 鏡砲の疵鍛冶町で鑄掛けさせ

△ 羅生門客三つ星の手にかゝり

△ 鏡砲見世に鑄直しの玉ばかり

△ いゝ玉で鏡砲見世はどんとあて

無疵の玉少し

三星毒藥

惡疾

一切見世百文

一切見世女郎の出奔
醜婦の異名又鐵砲を蝕といふ蓋し中るの義、八朝のこと次の章にあり、三日月長屋

△ おきあがれ鏡砲玉まで廓訛

△ 大騷鏡砲見世の玉がそれ

△ 八朝の雪見に河岸の蝕も賣れ

△ 吉原の十軒店はけちな雜

濡れたおせん(お煎)を三日月の形りにくひ

△ 日月のちがひお竹とお仙なり

△ お百さんお盛だねと戸へもたれ

△ 路次と白穂は四つぎりだなアお百

△ 百の茶は一疊半でひいてゐる

△ あつたまる間もなく消える百の炭

△ 閉門のない切見世は不首尾なり

△ 切見世は突出すやうに暇乞

△ 行燈は百と百とのむすび玉

△ かきたてゝ二軒あかるい河岸の顔

△ 局見世曆のやうに年が明け

△ 切見世も品こそかはれ飲んでさし

△ 切見世は煙草のけむりもやが下り

△ 切見世はからひちがひに煙草にし

△ 切見世の口説一人は腰をかけ

△ 切見世の一間こなたで味噌をする

△ 切見世は唄を通してひよぐつてる

△ たれながらそけへ寄りなと臆ていひ

短期奉公長くて一年

互違にあらず惡煙草の辛ひちがひ也

一切見世は間口六尺奥行九尺程の家にて客あれば内に引入れて表戸を鎖したるものなり

淺草紙

塵紙の四つ切と百見世の路次の刻

本挽町にて四代半四郎が份せし程の評判の美人の化女、大日如來の

切見世又局見世ともいふ

俱利伽羅紋々の遊人

江戸二の交り見世、武蔵野に月を配したる作意

春菫家の異名
竹村伊勢六椽

伏見は竹の産地
兄は女郎買妹は芝居見
吉原の通稱

- ▲ そゝらずに寄つて行きなとたれていひ
- 切見世へ手前の隠で泊るなり
- 切見世のたま〜目立つ緋ぢりめん
- 吉原の局只の人でなし
- 鳳凰の末切見世へ舞下り
- ▲ えり屑で女衞切見世あつばじめ
- 蚤で路次へ這入るは素見也
- 日本の九紋龍は路次の守護
- 河岸の文商人などゝの手で届き
- 竹村は最中丸屋は朝日也
- 菓子屋には月女郎屋には旭也
- 武蔵屋の客へ最中の月を出し
- 竹村は最中の月に赤團子
- 竹村は星のさしきへ月を出し
- 晦日にも息子最中の月を見る
- 吉原は竹の中から月が出る
- 大まかな所だに菓子屋伊勢とつけ
- 竹村伊勢はしはくない所に住み
- 子を捨てる藪に竹村うつつけ
- 竹村の近所にはいゝ伏見町
- 兄は竹妹は虎をくつてゐる
- 丁で竹芝居で虎を下戸くらひ

和泉町虎屋饅頭

臘豆腐

春季の櫻と臘とを結びたる作意
雪の朝直しに豆腐の賣れよし
細見の山形を利かす

山谷あたりの豆腐屋は仙台様を知らざりしとの意也
紅葉豆腐

客の馬鹿氣に面構
老松の文句どり

正月の洲濱きのじ屋の臺に似たり

参照

きのじ屋といふこと今はさまざまの説を付けていふと雖ども、其始めは五右衛門といふ料理人おもひ附きて、江戸町二丁目へ見世を出したり。彼常に居りやうの形のきの字形にすわるとて、異名をきの字〜といへり。故に看板を蔓蔦屋の蘭洲に書いて給はれたのみければ、大筆にきのじやと書いて遣はしける。夫が名代となりて、今は總じて料理臺の物をこしらふる家の名となりし也。云々(著者不詳「吉原雑話」)

- 千兩の地には餅屋も竹に虎
- 五丁へは竹二丁へは虎をつみ
- 山屋から臘竹村からは月
- 夜櫻におぼろ豆腐で飲めるなり
- 銀世界山屋の豆腐賣切れる
- 場所柄で豆腐屋迄が山印
- 山屋だと先から伽羅を知つてゐる
- 山屋でも舟で高雄を落りおとし
- 堅巻の文竹村の折に添へ
- きのじ屋の松尾上より名が高し
- ▲ きのじ屋の臺にはびこる始皇帝
- きのじ屋の松に始皇のやうなつら
- 中にも此松一步には高いもの
- 喰積が小癩に出来て一步めき
- オット暖簾をたのむときのじ屋云ひ
- きのじ屋は階子の口で人拂
- きのじ屋に鳥目の禿じやまがられ

一 亂離にや、滅茶
々々に喰ひあらす

一 臺の物の段が二
階から下ると喜
助どんと呼ぶ聲

一 髪子の井桁を
覗く見立、筒井筒
るがたけおけしま
らした妹見ざる間

一 女郎屋の若い者
の通稱

一 臺屋は手拭を輪
にして天窓にのせ
其上に臺の物を擔
ぐ

一 東西南北と中央
とに時つといふ山
とに時つといふ山

一 九郎助だの赤い
だの隅々に稲荷の
祠あり

一 此代吟者は女好、
里遊などいふへエ
ケエ連なるべし

(安) 小便に行くときのじ屋らりにする
 (安) さのじ屋の松野に禿よりたかり
 (明) 食つたりなときのじ屋は下げてゆき
 (花) 上あごを舌へからんでさかりんす
 (明) 頬張つておいて禿は下りんす
 (花) 下りいす禿手摺へ筒井筒
 (安) かうべを垂れて喜助どん下りいす
 (安) 脳天が蛇の目にはげる臺かつぎ
 (安) 二朱の臺鼎をあげる身ではこび
 (探) 二朱の臺五岳の圖ほど並べたて
 (天) モウ引ケとお齒黒屋からカッチカチ
 (天) 初午は隅つこばかりさはがしい
 (花) 大手は四郎搦手は九郎也
 (花) 白(四郎)と黒(九郎)尻と口とを守つてる
 (花) 化物の鎮守は黒い狐なり
 (花) 九郎助が氏子やつぱり狐なり
 (天) 狐さへしろうとでない所なり
 (花) 化せくと九郎助の御神託
 (花) 玉姫は外九郎助は内にゐる
 (花) 傾城はほこらに餘る願をかけ
 (安) 九郎助へ代句だらけの繪馬をあげ
 (安) 代句だらうと九郎助の額をほめ

一 男裝して大門を
脱け出たき願

一 泥足を洗うて麻
を出てたき願

一 緋縮緬を廢した
る素人風

一 細井廣澤筆くる、
すけいなり

第三章 吉原の四季附紋日

元日附松の内——大黒舞——大盡舞——夜
 櫻附花魁の道中——梅卷——七夕——草市
 ——盆附燈籠——俄——八朔——明月附後
 の月——重陽——雪見——節季——狐舞——
 ——夜蛤等

一 昔五丁町の遊女
屋にて往來の邪魔
にならぬ様向の家
のと後合せに道の
中央に門松を立て
たるものにて北江
の文句に「花の江
戸町京町や背中合
せの松かざり」と
あるはこれなり

一 元日休業

一 人形使

一 正月二日

一 次の章参照——最
初即ち幕明の義

(花) 松飾後をむける別世界
 (探) 實に遊里門松までが内をそと
 (探) 對馬と北國松飾内へむけ
 (花) 竹藪になる七軒(賢)の松かざり
 (花) 傾城の大赦長閑な日のはじめ
 (安) 春一夜さとし枕のねかしもの
 (安) 出使に禿をつかふ軒の羽根
 (安) 買初は輪飾のある四手なり
 (安) 初見世の鈴年中の三番叟

外八文字にて仲
 丁張
 格式萬端他の女
 郎と一様ならず

孔雀の染模様は
 多く振新なれども
 こゝにては鳳凰と
 同義に見て可なら
 ん

遊女は(中略)受出されて、如何なる人の妻妾ともなる身分な
 れば、娼家の相火を喰ふべきものにあらず。何れの花街にても、
 歳の首三日の間庭火を焚いて不淨を清め、何れの花街にても、
 いて居處を改め、別火にて煮たる雜煮を食せしむ。(下略)(鳳
 來山人著「反古籠」)

参照

主君と君傾城と
 に言掛く
 太夫の回禮に馴
 染客より贈りたる
 立派な大羽子板を
 禿に持たせて運ば
 しむるさま大名行
 列の金紋先箱のさ
 まに似たりしと

良家にて齋を浸
 したる水をつけて
 爪をとるを七草爪
 といふ

正月十五日に木
 を削りて門口に掛
 け置くは此掛懸は
 普通にあらず遊所
 丈けに聊か凝つた
 細工ならんと思は
 る

正月廿五日天神
 社にて行ふ神事

文の書初を恵方の客へやり
 羽子板を君が年始の先道具
 羽子板は實に北國の女帝也
 羽子板は客をはづます道具也
 遣羽子をたいこ田圃へつきなくし
 七草にやりても長い爪をとり
 紅筆を貸して逃げたる削りかけ
 鶯嘘替はさとにありたき神事也
 うそかへの神事をさそふ息子連レ
 サアあがなんせと鶯嘘をひったくり
 うそ鳥へ神酒を供へる塗筆筒
 太神樂赤い姿に見つくされ
 太神樂ぐるりはみんな油蟲

彌生花盛の節遊
 女共一日上野など
 へ花見として外出
 することを許さる

上野中堂の額に
 瑠璃殿の御宸筆あ

花盛一日山へうけ出され
 櫻さく山へ禿の放生會
 中堂に放生會めくさと雀

参照

中村吉兵衛は、正徳の頃、上々吉の位付にて、どうけ形の区
 (定紋)上手なり。異名を二朱判吉兵衛と呼びて、後年役者を
 やめたいこもちとなりし由云々。(三馬著「式亭雜記」)

ハアホ、大盡舞を見さいな、抑廊のはじまりは、弓削の道鏡勅
 をうけ(中略)、ハアホ、大盡舞を見さいな、ナア其次の大盡は、
 そもく五町の初りは、えんり江戸町伏見町(中略)。(以下首尾
 同文)そもく太夫の初りは云々、そもく御客のはじまりは
 云々。(二朱判吉兵衛作「大盡舞考證」)

大黒に鼠を配し
 たる作意尤子は北
 の方位なり

大黒面を被りたる男と、辨財天のボテ鬘を被りて女装したる
 男とが、三味線一人を従へ、山口巴屋の見世先を練り行く圖、
 吉原十二時の挿繪にあり。大黒舞も太神樂も吉原のみのものに
 はあらねど、廓内にも行はれしことは明かなり。但しこゝに
 挙げし句も、廓内とは斷言し難きものあり。

大門へこのしろの入る賑かさ
 鯨の鏡にうつる賑かさ
 このしろは初午ぎりの臺にのせ
 このしろも一ト位つく初の午
 大盡はざしき大黒庭で舞ひ
 大盡舞に吉兵衛を二角出し

二朱判二つ

木の階子は毎晩上りんす

花 瑠瑠殿の大見世になる花の頃

花 花見には石の階子を上りんす

花 籠の鳥花の上野へ放生會

花 霊場は禿の時にふんだまゝ

花 抱れても櫻にとほき禿の手

花 野遊に三味線草を禿ひき

花 末頼母しくない所へ櫻植ゑ

花 楊貴妃も普賢も植る仲の丁

花 仲の丁植る榮華の夢見草

花 仲の丁行暮れさせるやうに植ゑ

花 櫻をば植ゑて山吹とりたがり

花 櫻には山吹のちる名所也

花 植ゑたのは吉野ちらすは井出の花

花 ちもしろや花間笑話の仲の丁

花 仲の丁櫻で茶屋へ花がふり

花 櫻まで損料で咲く仲の丁

花 繁昌は年々花もかけながし

花 花までが盛がすむと置かぬ所

花 吉原は櫻さへ實をもたぬ所

花 花が三文ではすまぬ仲の丁

花 大木の花見はものが入らぬなり

花 下馬よりは下乗の櫻ちもしろし

ナツメ

齊の方言

櫻の種類、美人を寓す

櫻の異名

行かれて木の下蔭を宿とせば花や今宵のあるじならまし

山吹

一度用ひて其儘にすること

渡し舟賃、蓋し向島より逸れたる夜櫻見物ならん樹上野向島等の老樹

駕にて大門乗打無用

見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

雪洞

昔の名高き遊女

女房の鬼門にあたる櫻咲き

こきまぜた恪氣三月十五日

仲の丁こきまぜるのは柳ごし

仲の丁櫻に人をつなぐとこ

花よりも心のちるは仲の丁

本性は櫻の下でちがふなり

江北へ櫻をうゑてちもしろし

とぼ口の櫻がいつちちもしろい

六角な火を兩方へとぼすなり

面白さ箱提灯で花見なり

極樂の迎箱提灯でくる

櫻でも淺黄はもてぬ仲の丁

仲の丁吉野もほめる夕櫻

夜櫻は年寄の見るものでなし

又櫻母の苦勞が八重にまし

夜櫻へ巢をかけて待つ女郎蜘蛛

櫻より松に目のつく仲の丁

そもくどらの始まりは櫻なり

あすから花が咲きんと文がくる

ちりんせんうちにと文を八重に出し

明方の鐘には花の人が散り

咲く花にはぢぬ廊の松の色

唐詩選の文句
| 妹女郎の突出し
道中大金を要す

花 植ゑられた櫻も松の色にはぢ
花 相逢うて愁苦をとへば雪月花
花 咲いた櫻であいらんも一句(苦)出来
花 櫻までつき出しに出る仲の丁

こゝで鳥渡、突出しと道中とに就て一言しておく必要があらうと思ふ。當時仲の丁張の花魁は、妹女郎を松の位の太夫として突出すには、衣裳萬端さらびやかに装はせ、三日の間、仲の丁の茶屋々々へ、弘めの禮に廻らしむるの慣例で、多くは花咲きにほふ彌生の頃に、行はれたものである。是が即ち花魁道中なるもので、其艶麗華奢なる有様は、充分句面に發揮されて居るので、更に蛇足を補するの要なからんか。偕て、其一切の費用に至つては、少くとも一箱の半分は傾けねばならぬと云へば、孰れは鼻下長大盡の懐目當の遺縁算段なることは云ふ迄もなきことである。

槍を遣手に利かす
| 對の衣裳の二人
禿

花 北國の彌陀駒下駄で御來迎
花 駒下駄の高く嘶く仲の丁
花 道中の駒の後からやりが付き
花 全盛は双子の様に着せて出し
花 植ゑた櫻に駒下駄も勇むなり
花 咲いた櫻に駒下駄の八文字
花 鳳凰の足あとからも文字が出来
花 蒼鶺も知らぬは鳳の八文字

| 鳥跡を見て文字
を造り創めたる人

| 日本橋大門通六
文字屋
| 突出し花魁外八
文字の下稽古

花 櫻にも鳳凰の舞ふ別世界
花 籠の鳥足跡つくる八文字
花 片足に四文は派手な歩きやう
花 六文の下駄八文で意氣にはく
花 下書を廊下でさせる八文字
花 善盡し美つくし三步八文字

| 三本齒の塗下駄

花 三の字を踏出す雪の八文字
花 釣合をよく歩くのは三步也
花 釣合のいゝ傾城は直が高し
花 仲の丁そとはたがりはいゝ女郎
花 大たばに棲をとるのは仲の丁
花 我はなの先を見て行くいゝ女郎

| かな棒引

| 四苦八苦の遺縁
算段

花 極樂の町錫杖で御成觸
花 口取のやうに新造先へたち
花 仲の丁火のふる上へさしかける
花 全盛は花の中行く長柄傘
花 油なき長柄に花の雪がふり
花 三尊來迎喜助は傘をさし
花 傾城は傘を持つ手は持たぬなり
花 仲の丁薙刀持もつきたい場
花 れきくの遊女禿を二人りつれ
花 九丁と五丁入口に山口屋

| 音羽町九丁目の
入口にも山口屋な

るものありしと思はる

二人禿の見立

大名行列の後押

振新突出し

太夫も茶屋へ来て手傳をなす

青梅を紫蘇巻にして砂糖に漬けたるもの

紫蘇の葉の見立

太夫の名、梅縁語を結びたる趣向

参照

毎年、五月中旬より、廊内の茶屋一同に、甘露梅を製して、正月の年玉に用ふ。今年の夏製たるは、翌年の春の配りとす。其製法の日は、見板の唄女、手透なるが懇意の茶屋へ手傳に寄集る事なり。然ば、廊の四季を述たる端唄にも、其由を作れり。『三卯の花の更衣、ぬしの定紋染させて、紅さし指もくれなるの、茶屋に藝者は梅巻の、承諾て見せたり承させる行かふ人の其中に、もしや夫かと胸さわぎ。これぞ流行唄、廊の夏のおもむきなり。(爲永春水著「春色梅見舟」)

- 保 仲の丁暖簾も浮いた都鳥
- 保 捨假名を左右へつける八文字
- 政 びり徒士に禿をつける八文字
- 花 振袖のびりから廊の初出仕
- 寛 甘露梅へも山形の星下り
- 花 甘露梅女藝者の加役なり
- 保 爪紅程に梅巻の藝者の手
- 政 梅巻の前垂花の暖簾なり
- 保 ちりめんにくるまつてゐる甘露梅
- 政 酸い甘い知つた所から甘露梅
- 花 菅原が所から来た甘露梅
- 天 やきながら女房のたべる甘露梅
- 花 さうまく女房はくはぬ甘露梅
- 安 七夕は土手から見える紋日也
- 花 雀程七夕竹による禿
- 保 月雪の前には星の一苦勞

吉原の草市は七月十二日也
禿の名を利かす

「あしたは嫁のしをれ草」といふ盆唄の文句を假りたる句作

「張見世の上につるす大行燈」吉原の盆の配餅は重箱につに大きなやつ一つ併置にては秋の部に入る

「角町中七字屋抱名妓享保十一年三月二十五歳にて死す、その菩提の爲七月中燈籠を點す誰哉行燈

仲の丁

女郎の綽號

第三章 吉原の四季附紋日

- 明 大門を團扇と虫が入かはり
- 安 草市に禿買ひたいものばかり
- 花 草市は千鳥小蝶の放生會
- 花 草市の中で禿は親にあひ
- 政 さとの草市籠の鳥目白押し
- 明 草市に茶屋の内儀に百借りる
- 政 草市を見物に行く門徒宗
- 安 白無垢でしをれた草を見てあるき
- 明 草市へ出る三尊の美しさ
- 花 行燈と牡丹餅は大きな所
- 花 燈籠も戀の部に入る別世界
- 花 秋の夕暮にぎやかな世界なり
- 花 追善の軒端も派手な別世界
- 寛 年々歳々玉菊は客をよび
- 花 玉菊の魂軒へぶらさがり
- 花 玉菊とたそやあかるく名が残り
- 政 明るく光る玉菊が百年忌
- 寛 玉菊へ手向煩惱菩提なり
- 玉菊の菩提女房の修羅となり
- ▲ 吉原の春中へともす人だから
- 明 仲の丁精靈も氣の張る所
- 寛 狐火を一ト月ともす賑かさ

―地者

見物翌日迄ぶん流
す俄の催は八月朔
日より晴天三十日
間の免許なり

参照

桐屋伊兵衛といふ、役者の真似上手の人、安永天明の頃にや、遊女屋中記字屋と同氣相求め、二三人にて俄狂言をなす。これ八月俄の始めなり。(小川顯道著「塵塚談」)

―八朔に女郎の着る白無垢の小袖姿

- 花 燈籠を出して火に入る虫を待ち
- 實 燈籠も茶屋へ行くのは熨斗をつけ
- 花 燈籠の火に飛んで入る若盛
- 明 とぼる迄西瓜を喰つて待つてゐる
- 保 きりこ燈籠は此里の魂(玉)祭
- 實 燈籠を賣つて息子は損をする
- 花 燈籠の施主に息子は三步つき
- 安 燈籠見に夫婦と現じ來つたり
- 明 燈籠に娑婆の女の影はなし
- 實 燈籠の人を禿はもぐつて出
- 花 燈籠にたかるはさとの油虫
- 實 燈籠に甚だ闇い言譯し
- 保 燈籠のあした油を親仁とり
- 保 見てかへるつもり俄に氣がかはり
- 實 燈籠が消えて俄に騒ぎ出し
- 安 祇園囃に京町も浮く俄
- 安 金棒のあとから大鼓ついてくる
- 安 燈籠が消えると廓は雪がふり
- 安 燈籠が消えて幽霊あらはれる

―八月一日同十五日共に大紋日也

―新造其他下等の女郎白無垢を着ず

―白無垢の準備

―品物をどれか早く極めなんし也
―品少し劣る白絹

を重盛の献燈と福原御殿の怪異に云ひ掛けたる趣向、白無垢の起りは元祿の頃江戸一、巴屋の抱高橋大夫八朝に徳の病にて打臥したる所馴染の客來り白衣の寝姿のまま揚屋入りをなしたる姿が優美であつたといふ所より何時か此廓の慣例となりしと

―八朔の紋日を香負込む、但し八朔を風日といふ

―七月晦日に行ふ佛事

- 花 幽霊を見とげず歸る燈籠客
- 花 追善がすむと美しい雪女郎
- 實 燈籠のあしたまばゆき仲の丁
- 安 吉原は燈火消えて白くなり
- 花 燈籠の俄に消える雪の宵
- 花 燈籠のほとぼりさめぬ雪見形
- 花 燈籠を見に行き風をしよつてくる
- 天 風の前日に燈火は消えるなり
- 花 大施餓鬼あす極樂へ雪がふり
- 花 桐一葉散つて鳳凰苦勞がり
- 花 嵐より雪になやむは女郎花
- 花 おいらんの胸に積つた秋の雪
- 安 月前の雪難題でおざりいす
- 安 雪の頭痛でかんざしも曲んした
- 花 家根のある女郎は雪を苦勞がり
- 花 家根のない女郎は雪もふり次第
- 天 新造まではふり足らぬ秋の雪
- 安 白妙の雪はつもらぬ總籬
- 花 乙な里 七月下旬雪催ひ
- 實 七月下旬あしでおすかうでおす
- 安 反物のそばでお針は煮を切りな
- 天 白加賀にしなとお針に見くびられ

多忙にて暇なし

天 燈籠の名残だがのとお針見ず

安 七月が小でお針のいそがしさ

安 七月は小だと遣手氣をつける

安 女郎衆はさぞと大汗かいて縫ひ

天 白無垢を田町で縫ふと残暑也

明 掛無垢のやうに田町でやたら縫ひ

安 駿河から五丁へ運ぶ秋の雪

安 朔日の雪物さしでつものるなり

天 八寸一分につもつたは秋の雪

安 秋の雪四尺につもるお針部屋

天 北國の雪に火熨斗をお針かけ

天 北國は八朔にもう雪がふり

天 帷子を着て北國の雪見なり

明 帷子で来るを小袖で待つてゐる

天 白無垢でする道中は戀無常

天 寒からで面白妙の秋の雪

天 秋の雪松へかけたる仕舞札

天 八朔の雪にも御簾をかかげさせ

天 富士の近所は八朔も雪がふり

天 朔日の雪は五丁目五丁町

天 六一加々三(加賀様)八一はさとの雪

天 八月の朔日雪と炭が出る

袖口の寸を八月一日に言寄せたる句作にや

駿河町越後屋

葬式

香爐峰を利かす

淺草裏富士淺間社

本郷五丁目加賀屋敷

六月初日水室開

加賀家より將軍家へ雪の献上

鐵砲洲炭市

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
無心恐ろし
夏來にけらしの綴り

上方の賣女の稱

カラリコロリと鳴る下駄

帷子

高橋太夫の口吻、そろく無心の前提なるべし
懐を絞らした結果

明 此風に又出やるかとりい母

天 六つの花四季に咲くのは江戸ばかり

天 一曲輪秋來ぬと目にさやかなり

天 ちどろかれぬるとそろく客は逃げ

天 吉原は秋來にけらし白妙の

天 秋の雪ふるさと寒くなる紋日

天 一日は誰哉行燈も雪見形

天 白人と江戸も一日いひたい日

天 病人を祖とし八朔衣がへ

天 傾城は一ト月早くぶつかさね

天 みるくの鳴くに白無垢ぶつかさね

天 八朔は金鶏鳥も鷺となり

天 鳳凰が一日鷺に化けて出る

天 一日は眞白く書く八文字

天 音のいゝ雪沓をはくさとの雪

天 キットして出る八朔は寒く見え

天 時ならぬ禮服を着る五丁町

天 越後から俄に雪の衣がへ

天 唇が赤いばかりの紋日なり

天 白無垢でとかく寒けがしすなり

天 嵐の日客寒さうに見えるなり

天 嵐の庭に雪のふるおもしろさ

花嫁の綿帽子

探 別世界嵐の日だに雪がふり
 ▲ 空と親仁には知れぬ秋の雪
 花 八朔に小袖を着せるむごい親
 探 秋の雪着るは日本の孝の内
 花 丸綿を被りなんしとお針いひ
 丸綿を着ぬ白無垢のおもしろさ
 色直し縞になつてくるおもしろさ
 明 白無垢をズツクリ脱いで蚊屋へ入り
 花 秋の雪ふけて衣桁に消残り
 花 八朔の雪にしなへる衣紋竹
 探 白無垢に煩惱あれば菩提あり
 探 秋の雪松にかけたる仕舞札
 花 八朔の雪ころがしに骨が折れ
 明 八朔の雪は質屋に流れ込み
 明 八月の二日質屋へ雪がふり
 花 八朔の雪解は八月目に流れ
 白無垢は花の彌生に受出され
 探 八朔の幽霊人を迷はせる
 探 殺し文句で幽霊が月のこと
 探 幽霊は客に團子をのみこませ
 花 幽霊が團子をねだるこはいこと
 寛 白無垢の裏(二會)から切れる弱い客

八朔の紋日を仕舞うてやる札

質受の期限

三月は丁度八月目也

十五日の紋目を背負はしむ

期の偏なきは月也
雪月

花 燈籠と月は七難八九なり
 花 七難をのがれ八九の月をしようひ
 安 あまり問のないは白無垢も月さま
 安 八朔をのがれて偏のないをくひ
 探 比良は逃げたか石山で押へられ
 天 一は逃れたが十五は是天命
 花 風の穴まだふさがぬに月をくひ
 安 一ト月に風月をくふ痛いこと
 明 三日月の頃は無心の最中也
 花 痛いこと星に月夜をねだられる
 探 い容と見つ(満ればかけ(缺)る月の謎
 花 よく丸められて息子は月をしようひ
 寛 狐に化かされ薄をしようつてくる
 花 烏を三羽殺させて月をしようひ
 花 小さな指が雪になり月になり
 寛 モットこちらへ寄せといて月のこと
 探 花よりも團子が胸につかへんす
 花 月になくのは傾城とほととぎす
 安 盆後からへたにさはると月の事
 明 月の座があいてゐんすと文がくる
 明 月に來てくれるだらうと封を切り
 安 月迄に文のくること十五度

明月に供へる薄にて狐の語を活かしたる作意
午玉の誓紙
切つてやる小指

俳諧に言掛く

日文

一月を寓す

花 月の文長さが凡そ十五尋
 花 田毎程傾城の出す月の文
 花 月の無心に武藏野の繪半切
 花 男なら三步の月を御らうじろ
 天 あてにした月が男の心なり
 花 けちな客二月あまりよりつかず
 花 兎ならはねるに客は逃るなり
 花 雲を霞と逃げて行く月の客
 花 足元の眞闇なうち月を逃げ
 花 ぶらついて月見に切れる絲瓜客
 花 二千里も行く氣でさばる月の駕
 花 いゝ月夜親仁釜より目をぬかれ
 花 月よりも息子が先にもれて出る
 花 内の月では安執の雲はれず
 花 ちとなしくなると團子の汁をくひ
 花 氣は晴れねへが腹のはる内の月
 花 五刃の國分やみく内でのみ
 花 底のない杯で飲む内の月
 花 今夜行く奴もあらうと芋をくひ
 花 身上の傾く迄の月を見る
 花 明月や暗い所は見世ばかり
 花 月の座へ星見世の出る繁昌さ

一嗜れに喫む烟草
 一兼好の色好まざる男は玉の杯に底なきが如し

一田毎の月を利かして梅母をにほはしたる趣向

一嫁のは赤い月也

一取なすの意を團子に言掛く
 一十五夜には蛤の汁を吸りたるものその殻と共に歸らぬ息子を思つて愛想をつかさす

一荒れ果てゝ月家根を洩る

天 痛いこと月の上座へなほされる
 花 月の里一步はにくい姨へすて
 天 風まけもせず十五夜を仕舞ふ也
 花 冴えて居る月にも曇る母の胸
 花 母あんど息子も嫁も月を見ず
 花 嫁手柄月雪花を内で見せ
 花 母の前嫁の丸める月の留守
 天 蛤の殻と息子をすてるなり
 花 松ばかり臺に残んの月のあす
 花 月の朝臺も野分の花すゞぎ
 花 親仁の目ゆふべの月に異ならず
 花 コリヤだまれ月見が内てなせでさぬ
 花 十六夜は親仁小言の最中也
 花 さとの月仕舞つて内は不破の關
 花 女房の腹は月雪花にたち
 花 女房は風月の友をわるくいひ
 花 吉原ばかり月夜かと女房いひ
 花 ツンとして女房團子を焼いてゐる
 花 月見には女房のきらふ女郎花
 花 朝歸團子と芋をつきつける
 花 芋(痘痕)のある客が月見を仕舞ふ也
 花 店の客はれては掛けぬ月の札

蓋し叙なるべし
月の無心に小指を切つてやつたり客に逃げられたり
武蔵野の逢水

九月十三日

後の月

九月九日紋日

八月十五日より九月十三日迄の間

八月十五日の月

明月を見て後の月見をせぬこと遊里にては特にこれを忌む

八月十五日より九月十三日迄

- 明 總花は薄の側で渡すなり
- 花 禿にも薄を二本ねだられる
- 安 逃げる客薄の穂にもおぢるなり
- 政 薄では手も切れ指も切れるなり
- 寛 水におそはつて月見を逃るなり
- 安 座敷牢嗚呼月我をほろぼせり
- 天 をかしさは來月分も母叱り
- 探 おいらんの病氣産後三五がとよははず
- 明 十五夜は後禮のつく紋日なり
- 探 北斗の星も打くもる二度の月
- 明 薄をば逃げても菊にとつかまり
- 花 月の間菊も傾城一苦勞
- 政 吉原で招く尾花はむづかしい
- 明 あと月の薄がどうか招くやう
- 政 片月見ぢやア氣にかゝりいすからねへ
- 明 物忌丈に月見を二度くらひ
- 明 十五に居ぬと十三にも居ない
- 明 若旦那八九とつゞき大仕事
- 政 あやされた息子のゝさま二度をかみ
- 安 月二つ息子大義をおもひたち
- 安 秋の夜を二十八日息子しよひ
- 安 しよひものゝ内へ月をも入れておき

芋の衣被に對して息子は内を失策るとなり
十月戎祭

名月に放蕩を打つて銚子に滴せらる(第四編第四章参照)

後の月の紋日二日過
九月十二日日蓮龍の口御難

- 花 里芋も息子もかぶる後の月
- 安 後の月又候かやうくなり
- 政 二度の月逃げりや戎がおつかける
- 安 後の月再應の義と親仁いひ
- 寛 二度目には月も親仁もすぐ見え
- 政 後の月吉原で見るつけのぼせ
- 花 月を二度仕舞つて内を闇にする
- 政 月にも過ぎて家質の沙汰となり
- 寛 二度の團子で身代を粉にする
- 政 呑込んだ團子が胸に二度痞へ
- 政 後の月杯のなれ銚子なり
- 天 の様を二度受合つて銚子也
- 探 月を見て日の目此頃見ぬ息子
- 明 後の月すめぬ顔にて内に居る
- 安 あさつては御祥月忌と後の月
- 明 心外とやいはん息子片月見
- 明 片月見だなアと母といじりあひ
- 明 片月見ごくく悪い首尾と見え
- 安 片月見息子少しも氣にかけず
- 寛 けちな奴九月十五日にうせる
- 明 行く息子御難くと蹴て逃げる
- 探 さとの月二度目は客も雲隠れ

—時候の挨拶—

—十二本の髪飾を十五十三日の月光に寓す—

—十五夜の月と朝日の雪—
—孟宗—

(安) 秋冷の一儀がすむとどらの事
 (明) 月見過嫁の談合急になり
 (花) 仲の丁斗賑かな秋の暮
 (安) 借物で見世に後光が二日さし
 (政) 新造の身には雲苦もなき後の月
 (天) 石山も比良も葉月の兩紋日
 (天) 雪降に出るは和漢の孝不孝
 (明) サアおもが白うなつたと簀で出る
 (明) 簀を着て新造二階中あるき
 (安) 雪の日に五兩くすねて息子出る
 (安) 雪の朝隅田川からいひたてる
 (明) サア雪だ出たくなつたと女房いひ
 (政) 御無用と女房のとめる雪の段
 (花) 吉原は雪見にころぶ所也
 (安) すつこんで居やすまいよと雪の朝
 (天) ア、ラ面白からずの雪一步もなし
 (安) 目の玉をおしこんでよく雪の朝
 (政) 御先眞ッ白土手を飛ぶ雪の朝
 (安) 臨時の物入土手からチイラチラ
 (政) 此雪に馬鹿者共が足の痕
 (安) 初雪をほめぬ息子が物になり
 (實) 初雪に先づ總領に錠がより

—忠九の山科を利かす—
—いざさらば出掛けようよと也—

—鉢の木の文句取—

—北國征伐の兵共なり—

—と云はるゝ男は御出入の革羽織なるべし—

—翁にあらぬ禿なるべし—

—思案にくれたる貌もと佛像より出てたる語—
—籠の鳥、懐の語を活さん爲の作意—

—遣手なるべし—

—煤拂の定日、朋上ゲの突おろしなるべし—

(天) 居ぬ息子雪かきわけて詮義也
 (花) 此雪に御苦勞時に伴事
 (明) 雪喰つて土手を行くのは迎なり
 (明) 豊年の貢どこかと迎いひ
 (明) 雪こかし遣手の叱る所まで
 (花) けちな客雪の無心にイザさらば
 (花) 初雪はふりかゝつての紋日なり
 (保) おもしろく嘘もつき雪花のさと
 (政) ちらりと聞けば雪見から盛ンだね
 (明) 雪かきで七里けつばいよせつけず
 (明) 雪かきでぶつと息子は傘でうけ
 (安) 行つたなと雪をむしつてぶつつける
 (花) 紋日前城より首を傾ける
 (花) かんざしの足くたびれる紋日前
 (政) 如意輪が處々にまします紋日前
 (政) 窮鳥は懐ねらふ紋日前
 (花) 紋日前通はぬ神に祟なし
 (安) 眼に立つた紋日仕舞つてザット切れ
 (實) 煤はきの下知に田中の局が出
 ▲ 十三日遣手一期のひけをとり
 (安) 仲の丁餘日もないに美しさ
 (安) 二の足で師走の土手をふんで行き

半面に鬼の持つ
弓張はこはしの意
あり
よそにのみ見て
ややみなんかつら
ぎや高間の山の峯
の白雲
名ならずものゝ異

無心を吹掛けら
るゝ虞あり
娑婆ては寒餅をつ
つ故に寒嘘をつ
けと責ると也

餌々蒔きて雀を
奇せる爲めに庭に
設くる四阿の如き
もの

参照

庭の燎火の元日より、給賣くる大三十日迄、吉原を内と定め
云々。(山東京傳著「夜半の茶漬」)

第四章 吉原の朝夕

夜明——晝見世——晩景——仲の丁張——
張見世——素見——引ヶ四ツ等
吉原の夜は晝迄にヤット明け

土産物、信越地
方より賣られたる
女郎の身寄にやあ
らんか
これも土産物な
るべし
晝の吉原
朝来るもの
正九ツより暮六
ツまで

兼好の文句を假
りて文に利かせた
る趣向

腰の落附かぬ形
容

遊女共子供に着
ず物の着せ様を知ら
ず

乳
小便を浴せられ
たり

吉原は下から先へ夜が明ける
さとの晝錦の裏に異ならず
見榮せぬ藤棚の上さとの晝
女郎屋の勝手へまはる蕎麥袋
ぜんまいを脊負つて吉原中尋ね
眞つ闇な吉原へ来る青梅縞
傾城の素顔見てくるひしほ賣
晝見世へお職はなまけく出る
お針がのぞく晝見世の格子縞
つれづれなる儘に晝見世文をかき
チットマア抱かせなんしと筆を置き
傾城が抱くと赤子も皿に桃
晝見世はよく笑ふ子を借にやり
笑ひなんしたと傾城は子をあやし
晝見世のもちあそびにするお針の子
晝見世へ遣手の孫をおつばなし
左前の子を新造が抱いてくる
貸りた子に乳をさがされてちびなり
搜されてくすぐつてへと子を返し
白いもの吐きなんしたと子をかへし
おいらんはあくびした子にこりくし
女郎衆に貸すなと子守ことわられ

編編羽織を利せたる俗語の文句取

仲の丁張

第二編第二章 (参照)

(明) 傾城に貸す子に酒をくどくとめ
 (明) 揚詰のさしき赤子の聲がする
 (天) 子供の生酔女郎に貸したなり
 (明) 晝見世は子を抱いたのと見立てられ
 (天) 子に乳を見せたのと淺黄は見立て
 (天) 好いたのが来りや抱いた子に頬すりし
 (天) 見立てられたで借りた子が後を追ひ
 (天) 見立ちがひが又今の子を借りる
 (明) 貸した子に移香のある仲の丁
 (天) 入相の鐘に花咲く一ト世界
 (天) 蝙蝠に山椒くはせるいゝ時分
 (天) 世の中は暮れて曲輪は晝になり
 (天) 苦海とは見えぬ曲輪の夕景色
 (天) 遊女の出前仕候仲の丁
 (明) 仲の丁おつちさうに腰を掛け
 (明) 立て掛けたやうに傾城腰を掛け
 (天) 仲の丁腰を掛けてる待女郎
 (明) まだ来なんせんかと椽へ腰を掛け
 (明) およんなんしたかどけちな形でくる
 (天) 待顔へさくらをりく散りかゝり
 (天) 駒下駄で腰をかけて、花見也
 (天) 大門に附ヶ人をして腰を掛け

三番叟の文句を意に言掛けたる作

遊女往々狎を愛す

夕暮に来る玉子の賣の觸聲
見世を張る時に内藝者の弾立る頃なしの三味線(第三編第六章参照)

花 とぼ口で痴話をしてゐる仲の丁
 天 あしか四五匹ついて出るいゝ女郎
 天 素見物二階に居るは知らぬなり
 (天) 極上の遊女二階でお茶をひき
 (天) 鈴虫は見世松虫は仲の丁
 (天) おいらんの飛切鈴にかゝはらず
 (天) 鈴の音しばらくあつてお職出る
 (天) 鈴をふる火をともしのが合圖也
 (天) 鈴をふりたて行燈へたきつける
 (天) 金勢を拜むにも先づ鈴をふり
 (天) 神佛の外に燈明一つあげ
 (天) 鈴の音に籬の花は咲きそろひ
 (天) がらくと鳴らせば狎も見世を張り
 (天) 奥さしきしらせて来やと鈴をふり
 (天) がらくと鳴ると夜分の體を見せ
 (天) 宵は鈴夜中は木にて明ヶは鐘
 (天) 毛氈へおん直り候へ鈴の音
 (天) 鈴の音に来るのが客の三番叟
 (天) 振られる前表鈴の鳴る頃揚り
 (天) 清搔と玉子くで幕が明き
 (天) 清搔はみそするやうな四つ時分
 (天) 両側で味噌するやうに弾きたてる

清掻の形容チャラ粗略の意、綿を打つ張の音に似たり

存在の義

夢中

花 すがきを足に弾かせる雪踏連
 安 すがきをてんぶに弾いて綿をうち
 花 ひつこするやうに清掻弾いてゐる
 寛 候べく候の三味線を見世で弾き
 天 作左衛門流で清掻弾いてゐる
 花 すがきは異見の合はぬ調子也
 政 高うはござりますれど美しい
 探 蔭見世は張らぬ日の出の流行つ子
 寛 毛氈の上で合の手ばかり弾き
 明 毛氈へ孔雀羽ばたきして坐り
 政 すがきの音楽天女天降り
 明 三味線をばらがきに弾く音にうかれ
 明 すがきを中腰でひく人違ひ
 探 すがきがやむと山谷の遠碇
 政 行燈に煙出のある阿房宮
 安 百物語ほど入れて顔を見せ
 探 己ココロ己ココロ巴のやうに廓の格子先
 安 清掻にあはせ蚯蚓をのたくらせ
 明 色文を人中で書く勤の身
 明 傾城の文はのぞくにかはらず
 天 文など書いてゐるを揚ぐべからず
 花 夜顔の花は籬に三時キ咲き

暮六ツより引ケ四つまで

遊女三千の意を寓す
煙筒のある大行燈に百本程の燈心を點す
並んだる女郎略々同様なりとなり
一名ひじきの行列流

五丁

毛氈に乗らぬのは安女郎也
一歩と二朱の女郎と交り居る半鐘

左右の朋輩買はれて見世を引く

張見世の壁などは多く風だの孔雀だのを描きしものを見て金は女房賣つた金打取つたるは男殿の語呂合に壁は孔雀を塗つた女郎共などあり

寛 玉のよるところへ目のよる籬なり
 探 夕顔に見とれ籬にからんでる
 寛 相惚は顔に格子のかたが付き
 花 マアおあんなんと格孔子曰く
 花 通ふ神サア御神輿をすゑなんし
 花 鳳凰の壁に格孔子はおもしろし
 政 鳳凰が雁首を出す格孔子先
 政 格子先客をつないだ櫻張
 政 見世先で烟草無用でない世界
 天 煙草盆きらひな奴も前へおき
 政 やにつこい籬にはけちな烟草盆
 花 よりどり見どり二朱で買ふ烟草盆
 花 其つらさ左右の烟草盆をとり
 天 また見世へ烟草盆出す氣の毒さ
 花 先づ最初煙草盆から天上し
 天 毛氈を立て帳臺深く入り
 安 勘定づくで疊の上のを買い
 寛 交り見世一歩うやくしく坐り
 寛 交り見世うかといものも揚げられず
 寛 新見世につくりなほしが並んでゐ
 天 江戸から京まで残らず素見也
 天 目うつりがすると三百間あるさ

一吉原中三べん
一客齋家の異名、
雨垂の下に蝶螺や
赤螺の殻を並べお
くに云ひかく

一引手茶屋に用なし
一諸道具皆新し
一下和の壁に比す
一女郎の顔
一今日の赤ゲツト

◎ 素二朱もち十五丁程見てあるき
◎ 本名は素見あざなは油虫
◎ 赤螺の客雨落で洒落れてゐる
◎ そかアよせ二朱だと素見氣の高さ
◎ 素一步を持つてそかアいやこかアいや
◎ 小半丁四ツ手素見にたばかられ
◎ 素見物小見世などへは目をかけず
◎ 行くもんだなとイヤ素見嘘アねへ
◎ 素見物其癖念に念を入れ
◎ 素一步は真中を行く仲の丁
◎ 角町に立つともひきは素見物
◎ あのものにもに氣の迷ふ格子先
◎ 見世びらさ素見漆にかせてくる
◎ 十五城ものだと素見學者也
◎ 素見物見て居る顔をあげられる
◎ 椋鳥が来ては格子をあつがらせ
◎ 素見でも門からは氣がかはり
◎ 相應に素見も内は不首尾也
◎ をかしさは素見の女房りんき也
◎ 四手奴が呼んだ奴さと素見いひ
◎ ト出た所は素見とは見えまいの
◎ 素見物ソレのいたりと張込まれ

一見物をする人の
義、當時の通言な
り
一身分ある人は下
駄はかず、遊人地
廻等の類
一見透の洒落

参照 五六人連にて、深川へ来て、(中略)サアあの年増は引まみゑ、其
次は、耳の脇にかんにらがある、いつちの後ののは、額が薬罐で
際曇てかくしてある、よく見やれへこがあるさうな、三人一所
にいくら、文で一步よ、あんまりだ拾六奴く、拾八奴くエ
、負けると手を打つ故、女郎もズツ立つ、廻しの女が、モシ
御前方は何事ござりやす、ついぞねへと云へば、コレ此つ
ぞねへが尻はいくら物があ、三奴くても氣がねへ、サア
チツト寝よう、みんな何處へ行くのだと云へば、廻しの女が廊
下へ出て、コレお由どん此客を見倒へ通さつせへ(馬馬著「開卷
百笑」)

◎ 駕昇につかれて素見舌を出し
◎ 見物左衛門駕かきに邪魔がられ
◎ 素見だと見たはひが目か日和下駄
◎ 見倒へ御連れ申しやと素見しやれ

◎ 格子先買はず見とれる柳腰
◎ 香の圖に素見夜更る五丁町
◎ くらやみで素見草履を嗅いで見る
◎ たのむ文喜んで行く素見物
◎ さうは云はうが手短に書きなさい
◎ 格子から其手紙とつて筋を見る

一犬の糞の臭紛々
一犬の糞の臭紛々
一犬の糞の臭紛々

チヨイト此處で斷つておくが、四ツとは、當り前なれば當
今の午後十時であるが、此里では、九ツ即ち十二時を指す
ので、結局、一時の掛直がある、此四つの拍子木を合圖に、

張見世を鎖ざすので、引ケ四ツとはいふのである。されば夜が晝なる別世界にては、四つ迄はまだ宵の口と見做し、此章に連載したのである。

―首を垂れて眠る形容

―新造

- 〔天〕 新造をおこして廻る素見物
- 〔安〕 地廻りが笑ひんすよとゆすぶられ
- 〔花〕 引ケ前は籬のそばに百合の花
- 〔保〕 遣手の火廻シ引ケ四つにひつ抓める
- 〔天〕 二三人年寄向*がうれのこり
- 〔花〕 席正しからず引ケ四つ近き見世
- 〔安〕 北の彌陀カッチリの時はすに坐し
- 〔安〕 イヤアまだござなされると素見いひ
- 〔花〕 油へらしがまだ居ると素見いひ
- 〔寛〕 御夜詰が長いと素見毒をいひ
- 〔安〕 つらいこと素見のあもふ前もあり
- 〔天〕 つらいこと素見にばかり惚れられる
- 〔安〕 引ケ過までほれのこされるつらいこと
- 〔花〕 如意輪といふ身籬に賣れ残り
- 〔明〕 裸王らしく毛氈うれのこり
- 〔安〕 薄ぐらい内からさらし残つてる
- 〔保〕 茶をひくも道理細(白目)の尊也
- 〔天〕 賣れ残り實に十目の見る所
- 〔安〕 目明千人じやもつづら賣れのこり

―護衛なき王將將茶の語

―御多福

―醜婦の異名

―布團着た寝姿

- 〔寛〕 賣残り御尤なが二三人
- 〔花〕 傾城のあまりものには福があり
- 〔保〕 牡丹餅が引ケ四つ過にすゑてゐる
- 〔寛〕 後の四つなる程けちな面だわへ
- 〔花〕 縁なき衆生後の四つ見世できい
- 〔天〕 ねきものが二度目の四つに二三人
- 〔安〕 御茶をひいてる濫いつら苦いつら
- 〔花〕 茶ひきのあはれ蔭見世の東山
- 〔安〕 不景氣な女郎果報を起きて待ち
- 〔天〕 愛想を遣手へいふ夜みじめなり
- 〔安〕 遣手あばたへ御前ではないさうな
- 〔天〕 間違んしたとあばたは又坐り
- 〔明〕 居たあとをたいて見世にてれてゐる
- 〔明〕 引ケ前に素見と茶挽いぢりあひ
- 〔安〕 引きぞわづらて引ケ四つ迄あるさ
- 〔明〕 炭はねて引四つ程にドット立ち
- 〔花〕 引ケ四つの鐘に籬の花がちり
- 〔安〕 吉原は拍子木までがうそをうち
- 〔安〕 關守る里に空音の四つもち
- 〔安〕 實と仇時も木の四つ鐘の四つ
- 〔天〕 世間では取用ゐざる四つをうち
- 〔明〕 工面する内此界の四つを聞き

―の句は参考句として挿む

―函谷關の雞を利かず

浅草田圃六郷邸にて打つは正眞の間に合ふれば急げば

- ⑥ ひやかしを路次へ突出す四つの鐘
- ⑦ せはしなく打つ拍子木を知るまいな
- ⑧ アノ四つは六郷様と四手かけ
- ⑨ 六郷で打つはとかける二三人
- ⑩ 引ケ四つを階子で聞くはめつけもの

第五章 吉原の夜 上

吉原の生命は夜にあることは云ふ丈が野暮で、川柳の狂句も、亦頗る多く、雷に花魁の吐く八百や、御客の吹く萬八どころの騒ではない。振られて歸る果報者、持てぶん流す情男、泣くもあれば笑ふもあり、戀の立引、情の仕分、四十八手の裏表を便宜上下の二章に分ち、ズラリと茲に並べて見よう。

初會——引附——床——廻部屋——貫引——後朝——居續等

- ① 引附の座敷見透の阿房宮
- ② 引ケ前の初會振られて來たのなり
- ③ 引ケ過の初會ひき茶を飲にくる
- ▲ こつちから三番目だと認でいひ
- ④ 先づ最初御覽に入れる煙草盆
- ⑤ 禿が先へ煙草盆初會なり

葉子の名々寄菫家の異名

口鼻を嫌うて暗ある人は食はず百韻の中表八句を慎重なるを要す

- ⑥ 出話のやうに初會の煙草盆
- ⑦ 初會には先づ島臺が出さうなり
- ⑧ 十人が十人初會たべんせん
- ⑨ 禿まで飲みなんせんと口を出し
- ⑩ 初會では隣の部屋へ行つてくひ
- ⑪ たべんせん奴が夜中に酔つてくる
- ⑫ 初會にはみだりに臺へぶらまける
- ⑬ 毒だてのやうに初會は食はぬなり
- ⑭ 慈姑もくちなし引附の硯蓋
- ⑮ 初會にはあてがひ扶持をくつてゐる
- ⑯ 初會から食はせてたいこ二歩もらひ
- ⑰ わるもてのしたは太鼓の作意なり
- ⑱ 上げんせうなど、おつちさうに献し
- ⑲ 花紙であふいでいつそ酔んした
- ⑳ アレ葱をたべなんすよと大さうさ
- ㉑ 初會先づ表八句のこゝろもち
- ㉒ なげられもせうかと初會片苦勞
- ㉓ 肴の裏二會は返せども初會ぎり
- ㉔ 階子から見立てた客の二度は來ず
- ㉕ 大一座人のふんどし二三人
- ㉖ 大一座多藝な奴は油蟲
- ㉗ 大通豆と一座せぬ生姜切

—他人の懐

—實にならぬこと
にいふ俚諺

—勝手元轉手古舞
—座敷狭くして大
きな尻遣入れず

—野暮な客

—美人を得て振ら
る

—廊下をうるつき
廻る客の紳装
—御寝なさりませ

—花魁の附智恵

(安) 懐を廊下へよんで聞合はせ
 (政) 生涯の恥辱廊下へはした錢
 (安) 大一座冬瓜の花と見くびられ
 (安) 見くびつて遣手つらをも持つて來ず
 (安) 今夜のもからッ騒と遣手いひ
 (政) 大一座お針も返事すけてやり
 (明) 大一座廊下へ遣手尻を出し
 (保) 大一座ねきものまでも浚へ出し
 (政) おもしろさ太鼓を集めはやし立て
 (明) 大一座いたゞいて飲む奴もあり
 (明) いたゞいて飲むと傾城わきへ向さ
 (明) 大一座後生大事に名を覺え
 (花) 大一座鬮にて勝つて一人寝る
 (政) おれが巢はどこだと廊下とんび云ひ
 (明) 素一分はげしなりませで安堵する
 (明) 素一分は仇やあろそかに遊ばぬ氣
 (花) 初會の夜先づ商賣と年をあて
 (▲) 來ぬ内は禿の名など聞いてゐる
 (明) 禿來て鼻から烟を出せといふ
 (明) ねだられて禿にやりし烟の輪
 (安) 役にも立たぬもの禿ねだるなり
 (明) さゝほして見れば禿の智恵でなし

—一人つくねんと
布團の上に坐つて
ゐる形容

—寢産を二枚並べ
て綴合はせたるも
の

—半分の義、十符
の菅菰のこと前に
いへり

—天窓に墨を塗る

—情人

(寢) 初會には道草をくふ上草履
 (寢) バタアラバタ初會の上草履
 (安) 上草履練つてくるのは氣のないの
 (安) 御大法通り待たせる初會なり
 (安) 魂膽の來た夜初會は微塵也
 (寢) 裏附ケで板の間をくる待遠さ
 (▲) 上草履後から來るも脇へそれ
 (天) 縁なき衆生行燈とさし向ひ
 (保) けちな晩屏風の布袋還俗し
 (保) 壁にされたで樂書をしてかへり
 (政) 比翼産五符に寝させてまだうせず
 (明) 真中へ寝ても待たれずひよく産
 (明) 比翼ごさあちら向く夜の名ではなし
 (政) 比翼産孝と不孝の中を縫ひ
 (安) 紗の蚊帳は三人と寝るものでなし
 (保) 金の番人たまに出て夜具の番
 (政) 野郎の木魚が一步たゞとられ
 (政) 傾城の誠カラキシ寄附かず
 (明) ムットとした耳へかすかな上草履
 (寢) 長くした首をちゞめる上草履
 (花) 上草履ぬいだを聞いて空寝入
 (天) 寝たふりをのぞいてどつか又うせる

禿

空寝入の客が里(廊)にて持てぬとが名、其角の「おのふ狐哉」の語呂を藉る

簾の漉目ある薄き懐紙
掃、叙、笄、寝に就くとき髪飾を舞ふ紙に包んで仕舞ふ
能狂言の語、最初の出の衣裳を換えて再び舞臺に現る、仕舞
夢枕に立給ふ後光まばゆき菩薩の如き姿

枕元にて文を書かる

灰吹に狸の尻つぼ烟つて居、
 政、子狐の智恵に狸はこそぐられ、
 花 ばからしい狸は古いあきなんし
 ▲ 化けて来た狐狸をおこすなり
 寶 起きなんしなど、狸へよりかゝり
 政 おのが名のつくりで持てぬ狸哉
 明 御簾紙で狸の顔を二つぶち
 寶 御簾紙を寝なんしたかと下におき
 明 紙二帖寝巻の棲に持ち添へて
 政 御簾紙の疊タタミに禿三つ道具
 政 後仕手のやうに傾城床へくる
 明 後の仕手しごきでバッテリー来る
 政 善哉といふ身で三步枕元
 天 まじいまじりいまはしい初會
 空 躬心で笑ひ文を書き
 保 寝て聞けば人の代筆までも書き
 保 祐筆を抱へたやうなけちな晩
 天 寝まいとは申やせんと書いてゐる、
 花 枕席を共にせずして文を書き
 空 寝入らずに居なと硯を持つて行き
 空 夜つびとよ他出してゐるむごい奴
 天 はやる奴夜中出見世をあるいてる

十八丁處にあらずとなり

中ツ腹にて吸附煙草を撥ねつけたと見えたり
吸附煙草

空 腹さんざブラ／＼されるけちな晩
 保 寝て待てばいかにも長い小便所
 保 狐の小便牛よりもまだ長い
 保 くやんで詮なし小便に行つたきり
 保 雪隠も二階かと聞く極の野暮
 政 小便の長さ丑満頃にうせ
 明 煙草をばお断ちなんしたかへといふ
 花 おあんなんせんかと吹殻をのませ
 保 焼け煙管ちよつと妬の責道具
 空 焼け煙管みだりに女郎おつつける
 保 いきな土地煙草も手酌ではのます
 天 よく嘲しなんすと煙管ふり上げる
 保 オヤ嘘は客人程はつきんせん
 明 嘘つかぬ傾城買うて淋しがり
 寶 二朱よりは一步の嘘がおもしろい
 政 傾城の馳走泣いたり笑つたり
 寶 のべ紙を顔に一枚ひらつかせ
 政 客は眉女郎は目元へ唾をつけ
 寶 戀といふ正味のとはつまむほど
 花 ほれ所にこまり氣性に惚れんした、
 天 傾城に翌日を案じて叱られる
 明 つれの部屋迄ついてくるうまい奴

隣室の振られ客

(花) 灰吹の音を二人で笑つてゐる
 (明) 銀烟管ふられて疵をつけばはじめ
 (亥) 癪ざいますとあさまらぬ床の中
 (安) 傾城の癪人を見てあこるなり
 (花) 一步損こゝかゝと押ししてゐる
 (亥) 一步出し夜の明るまで癪を押し
 ▲ 持てぬ奴まだ薬までやる氣也
 (保) しかのみならず丸薬をたゞのまれ
 (天) 奇應丸のんでねつからきいせん
 (明) 新造にみんなのまれる奇應丸
 甲遊女「癪て痛くてなりんせん」乙遊女「わたちの所へ奇應丸
 がおすから」云々。(山東京傳著「總集」)

參照

甲遊女「癪て痛くてなりんせん」乙遊女「わたちの所へ奇應丸
がおすから」云々。(山東京傳著「總集」)

陰陽和合の尊像
なりといふ

(天) 賣れ振のわるさ癪だの痞だの
 (天) 看病づかれて四手で寝てかへり
 (安) 睦言の中へ油をつぎに出る
 (亥) ハイ御油と聖天の屏風外
 (保) 聖天の隣の部屋は待乳山
 (花) 不遠慮なものは曲輪の油さし
 (亥) あかしさは狸を化かす油つぎ
 (花) あきあがれ油さし奴が上草履
 (亥) よし來たと思へば油ついで行き
 (天) 五六寸かきたて、行く寝ずの番

紙屑狼藉

紙屑
字を書いたる紙

上草履を履かす
に駈出す

(寬) 引ケ過の廊下羊の反吐のやう
 (保) 吉原の紙屑籠に反古はなし
 (明) 上草履引ケ四つからは横にはき
 (安) 上草履あとひつざりに客へ貸し
 (亥) 上草履客がはいては静也
 (寬) 地女は階子で重い音があり
 (花) 傾城のはだしよく腹が立ち
 (亥) ぬぎすてた草履廊下へ八文字
 (亥) 落葉ほどはきちらしく上草履
 (明) 上草履殺してあるく憎らしさ
 (花) 死ぬ程の中は草履も殺して來
 (花) うれしさは掛り次第の上草履
 (明) 上草履ぬぎちらかしてむぐり込み
 (亥) 上草履ひらく屏風の端に支ひ
 (天) きゞすなど少しうなつて床へ入り
 (安) 寝るばかりにしてムザ／＼貫はれる
 ▲ ヒソ／＼と廊下に顔がとゞこほり
 (明) 御免なんしと來て何かソツといひ
 (安) けちな晩お免なんしがヤタラ來る
 ▲ 耳こすり案にたがはず貫に來
 (保) 寸善尺魔今來たにモシ鳥渡
 (保) 貸せ／＼の顔貸しなくすけちな晩

上方唄「きゞす
なく野邊の若草、
中略、苦海の鐘に
よるべ定めぬ身は
かげらふの」云々

心面白からず酒落も耳に入らぬ也

① 貫引幾度か部屋へこぞりあひ
 ② 貫はれて太鼓の地口落が来ず
 ③ 大一座なけなしの美女貫はれる
 ④ 貫うならみなやらうと大一座
 ⑤ 貫引どつちへ来てもよりかゝり
 ▲ 貫はれた夜は兩方へ蚊が這入り
 ⑥ 貫はれて店立をくふけちな晩
 ⑦ お氣の毒など、座敷をおつたてる
 ⑧ 客二人座敷と部屋に却をうち
 ⑨ 身一つを田毎の月のうきづとめ
 ⑩ ひとり寝も添寝もつらい身のつとめ
 ⑪ ひどり寝も添寝もつらい身のつとめ
 ⑫ むごいこと分地へ布團一つ出し
 ▲ 二割引の布團に寝るけちな晩
 ⑬ 御名代として布團が一つくる
 ⑭ 寢所の孫店を出す流行つ子
 ⑮ 廻し床置手拭に蚊屋をつり
 ⑯ 行燈に目鼻のあるは廻部屋
 ⑰ 行燈も片身づゝ買ふ安い客
 ⑱ 割床も繪の方へ寝る姉女郎
 ⑲ 廻はすにも廻さないにもかたて来ず
 ⑳ 寢いけぬ晩女郎とつかへべいにされ
 ㉑ 素一分はとつかへべいが怖いなり

新造は三つ布團に寝ず

落書痕なるべし

屏風の表の方

取替ベイ／＼と呼びて古金物と鉛とを取替りし商人ありしは斯

く云へるにや、内所の前に掛ける女郎の名札、大引ケの拍子木を合圖に行きて持來るものにて女郎共の廻しを怠るを戒むる爲に設けたるものなり

將茶に言掛けたる作意、女郎屋にやるより己にやれとなり、角力に言掛けたる作意

江戸町から京町、一夜の仕舞を附けおきながら中途に早歸すること、佛教の語、本店を分店といふが如きことなり

① 時札に又とりになす廻部屋
 ② 時札に死人をヤツド引おこし
 ③ 時札を取に行くとき聞きんした
 ④ 拍子木の枕に近きおもしろさ
 ⑤ もてぬ奴イッソ地口をいひたがり
 ⑥ いけぬこと何を聞いても知りんせん
 ⑦ にきびのつらをふくらしつてふられてる
 ⑧ 金銀をとられた後の不歩あしらひ
 ⑨ 壹歩づゝおれに渡せとこりた奴
 ⑩ なげられた晩は寝るにも肩すかし
 ⑪ 投げられた客二階から中(宙)がへり
 ⑫ 投げられた客すべつたのころんだの
 ⑬ 投げられた音が階子にドドドン
 ⑭ 頬杖でかへし申しやはけちな客
 ⑮ 吉原の外聞になる意地を張り
 ⑯ よる夜中江戸から京へすねた客
 ⑰ 宵立の客は何やらさゝかじり
 ⑱ 涙の時雨てりふりの間夫と客
 ⑲ 本地垂迹、客の床間夫の床
 ⑳ がうはらが起して廻る大一座
 ▲ 大一座ふられた奴が起し番
 ㉑ 一步マア猥にくはれたやうな晩

酔の薬蕪の同

百疋で高い脊中を買ひやした
 土手の雪ふられた奴が路をあけ
 鐘も啼け鐘も鳴れくふられた夜
 鐘は上野か浅草かけちな晩
 歸らうの引くの山ので雞がなき
 持てぬ奴本を見いくオアイかへ
 吉原は後架へ行くにてれる所
 雪隠の道で吉原飯をたき
 小便所面目もない人にあひ
 娑婆以來コレハくと反りかへり
 廊下にて逢右大辨便左小辨小便
 女郎屋のお掟をひよぐりながら讀み
 居續を仕らずを見てひよぐり

参照

廊下の壁に、左の如き張紙を出しあり。

定
 一、居續客不仕候
 一、二階よりちり
 捨つべからず候

(吉原十二時挿繪)

下湯のこと

行水でざんすこいつは大盥笑
 行水のわかる浅黄は垢がぬけ
 大軒別れの情は更になし
 グット寝てやりんしたとはむごい奴

相方の眠つて居る内にソツと脱ケ出して歸ること

寝こかしというて歸れど振られたの
 寝こかしにするのみならず屁をかきせ
 寝こかしはどちらの恥とおぼしめす
 來なんす氣なら來なんしとむごい奴
 油火嗅いきぬくの茶椀酒
 公などは行燈の烟酒飲むめへな
 肌寒く行燈燭のわかれ酒
 野暮でない行燈燭の一銚子
 羽織着ながら行燈で吸付ける
 待なんし羽織の襟がばからしい
 後から羽織をキツト着(來)なんしよ
 帶羽織かくし裸にする氣なり
 モウよいと茶屋は禿をひきはなし
 傾城のたまくとあてる袴腰
 袴腰氣強くあてぬ意趣ばらし
 再會を期して北朝陣をひき
 明の鐘兩方うその突き別れ
 やにつこい留めやら烟管かくすなり
 馬鹿らしい月夜烏でざんすわな
 鶏鳥がなき歸るを送る東下駄
 ほのくと明石も送る仲の丁
 何か知らしよはせて送る仲の丁

悪留

侍も偶にはもて
 一晩だを握ね
 此御客浅黄なり
 北國の朝を北朝
 結びたる趣向
 けちな、但し煙
 管に脂を結びたる
 趣向

女郎の名に擬し
 て人丸の歌を利か
 せたる句作
 一うらの約束か、

紋日の仕舞か、夜具か布團か何かしらなり
 忘れなんすなよ、のよつたらよなり
 朋輩女郎の客の春中なるべし

其頃の客多くは袖頭巾を被つて来たものなり

芝居に御上使の御入の時などに唄ふ下座なるべし
 飛んだ戸隠山なり

裳、引ケ、大引ケ、翌朝と四つに仕切る
 屏風のこと、裏形の形附模様多く雀

花 朝がへりよの字くがぶつさり
 探 明と暮鐘は曲輪の會者定離
 花 後朝の肩へ紋日をたきこみ
 寶 ことづてを戻る春中へたきこみ
 明 必ずへとは傾城の脈所
 天 袂にすがりては顔を見せなんし
 政 しころ引するは階子の段檀のうら
 安 約束は頭巾の山を折りながら
 政 さぬくに廬生が夢も五十間
 寶 別れての寒い階子をかけ上り
 明 後朝のあとは身になる一寝入
 政 下り葉で茶屋から上使にはこまり
 花 朝日さす屏風へ茶屋の手力雄
 明 茶屋が来りや屏風の裡で時をき
 安 光陰を四つに切つた迎駕
 寶 雀形たいて雪の注進し
 花 居續がちらつきんと秃いひ
 花 居續の床へ秃が雪の寸
 明 若いもの降るはくと雨戸くる
 探 歸られるものか積つてお見なんし
 花 積りんしたとかんざして寸ととり
 花 かんざしてさす出格子の雪の寸

雨雪などの来らんとする空催

天よ川よの洒落、飛んだ打入なり
 養子では出来ぬとの意を籠めたる作意

垢を流せとぶんかけせと雨際に云ひ

女ばかりの風呂
 一寸切らるゝも痛さは同じと

雪ならばよしとスツポリひつ被り
 明 手へ受けて見て居續の胸を据ゑ
 天 居續に用ゐてよきがチイラチラ
 花 降つて来やしたに素一步ゾットする
 花 積つたと聞いて素一步消えるやう
 天 であぶ大分降りやすと素一步困つて
 花 素一步は此雪にイザさらばなり
 明 天のなす災雪がしくじらせ
 花 居續は六つ花さんの客衆なり
 寶 風花のうち居續の煮え切らず
 政 風花を事大相に秃告げ
 安 雨でも雪でも居續さく
 花 晴雨を論ぜず勘八は居續し
 明 居續に馬鹿くしくもよい天氣
 政 せよかはよは居續の合言葉
 明 居續に高をくゝるは實子也
 探 命の洗濯ぶん流せく
 政 お流しなんし今に湯が沸さんすよ
 政 小便所流すつもりに先づ極り
 安 居續は女護の島の風呂に入り
 安 居續は二寸切らるゝ覺悟なり
 安 手水場の垣に楊子が二三本

一兩方を使ふ様に
したる總揚子
一松葉屋半蔵を
言籠めたる趣向な
るべし
一女郎の揃
一獄舎

一取膳にあらずと
なり

一昨日酔の妙薬
一居積と極めて晝
の玉代を附けると

一なぜ飲みなんせ
んかと也

一吉原の遊廓

一居積以來兩房の柳にし

一はんぞうの鹽片手に松葉鹽

一居積の髮髓甲でなでつける

一北狄の爲に遊(差)里にとらはれる

一居積に見世から文でなぶられる

一杯で鹽梅をする小鍋立

一取火鉢などで食つてる帆立貝

一雪の朝錨をおろす帆立貝

一御簾紙であふいで客を帆立(おだて)貝

一骨のない風で部屋持火をおこし

一伊勢屋は知らぬ神(紙)風の鍋立

一野暮でない勝手道具は帆立貝

一かんざしの逆櫓で荒らす帆立貝

一かんざしでシツボ鍋の腑分する

一シツボへ通りかゝりし上草履

一漂泊の女郎をよせる帆立貝

一どうしなんしたと帆立貝へ入れ

一シツボをドット来てくひバット散り

一太鼓持土鍋の蓋をあけて見る

一漕ぎながら新造あふぐ帆立貝

一内證のから汁貰ふ腹なほし

一▲大直し時分遣手はヤット取り

一上等國分
一狐につまゝれし
故也

第六章 吉原の夜 下

二會目——三會目——花——紙花——床花
無心——名代——口説——手管——起誓——
——心中立——總仕舞——積夜具附敷初等

一明 時過ぎたらうらに禿の先づのぞき

一明 禿まで見忘れたのにうらで候

一明 見申したやうだと遣手飲んでさし

一花 見申したやうでさんすと首尾のよさ

一天 遅いうら大概もてた初會なり

一安 うらの客船宿の前行きすぎる

二會目迄は鴉母に祝儀を遣らず三會目則染となる時一分の祝儀を與ふ尤二會目に祝儀其他一切の御定をなせば裏則染と稱して三會目以上の格となる

裏則染を附く(第二編第五章參照)

相方と取替にて夜食を食ふことは三會目以後のことなり

實 うらの夜は四五寸近く来て坐り、
 明 遣手まで笑の行かぬうらの客、
 明 若しくれもせうかと遣手まかり出る、
 化 きつゝのこと二度目に遣手笑はせる、
 明 うらの文一座残らず同じ文、
 明 はまりけりうらに夜食を對にくひ、
 明 二度と行く所でないかと三度行き、
 天 御繁昌さまからといふ三會目、
 寃 三會目飲みも飲んだり食ひも食ひ、
 寃 權式も肴もくづす三會目、
 寃 籠の鳥三度目からは餌づくなり、
 明 三會目あたりなますへ箸をつけ、
 天 三會目から人柄がグット落ち、
 天 おさげすみなんすだらうと三會目、
 天 三會目しやくしあたりが別になり、
 化 著一ぜんの主となるおもしろさ、
 寃 箸紙が出来りや息子の城が落ち、
 寃 箸紙が出来たで息子くらひ込み、
 天 珍らしき箸を握つて考へる、
 天 主の手でおん箸入と書きなんし、
 寃 おもしろくない箸紙を女房くれ、
 天 箸のある丈書いて出す暮の文

三會目からは客の定紋などつきたる一定の箸を供する慣例也

一則染のある丈

大勢の馳染客なれば箸紙の間違より飛んだ筋當筋の紛紜を引起すことあり

遣手への纏頭

清少納言の枕の草紙に見えず

遣手の名細見の隅にあり

遣手は通例でくよの太つちやうなればなり

盃と祝儀とを兩儀に言掛けたる催促なり

芝居に言掛けたる趣向

俳諧の三句目で留む俳諧の第三又らむ留あり

化 まづくなる箸箸紙の名がちがひ、
 寃 箸紙がよごれて来たたら御用心、
 寃 三會目キット一步の尻がくる、
 寃 三立目に遣手へへへへへと出る、
 寃 國分より手さはりのいゝ三會目、
 天 かんらからとぞ笑ひける三會目、
 寃 憎いもの遣手の笑書残し、
 寃 隅の方からも手の出る三會目、
 寃 一ツ家のあるじまで出る三會目、
 天 三會目布袋の姉がまかり出る、
 寃 酒の相手にやりの出る痛い晩、
 寃 愛敬を遣手のこぼす痛いこと、
 寃 遣手の催促いただきやせうなり、
 明 花紙をくはへて遣手飲んでゐる、
 天 三度ねらつてやり先で一步とり、
 天 こうるさく餌とりの出る三會目、
 寃 三立目がだんまり遣手變な面、
 寃 やるものをやらねば婆とアいかるなり、
 寃 袖の下やらねば婆とア長座する、
 寃 第三はて手留のとこへ一步なり、
 寃 第三は婆とアに一步やりぬらん、
 天 三會目金のへる木をもつて出る

四會目に花をやらず

お針と料理人

額金、太鼓末社
社の字に縁を結びたる句作

渡海中 鐵に附
けられ乗客懷紙な
どを流すことある
に言掛く
紙花

三會目よんどころなき事ばかり
 四會目は遣手やつぱり怖い顔
 四五會目かじりついても取る氣也
 總花に珍らしい顔二つ三つ
 總花に針とまな箸まかり出る
 總花に婆々ア今はの目をひらき
 別世界天窓數だけ花がちり
 鼻をかむのだに太鼓は笑ひかけ
 くれるかと思へば鼻をチンとかみ
 ▲御簾紙で招きや遣手は直にくる
 末社には額をとらせぬ安旦那
 紙屑も一步に太鼓持は賣り
 白紙の謎花と解くたいこもち
 白紙を鑑札にする若いもの
 銀札に白紙をつかふ別世界
 吉原の鰐が身入れて紙が散り
 紙花でやれば夫程惜うなし
 仲の丁無地の感狀息子出し
 茶屋へ預けたふりをして紙をやり
 紙花もしばしの内の金まはし
 紙花をちらして今は屑拾ひ
 とんだこと紙一枚が一步なり

吉野紙に似た小菊也

現金と引換ゆ

太夫に花をやれば返禮として小菊をおくる是をかへしといふ

かへしに女持の煙草入をおくることもあり

情圓形の光るもの

蝶蠟よりは小判
小判、後藤光次

コレハくとばかり花は小菊なり
 山吹は現金小菊掛になり
 小菊の花も山吹と咲きかはり
 山吹のかはりに松は菊をやり
 小菊一帖十二兩とんだこと
 お慈悲だと小菊を二枚貫に來
 いくらやつても返禮は煙草入
 請取の氣で煙草入一つくれ
 山吹とかけて何だか當なんし
 山吹は花の王さと太鼓もち
 山吹を咲かせ過して身實がもてず
 氣(木)にほれんしたは山吹の色だらう
 ほれ所もあらうに女郎襟にほれ
 山吹の色にうつらふ女郎花
 實にならぬ客山吹の花もなし
 方圓の客に従ふ流しの身
 惚薬佐渡から出るがいつちさ
 黒焼にせずと小判はほれるなり
 光次はどこでも持てる男なり
 光次は業平よりも色男
 暖な客にはとける雪の肌
 いびつながあれば晦日に月も出る

一 壺三太夫の大權式 以下數句同吟

一 ツット烟草盆の引出などに小判を
入れおき知らぬ顔
をして居る所に通
人の沽券はあるな
り
一 遣手の異名

一 烟草盆

一 烟草の中へ黄金

一 嬉しの擬人法

一 節約するの意、
即ち三の床花は千疋
例なりしと
!馬の口綱、跳ね
るの縁語

(明) 杯と小判けつしていたゞかず、
 (安) ていゝの金ではないにいたゞかず、
 (孫) 寶の山もふりむかぬ里の張、
 (寶) 傾城はやり力なきもらひやう
 (天) そこへ置きなんしは憎い貰ひやう
 (天) 花ものを言はず傾城落手する
 (政) しやちこばる女郎に佐渡の土砂をかけ
 (明) 三會目國分の下に二兩おき
 (寶) 惚薬二帖國分の中へおき
 (花) 烟草入二兩巾着一步なり
 (明) 小使の留守引出シへ二兩入れ
 (寶) 傾城の藏にしておく烟草盆
 (安) 金箱を傾城枕元に置き
 (花) 烟草から光明放つ三會目、
 (寗) 三會目薩摩に佐渡をあいらひ
 (花) 金箱に灰吹のつくとんだこと
 (寗) 烟草盆から嬉野は見附出し
 (明) 三會目あたり歸るとさがして見
 (天) 三度目の客がかへると質をうけ
 (天) 床花を一兩二歩とじみるなり
 (天) 一兩の床花手取ヤット二歩
 (寗) 床花の口にて茶屋へはねるなり

一 定家の「來ぬ人
をまつほの浦の夕
風にやくやもしほ
の身もこがれつゝ」
の歌を唱ふれば待
人來ると

一 昔は太夫一人々
々別々の三味線を
弾きたりしといふ

(孫) 床花を入らないものゝやうに取り、
 (孫) だまされて咲くは床花室の花、
 (寗) 床花の禮に夜一夜つめられる、
 (花) 憎うざんすと抓められるおもしろさ、
 (天) 高直な奴三味線の内に座し
 (政) そこら中つめくされる三會目
 (天) 床花がすむと女房の詮義なり、
 (天) 女房のあるのが知れてくひつかれ、
 (天) 女房の夢見のわるい三會目
 (安) 婚禮を女郎賀したり曲つたり
 (孫) 手輕い言分かみさんを出しなんし
 (天) わづらかな紐をとくに二兩出し、
 (花) 喰初も帯解もする三會目、
 (花) 婆々アが笑へば傾城帯をとき
 (明) 三會目心の知れた帯をとき
 (安) 三會目チットは女郎買つたやう、
 (花) 主の夢計見いしたと三會目、
 (孫) うれしいねまつほの浦がきしいした
 (寗) 煩つた證據を出せと責められる
 (安) 住所姓名たゞされる持てた晩、
 (明) 俗名をあらはしてから所帯めき、
 (天) 陸言に七ツの年から十五年、

幾那に言掛く

掛く | 狂言の筋書に言

此癩を治す妙薬は楕圓形の黄金錠の外なし

無心を聞いてくれぬ穴

〆 廓ぼらのきなく腎薬にはならず
 〆 眞實な談かゝさんは繼つぎざんす
 〆 なんとしいせうどつちらも三會目
 〆 三立目の幕で息子は殺される
 〆 三會目癩の居所をいぢらせる
 〆 傾城の癩はいびつに凝つてゐる
 〆 妙薬をあければ中は小判なり
 〆 拜みんすなどいはれて舌を出し
 〆 川竹のころし文句はをがみんす
 〆 傾城は佛と見るとをがみんす
 〆 かんざしでじれつたい穴二つ三つ
 〆 マアうんといひなんしよと振り上げ
 〆 うんといひなんせんと振りんすにへ
 〆 マアでなくはつきりうんといひなんせ
 〆 あてにしてゐんすはいやなんすなり
 〆 いひにくゝありんすねへと氣味わるさ
 〆 極樂も二三度行くと責るなり
 〆 爲になりんすとは下卑た貰ひやう
 〆 御廉紙に國分錢ざりくんなんし
 〆 虫のいゝ女郎十兩くんなんし
 〆 わきものゝやうに百兩くんなんし
 〆 たつた十兩來んしたと太いこと

| ヤット宵めて寝
 かしたる甚助の床
 風來儀に治るの
 語を結びたる趣向
 | 女郎の常套語也
 歸る氣ならぬ歸り
 ならぬ人の氣も知
 らないで馬鹿らし
 しい也

櫻色

〆 手短に云へば口説も無心なり
 〆 談し(離し)なよ聞きやせうよと逃仕度
 〆 ちもふさま無心いはせて十四郎
 〆 もつとよくされる氣で來る三會目
 〆 三會目甚だ趣意をわるく逃げ
 〆 大口説禿あたりを片づける
 〆 腕づくになると禿はぶらさがり
 〆 血眼になつて禿をふりはなし
 〆 大口説みすゝ雪にかへるなり
 〆 振切つて歸らんとすれば羽織なし
 〆 羽織の裾に坐りお歸りなんしなり
 〆 つかまへた褒美に禿はやく寝せ
 〆 あやまつたよと廊下でとちぐるひ
 〆 おさまつた床へ鳳凰來儀する
 〆 元の座へおんなほし馬鹿らしい
 〆 醉なんしたのと袖から梅を出し
 〆 醉覺の腸にちりこむ袖の梅
 〆 袖の梅重い枕を上げて飲み
 〆 袖の梅顔のさくらを散らすなり
 〆 袖の梅のんで上着のまゝで寝る

参照

宮崎十四郎、餘坊主の名人、何事にも途方もねといふ口癖
 あり、(三升屋「紙屑籠」)

―野暮
―新造

袖 | 引摺るやうな振
語あり新造赤味勝
の振袖を着る

―お氣の毒であり
んすねへ

―取廻はしの下手
なことを煙草盆の
手のなまに言掛く
―若き女と同衾し

天 袖の梅あんなんしの薬なり
 政 曲輪だけ薬の名まで模様めき
 保 薬まで梅と名附る粹酸な里
 安 袖の梅道樂らしい薬の名
 花 新造が寄つて振り出す袖の梅
 政 袖の梅藪鶯は香を知らず
 花 いけぬ晩振袖を着た番がつか
 政 振袖を質にとつてけるけちな晩
 寛 名代は袖から先に坐るなり
 政 五位の服つけし太夫の御名代
 天 二三人々質をおくはやる奴
 保 差した晩夜伽に一人つけておき
 保 名代の部屋にくやみが二三人
 花 覗いてはくやみ云つてくけちな晩
 安 御不性と遣手盃又ははじめ
 寛 名代は入らぬ銚子を替に行き
 ▲ 上書をたのみに來たに合をさせ
 明 氣をつけやなど、お針に合をさせ
 天 聞えぬは名代があんなし直段
 花 身替りのチットモ似ぬは女郎也
 花 名代は烟草盆まで手なしなり
 花 名代をとつた氣でゐる柳下恵

て平氣にて眠りた
る聖人

―氣を揉む

―新造などの異名、
前にあり

―うつかり花魁の
魂膽をしゃべる

政 名代はしかみ火鉢で鼻をほし
 政 あの子もあの子主も亦主さんす
 保 名代は狎にあづける菓子のやう
 ▲ 名代は背中合せてほとゝぎす
 保 馬鹿らしい其名代ぢやありません
 寛 引つ搔いたのが名代の申譯
 花 あいらんに叱られんすとけちな晩
 天 貞節な新造の出るけちな晩
 明 せいほらを揉んで名代さづけて來
 寛 名代がすむと羽織は召しとられ
 天 粹ぶつて名代をとりきざをいひ
 安 名代へうつぶんをいふけちな晩
 明 名代はとつくごねたと淋しがり
 保 ますく立腹名代の高いびき
 政 あしかの名代席料を三步すて
 花 つらいこと海驢の番をして歸り
 明 立つた腹つひ名代と寝てしまひ
 明 鼻唄の出る名代は美しい
 政 かたはら痛し名代も癩ざんす
 天 名代をとつて僅な住居なり
 ▲ 名代はつひチョコベコベと口走り
 ▲ 名代と帯引をする役者あり

―分散、最早其客には見込なきの意

―空

―どうせ唯でも済ます

―悪足即ち情夫

―前句の足に同じ

(明) 名代はなだめつくして呼に行き
 (天) 草履をぬぐと名代はどつか行き
 ▲ 名代がはづせば後は横時雨
 (實) 名代のすまぬ廊下に人だかり
 (保) 名代を取つて笑ふを遠く聞き
 (保) 落城は近きにありと御名代
 (明) 切レ小口名代出すが最期也
 (保) 口から出るは傾城の涙なり
 (化) 口偏に空おそろしい起證文
 (明) 起證(着せう)とは裸にせうと云ふことか
 (化) 彫物も遊女(祐乗)の作は金になり
 (政) 金なる細工命の彫物師
 (保) めどにとる客に命の針仕事
 (政) 縫物は出来ぬが意氣な針仕事
 (政) 袖をまき雪の肌にみすや針
 (政) こいつ痛事おいらんの針仕事
 (化) 二の腕で金をほり出す紋日前
 (政) 金をとる證文にする入黒子
 (政) 眞青なうそを傾城針でつき
 (實) 傾城の腕に俗名きりつける
 (保) 我足を二の腕へほる浮氣者
 (政) 命へ灸は虫の根を切る仕掛

―入墨を灸にて消す
―情夫

―「年をへて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」西行

―入墨の痕やら灸の痕やら

―心中した男女、各厄年なり―田町の床屋

―女の小指の形容

(天) い、施主が附いて命を火葬にし
 (保) 紋日の病虫の名を焼いて治し
 (化) 持つた奴金で命をやかせてる
 (政) 灸ですゑ切るのは惜しい命也
 (政) 命なりけり小夜更けて艾の香
 (政) 太えあま腕に火葬が二つ三つ
 (政) 二の腕の火葬で客をあつくさせ
 (化) 二の腕を反古染にして年が明き
 (明) 不心中遣手へガラリぶちまける
 (化) 雪隠を出て心中をいひのべる
 (政) 廿五と十九さといふ奴床、
 (安) 懐劍をけどつて遣手揚げぬなり
 (明) 心中はほめてやるのが手向なり
 (實) 指切るも實は苦肉のはかりごと
 (政) 切る指は血の出る金もとる氣也
 (化) 白魚の首剃刀ではすに切り
 (保) 剃刀で白魚を切りくはせる氣
 (政) 木枕を小指にさせる痛いこと
 (實) 襟元で女郎の指に怪我をさせ
 (政) 指切丸のどたん場は箱枕
 (保) 此小指さては新粉かエ、無念
 (天) 指つ切して傾城の仲のよさ

金毛の狐
七代高尾は六本
趾なりしといふ

血まみれの小指
の先也
牛王の誓紙、烏
の繪模様あり
紋日などに揚代
金を拂つて女郎を
一日買切にする時
西の内の襷紙に街
仕舞と書き内所又
は引手茶屋の長押
に張出す札
土藏附賣家の札

振られた返報
意趣返しをされ
た女郎
その女郎の抱主

指を切るから九品本の浄土迄
九尾よりこはい女郎の九本指
六つ指をけなるがつてる馬鹿女郎
鳳凰の切賣わづか指ばかり
商賣を身にしみる奴指を切り
双物三味で息子は殺される
傾城の小指で動く石の蓋
約束に烏に指の血を吸はれ
仕舞札小指の糊(血)でやつと張り
天人の五衰五節の仕舞札
仕舞札度々重つて土藏附
傾城に埋められてゐる總仕舞
札掛けの松は内所へ羽振よし
つるされてゐる子もほどく總仕舞
總仕舞わづらふ禿跨がれる
病人も顔を出させる總仕舞
總仕舞だんくもんがアが出る
總仕舞血氣の勇と茶屋はとめ
總仕舞意趣返しには奇麗也
總仕舞向ふで一人見世を引き
總仕舞向ふの亭主小言なり

指の爪にある白
斑、衣袋を着る吉
相なりといふ

夜具の相談出来
女郎の物着星は
客に取つては物拔
星なり

一寸した事のこと
うて大事なること
住吉明神の一夜
や寒き衣やうすき
片そぎの行合の間
より霜やおくらん

襟に掛けたる天
鷲絨

物着星大たばに出る夜着布團
物着星客災にあはんとす
物着星見せる客にはよりかゝり
大きなが出て夜具になれ物着星
降振つた夜の曉消える物着星
客の指物拔星が出来たがり
病みついた客へ被せる夜着ふとん
本惚と見抜いて夜具をねだるなり
夜着一つ布團を三つねだるなり
夜具の無心はいひ出すも安大事
夜や寒きとは傾城のねだりごと
敷初は先づ呉服屋でもてるなり
三つ布團仕立屋一軒うめてゐる
馬鹿者もあると仕立屋居所なし
仕立屋で嬬ア寝て見ろ三つぶとん
船宿にある内夜具へ人だかり
餘所のない進物夜具へ鬘斗をつけ
毛切らずは是見てくれの飾夜具
三つ布團ウンと云つたが夫つきり
三つ布團承知くで五人切れ
月ばかり仕舞つて夜具の山は逃げ
夜着布團大じやもつらの客がくれ

一 實生彌五郎道成
寺の能に梵鐘の中
より出てんとすに
意恨あるもの態と
鬼女の面を置かず
彌五郎怒つて小指
を喰ひ切り血を以
て己が顔に染めて
舞納めたることあ
り

一 ニツ返事

一 床飾の牛、重ね
布團の上に置かる
一 此瘡三布團を被
すれば治すること
妙なり

一 隣の花魁の眞似
をせよとなり

一 敷初には一同へ

- 三つ 三つ布團天水桶の下に敷き
- 三つ 仲の丁簾がかすむ夜具の富士
- 三つ 三つ布團よつぽど天へ近うなり
- 敷初 敷初の夜具は禿とせいくらべ
- 三つ 三つ布團坊主禿の肩をこし
- 銀烟管立かけておく三つ布團
- 三つ 三つ布團のぼりつめるとすべりおち
- 舌よりも布團一枚よけいなり
- 紋所を一つ半分つけたがり
- いらんの屏風は夜具と不釣合
- いゝ夜具でざんすが指が痛うおす
- 剃刀で夜具を仕立る別世界
- 小指の即智夜具となり面となり
- 苦患(普賢)菩薩の乗物は三つ布團
- 我夜具へ女郎を寝かすきつこと
- 二つづゝ返事をさせる三つ布團
- はふり込まれたやうに寝る三つ布團
- 敷初は目貫のやうにぶつ坐り
- 撫牛の夢は敷初苦勞なり
- 敷初 敷初の隣座敷は癩を出し
- 蒸籠の隣遣手のわめく聲
- 夜具布團吉原中の蕎麥をくひ

第七章 揚代金附吉原細見

女郎の玉價と、細見の符徴とは、時代によりて多少の相違があるかは知らぬが、先づ、入山形に二つ星々といふのが、女郎中の最高位で、所謂晝三の太夫とはこれである。晝三

一 蕎麥の振舞をなす
の慣例也

一 鼻の下も亦のび
たり

一 身體も没するば
かりの床

一 蕎麥の小間物見
世

一 布團を縫うた人

一 七枚裾

一 唐草模様の布團
掛を柏餅に擬した
る趣向

- 敷初は蕎麥屋がいつち早く知り
- 鳳凰の噂が出来て蕎麥を買ひ
- 敷初 敷初の蕎麥はよつぽど延びたもの
- 新蕎麥に小判をくづす一ト盛り
- 吉原へ蕎麥喰に行くきつこと
- 蕎麥腹でふくれ返つた床をとり
- 敷初に蚯蚓のやうな反吐をつき
- 今日の上客と針に蕎麥を強ひ
- 總名代として婆々ア蕎麥の禮
- おつばだを抜いて女郎に七ッ着せ
- 唐草の柏餅には息子あり
- 内の布團が二三十出来るなり
- 女房はきたない夜具に一人寝る
- 此夜具もつまれやせんと恐しさ
- 夜具の文女房ふて寝の枕紙

とは 晝夜共三步の略稱にて、一日の揚詰は、一兩二歩になる。次は三步の女郎とて、晝夜にて三步、片仕舞が一步一朱、符徴は今である。以上の二種が、例の仲の丁張の花魁で、以下、二歩から二朱まで、數段の等級に分れてゐる。尤、新造は普通が二朱で、獨り江戸一の扇屋のみが一步であつたやうな意味の句が二三見えて居る。夫から河岸見世となると、一ト切百文といふのが通相場である。猶細見の一部を抄録し、參照に供へおくべし。

一 冴えぬ容顏

○ 晝三は保養にはチト大きすぎ

○ 月蝕のうまれ晝三にはなれず

○ 北星は晝夜三步の光あり

○ 任官は太夫叙爵は晝三位

○ 九十夕の座敷をてらす百目掛

○ 九十夕も二十四文も同じ夢

○ 打掛へ羽織がついて六十夕

○ 分銅が六つ目方のある女

○ 鳳凰の價は桐が三つなり

○ 鳳凰は桐の花ふるさとに住み

○ 春宵一刻價は三步なり

○ 松の間はいづれ太夫の御席也

○ 位には松姿には柳なり

○ 直は三步のろしを見たら笑ひさう

一 江戸城大廣間に言掛く

一 艶妖嬈娘に似たり

一 一兩二歩 織場

一 夜鷹の枕價(第五編第二章參照)

一 太夫三步 藝者

一 二朱銀六ツ 三步

一 二分銀三ツ 一兩

一 後光燦爛たる彌陀如來

一 第二編第三章に言へり

○ 北方の菩薩あつとめ三部(歩)經

○ 北國の彌陀はあ丈三ぶなり

○ 門徒宗の佛壇を三步で買ひ

○ よそにのみ見てややみなん代三步

○ 美しい筥一兩が一步ぬけ

○ おもしろい筥床代が三步也

○ かみしめて見れば三步は三步也

○ 三步丈かくべつ痛い振りやう

○ 八百が元で賣るのが三步なり

○ 掛價なし一山三步づゝに賣り

○ 三步にはつきもの多く怖いこと

○ 並んでゐても三步程高いなり

○ どのこが目ずき真中の子は三步

○ ひよっ子が二羽つく籠の鳥三步

○ より取も見取(縁)のつくが直が高し

○ 晝三の右や左は一步なり

○ 一箱はよく化け三步よく化かし

○ 近くば寄つて目にも見よ三步なり

○ 道中は八文旅籠 三步なり

○ 八文を三百四で息子買ひ

○ 甲乙は布團を敷いて御らうじろ

○ 一步二朱ぐらい待つたにまだうせず

一 千兩役者

一 禿

一 安宅の文句取

一 外八文字 一泊の宿料

一 百疋を一步とす

一 三步以上三つ布團以下一枚布團

一 晝三を買つて半夜床の番

—太夫の一枚繪をつるす
—猶(第二編第四章參照)

—曆の黒星は悪日の印なり

—悋氣

—鍛冶町瘡毒藥

—一番下の隅

—細見板元通油町
—葛屋重三郎
—武鑑板元日本橋南一丁目須原屋茂兵衛

- ⑤ 呼出シに見世を張らせる繪草紙屋
- ④ 呼出シははづかしくなく賣れのこり
- ③ 細見で見ても北國山だらけ
- ② 評議一決山形へおしよせる
- ① 細見で見れば黒日がいつちよし
- ⑥ 双六盤は細見の仲の丁
- ⑦ 細見に二朱の印は五分の蝕
- ⑧ 二つ星見附けて嫁はこいつだな
- ⑨ 三つ星の氣づかひはなし二つ星
- ⑩ 傾城の人別帳を賣りにくる
- ⑪ 納メ額遣手の場所へ願主の名
- ⑫ 吉原は重三茂兵衛は丸の内

第八章 吉原の制裁

桶伏セ——附ケ馬——始末屋——散ン切——

—女郎の密行——女郎の駈落——折檻等

客若し、遊興の上、囊中無一物と来て、仕拂が出来ないと
いふやうな場合には、窓を明けたる鶺鴒籠其儘の桶を被せて、
道路に晒したといふ蠻的極る制裁法が行はれて居た。

是が即ち桶伏せなるものであるが、後には夫が廢りて、妓夫を附馬にして、金策に出る客に隨行せしめ、愈々いけなければ、始末屋といふものに下げ、其客の身の廻り一切を賣拂はせて、辨償せしむるといふ方法が用ゐられたのである。それから、性惡の客が馴染の女郎に渡りを附けずに、同じ家の他の女に手を出すといつたやうな、惣じて沒義非道の行爲でもやらうものなら、夫こそ大變、大勢の女郎共が寄りたかりて、其男の鬘を散切にするなど、頗る峻烈なる私刑が行はれて居たのである。又女郎が素人風、若くば男に扮して、ソツト大門を脱出し、内々情夫と密會して、命の洗濯をやつたといふやうな意氣事は、折々爲永物などにて見當る筋であるが、その本式に見越の松ヶ枝に投げかけた緋縮緬の扱を傳うて、黒板塀を乗越え、サアおぢや、など、洒落損つて、取捕つたが最後、忽ち女郎の等級を下げられ、或は下等見世に貶謫せられ、時には赤裸々となして、柱に縛られ、折檻の笞を受けたといふ、丸で明烏を正で見るやうな慘劇も、屢々演ぜられたのである。

- 〔寶〕 桶伏は元手の入つた恥をかき
- 〔安〕 桶伏はさかさなふるひ取つた上
- 〔寶〕 伴頭が來て桶伏にのびをさせ
- 〔保〕 伴頭が受出してくる若旦那
- 〔廻〕 桶伏と入レ替にする座敷牢

遊人地廻等を指す
 桶伏に似たり参考句としてはさむ
 第三編第六章參照
 放れ馬くを遊作にいへる可笑味の

- 〔保〕 無い大盡(内大臣)を桶伏にする曲輪
- 〔寶〕 桶伏の人も日和を聞きながら
- 〔寶〕 桶伏をはじいて通る日和下駄
- 〔保〕 桶伏の身で鬮は水をのみ
- 〔廻〕 桶伏を出ると遣手をたておろし
- 〔安〕 引馬で大門を出る飛んだ客
- 〔安〕 馬をしよつたのが一生の不入柄
- 〔保〕 道草を喰ふを附ケ馬油斷せず
- 〔保〕 附ケ馬油斷 放れ客
- 〔安〕 けしからぬ武士北國の馬を引き
- 〔安〕 極樂の馬は娑婆まで附いてくる
- 〔安〕 附ケ馬もえてジャク馬に蹴倒され
- 〔安〕 向ふ見ず飛ばせた駕が馬になり
- 〔保〕 馬とどうだうさてけちな朝がへり
- 〔保〕 再應(塞翁)の事故馬がついてくる
- 〔安〕 伏見落城始末屋にたてこもり
- 〔保〕 かくの始末やと紙入あけて見せ
- 〔安〕 客種のわるさ始末におへぬなり
- 〔保〕 毎度お世話と始末屋へ三會目
- 〔安〕 又おめへかへと始末屋あされはて
- 〔安〕 始末屋と知らずお袋馳走ぶり
- 〔保〕 始末屋大變 此間久離帳

縁と髻とを兩様に言掛けたる句作

その頃江戸市内に夜中不意に出て女が髪を切る事ありしより此句あるなるべし
奉行所の申渡に擬したる句作以下三句亦同じ

- ① 傾城の意地は五丁を構ふなり
- ② よくつらを踏みなんしたとブツリ切り
- ③ 髻を切れとおいらん下知をする
- ④ さんざりにしなとゾロ／＼上草履
- ⑤ 男たるものゝ元どり切るところ
- ⑥ 美しい狐男の鬘を切り
- ⑦ 髪切はいづれ狐の仕業なり
- ⑧ 廓法でざんすと丸くすつこかし
- ⑨ 罪科をいひたて元どりを女郎切り
- ⑩ さんざりてたゝきはなしに息子され
- ⑪ チョッキリと切つて門前拂ふなり
- ⑫ 賞は指を切り罰は散切にし
- ⑬ 賞罰は指と髪とでわかるなり
- ⑭ とんだ目にあつたと頬被りぐる
- ⑮ 頭巾でも召してと茶屋は笑止がり
- ⑯ 天窓かくして尻の出た床へ行き
- ⑰ 散切を田町の床は待つてゐる
- ⑱ いつこくな所と田町の床屋いひ
- ⑲ 田町にてエンヤラヤット豆本田
- ⑳ さんざり本田の結賃が一步なり
- ㉑ さんざりの母懲りやれよく
- ㉒ さんざりにされた女房いさどほり

田町奴床の暖簾に天窓を突込んで尻ばかり出したる繪を描きありし

淫賣露見其他女にあるまじき行爲をなしたる女は奴と稱して下等見世すの制裁法ありたり(第五編第二章参照)

第三編第二章參照

赤坂奴に言掛く

不斷前帶

問夫に逢ふ日或は芝居の忍見物とも解すべき乎
後帶の形容

まんまと四郎兵衛の目をくらまし得たり

- ① 髪が結はれて餘の家へ又通ひ
- ② 客が奴にされさうな江戸の張
- ③ けうとい趣向は女郎の奴也
- ④ 掟を破り西河岸へ配所する
- ⑤ 西河岸へ美人天上より落る
- ⑥ 向ふの人のない所へ下げられる
- ⑦ さとの奴もなげやり(槍)に客をふり
- ⑧ 化けて出る帯は脊中に落附かず
- ⑨ おもしろい日には傾城らしる帯
- ⑩ 茶袋をしよつて飛出す籠の鳥
- ⑪ 傾城の氣ばらしになる後帶
- ⑫ 前帶を後へまはす客がくる
- ⑬ 袖頭巾くらひこませる道具也
- ⑭ 傾城の品玉にする袖頭巾
- ⑮ 町風に化けて一日氣をはらし
- ⑯ 町風かなどゝお針に見てもらひ
- ⑰ 町風にお見えなんすとお針いひ
- ⑱ 九郎助のわきで男に化けてゐる
- ⑲ 運のよさ土手へくる迄男なり
- ⑳ 股引と羽織で籠の鳥は逃げ
- ㉑ 股引と頭巾をとると女郎なり
- ㉒ なりは男だが泣く聲は女郎也

— 淺草並木町

(天) すばらしき男物着て口説いてる
 (花) 鳳凰はしばし並木に羽をのばし
 (天) 優男待てと四郎兵衛ひとつとらへ
 (花) 關守は手のある鳥と氣がつかず
 (明) 四郎兵衛が不首尾變生男子也
 (夜) 四郎兵衛が關所破りは高が知れ
 (寶) 四郎兵衛をおそろしがあつろしい
 (天) 四郎兵衛から受取つて柱へくし
 (明) 縛られた女郎のそばに袖頭巾
 (天) ふんごみと頭巾四郎兵衛からとけ
 (天) 四郎兵衛を叱つて遣手かけるなり
 (天) 簞笥から遣手ふんごみ見附け出し
 (安) 此鍵で合はせて見なと遣手出し
 (明) 詮義しろ文でもあると逃げた後
 (寶) 金のない方へ涙を封じこみ
 (花) 惡蟲がついてくひ切る縁の糸
 (明) つまむにも足らぬ禿に氣がおかれ
 (天) いさゝか御馴染染禿にかくれごと
 (花) いつそ逢はれなんすと新造くる
 ▲ぬけがらの後へ引込むほまらもの
 (夜) 客帳の紙(神)も御存じない出合
 (夜) 花山へ入らぬは間夫の曲り路

— 情夫

— 花山帳

— 惡足

四月八日廿茶に
 一、千早振卯月八
 日は吉日よかみさ
 げ等をせいはいぞ
 する一と書いて張
 り蟲除の咒となす
 此句の蟲は前句の
 即ち鳳凰の羽蟲な

— 大黒柱

— 赤裸々

(花) 鳳凰の羽蟲を遣手とつてすて
 (明) 色をするつらかと遣手繩をかけ
 (夜) 遣手智恵格子の隅へ千早振
 (天) 縮緬を捕繩にする遣手婆々
 (寶) 縮緬は遣手のつかふ猿轡
 (明) 縛られた前を遣手のすぐ通り
 (花) くしあげなさいと遣手をばでいひ
 (安) 目出度い柱へ女郎をくしあげ
 (天) 土ごねのやうに女郎をくしあげ
 (天) 傾城を太白にするむごいこと
 (安) 槍(遣)の折檻針が出てとりさへる
 (夜) 癪を押へてお針さん聞きなんし
 (明) 新造はお針のそばにちこまり
 (安) 身に染みやよさとお針は繩をとき
 (明) 名代の足らぬ所で繩を解き
 (寶) 裏の堀半分越して直が下り
 (寶) 腰帯は見越の松に逃げ残り
 (寶) 落ちて行く二人が二人帯はなし
 (花) 鳥籠のひごからぬけてどぶを越し
 (明) 大どぶの向ふへ残す上草履
 ▲中ぬきのふんごんである中田圃
 (明) 傾城ははだしになると共早さ、

(也) 籠の鳥空音で關を赤合羽
 (天) 一生懸命傾城赤合羽
 (保) 四郎兵衛が追手をかける赤合羽
 (實) 逃げたときや男の中で夜をあかし
 (安) 逃げた晩宵に長唄二度通り
 (明) 逃げた晩得知れぬ初會五六人
 (安) 逃げたあと禿は酔うてたはいなし
 (明) 逃げたあと禿は對に縛られる

禿を酔はして逃
 二人共知らぬ管
 なし白狀せよとな
 り

第三編 吉原の遊女

第一章 遊女の身の上

身賣附女街——突出シ——身揚り——月
 經——附懷妊——病氣——灸——出養
 生——附鳥屋——鞍替——身受——年明
 ——新世帯等

(明) 大病に女街の見える氣の毒さ、
 (明) 生薬屋ぜげんの側で五兩とり、
 (明) 突出シの親人參をたんと飲み、
 (政) 母親が晝の鶴故泣く娘、
 (保) 薄べりで立て切る駕の泣別れ、
 (保) 弟の角兵衛殿は十二文、
 (保) 人參は胸一杯になるくすり、
 (也) 鳳凰の卵人參代で賣り、
 (也) 八文になる人參の煎じがら、
 (政) 客ものぼせる人參の煎殻、
 (也) 煎じつまつて娘にも相談し、
 (也) 孝行な娘我身を煎じさせ、
 (保) 孝行さ薬の鍋へ身を投げる、
 (保) 病む親を見すて四手へ乗るも孝

一八文字

一夜の鶴にあらす

松葉屋

- 花 つゞれから絹布へうつる孝行さ
- 花 鳳凰の中に反哺の孝もあり
- 花 鳳凰になる子は晝の鶴が産み
- 花 子を捨てる藪を尋ねる時鳥
- 花 血を吐くおもひ半挿(半藏)へ子を沈め
- 花 むごい親娘を猫や杓子にし
- 花 くひ兼ねる親に娘が飯を盛り
- 花 女房に飯を盛らせる業さらし
- 花 眞實は女房石より金になり
- 花 貞女と孝女石となり金となり
- 花 火の車娘 地獄の責にあひ
- 花 未進積つて山形に娘成り
- 花 よい娘年貢すまして旅へ立ち
- 花 水牢は出たが娘の身は沈み
- 花 田も鳥も水にとられて流れの身
- 花 水損の村へノサノサ女街行き
- 天 四手駕浪宅へくるいぢらしさ
- 花 銀打と四手娘の運不運
- 花 蜜柑籠よりはむざんな四手駕
- 花 鳥籠へ娘を入れるむごいこと
- 花 掃溜の鶴鳥籠へ女街入れ
- 明 不仕合はせ箱の娘を籠に入れ

佐用姫

年貢の滞納

他國にて勤をなす

御股勤

捨子

貧家の美女

年季證文を書く紙

三文判

證文の請人

女郎に入つて眉墨を入る

博奕にて分散つてしまふ

容色ある芽花賣の田舎娘

- 花 八重葎しげれる宿へ女街くる
- 花 手拭ではたいてせげん腰をかけ
- 天 西の内をくんなはいと泣いてくる
- 天 泣く娘をばで伴の如し也
- 花 人主を三文出して買ひにやり
- 花 假の名は伯父本名は女街也
- 明 よく聞けば砂利場の伯父も他人也
- 天 あんぢいといふなと女街叱るなり
- 花 貧家の大詰女房が引眉毛
- 天 負けかけて女房に眉毛つけさせる
- 花 前帯になると女房もさく成り
- 花 はき溜の鶴へ女街は撲をかけ
- 花 下心あつてつばなを女街買ひ
- 花 親も子も泣いてる外トに四手駕
- 花 泣くことはないと四手のごさを下げ
- 花 駕の戸がはづれて二度の暇乞
- 花 宿下りはならぬ御家風だと女街
- 花 おしろいが泣くとへけると女街いひ
- 明 不景氣な吠えあがるなと女街いひ
- 天 掛聲のない四手には女街つき
- 明 小便を坐つてしろと女街いひ
- 明 買出すと女街絲瓜でおつこすり

② わんぱうで春中かくなと女衞いひ
 ③ 玉磨かざるを女衞連れてくる
 ④ 女衞の子女を玉と覚えてる
 ⑤ 仕合せなわれはあやだと女衞いひ
 ⑥ 賣物だなぶらしやるなと女衞いひ
 ⑦ 孝行も四手不孝も四手なり
 ⑧ 高札のうらを孝女の四手駕
 ⑨ 大門だ泣くと縛ると女衞いひ
 ⑩ サア此所だつらを拭へと女衞いひ
 ⑪ 吠えたたとて歸へすものかと女衞いひ
 ⑫ 吠えただけ五兩さがると女衞いひ
 ⑬ 田の中へ駕から美女をぶちまける
 ⑭ 別條ねへむく犬だよと女衞いひ
 ⑮ 泣くつらが此位だとせげんいひ
 ⑯ 嘘も少しはつきますと女衞いひ
 ⑰ 傾城になるも越後の一トムしぎ
 ⑱ 七不思議スコ(少)おいらんも覚えてる
 ⑲ 故郷はと問へば越後の親不知
 ⑳ 傾城のふるさと寒き所なり
 ㉑ うぬが子を江戸へ蹴落す角兵衛獅子
 ㉒ おらが姉さん三分でござると角兵衛獅子
 ㉓ 角兵衛が姉でござんと打明し

一 女郎に越後者多
 きは七不思議の外
 なり

一 「名にめて、折
 れるばかりぞ女郎
 花我おちにきと人
 にかたるな」僧正
 遍昭

一 此花咲耶姫の酒
 落

㉔ 受出して思はず獅子の兄となり
 ㉕ 角兵衛獅子廊で姉にめぐりあひ
 ㉖ 角兵衛が姉とは見えぬ八文字
 ㉗ 子の出世錦繪で見る角兵衛獅子
 ㉘ 甚九をばおよしなんしと思出し
 ㉙ 傾城のこしかた思ふ角兵衛獅子
 ㉚ 親の爲我落ちにきと女郎花
 ㉛ 二十四も孝三千も孝ざんす
 ㉜ 突出シのしるし額で人を見る
 ㉝ 顔上げて居なと突出シ叱られる
 ㉞ つきだしの一日二日はれまぶち
 ㉟ つき出しと見えてつくねたやうに坐し
 ㊱ つき出しの袖は階子へひつかゝり
 ㊲ つき出しに此花さんは昨夜(咲耶)から
 ㊳ つき出しは七十五日客が来る
 ㊴ 自他のちがひは突だしと突だされ
 ㊵ 地女のやうだと姉にいちめられ
 ㊶ ほれやうの振附ケもする姉女郎
 ㊷ 姉女郎吹出すやうな傳授をし
 ㊸ おいらんの取てき投る手は知らず
 ㊹ 姉女郎こよりを笑ひくより
 ㊺ 客のない姉に反哺の爛さまし

一 ふんどし擔ぎ

一 眠る鼻へ突込む
紙捻

―仕舞を附けても

- 〔花〕 引いた茶を客にのませる姉女郎
- 〔寶〕 身揚リを紅でしるした覺帳
- 〔寶〕 身揚リは不性くゝにゆるりと寝
- 〔明〕 身揚リの火燧に遣手のめり込み
- 〔明〕 身揚リは遣手へあてる道具也
- 〔花〕 身揚リの部屋へさしこむ月と癩
- 〔明〕 身揚リといひそな所へ蜘蛛が下り
- 〔寶〕 身揚リの場へ七夕の影がさし
- 〔寶〕 身揚りが来てはお針の邪魔になり
- 〔明〕 身揚りは御報謝などおどけて來
- 〔花〕 身揚リの日はなき父へそなへ物
- 〔寶〕 身揚リの部屋に村の名書いた笠
- 〔寶〕 身揚リも二月二日はおのがため
- 〔明〕 傾城の灸は錦にしがみつき
- 〔寶〕 くじどりて遣手が灸をすゑてやり
- 〔天〕 消過の點などおろす遣手婆々
- 〔明〕 灸据ゑる禿の顔を見にたかり
- 〔花〕 灸見せて禿の親に安堵させ
- 〔安〕 月明にして星はかくれたり
- 〔安〕 猿猴が月だと逃げるけちな客
- 〔安〕 傾城は度々怖の來る腹をたて
- 〔安〕 傾城もたまには強い藥なり

―此月は赤い月也
―馴染の客來る也
―我せこが來べき
―宵なりさよがにの
―蜘蛛のふるまひか
―てしるしも―衣通
―奴

―國元の親身尋ね
來る
―二日灸

―來なくてよい御
客様也

―産婦の食ふもの

―産後の髪

―土手の果、箕輪
―悪疾などに罹り
て休養すること

- ▲ 女島間引く藥はしやうき散
- 〔安〕 信念なお方へ月を割りつける
- 〔花〕 主の子でさんが産ませなんすのか
- 〔保〕 燒鹽の湯漬がたべて見たうあす
- ▲ 餘の客がサツパリ切れて乳が出る
- 〔安〕 ためし少き川竹の乳をしぼり
- 〔明〕 苧で髪を結ふ傾城の珍らしさ
- 〔安〕 稀なこと流れの水で湯を沸かし
- 〔明〕 産んだのをかたはのやうに五丁町
- 〔天〕 乳が黒くなると箕輪へ蟄居させ
- 〔明〕 なきにしもあらず箕輪で育てさせ
- 〔花〕 なきにしもあらず禿にして育て
- 〔安〕 人こそ知らね血を別けた禿也
- 〔明〕 ほしころしもされず遣手里の口
- 〔安〕 穴を出て山谷で育つ狐の子
- 〔安〕 川竹のやせを山谷へ出養生
- 〔寶〕 蛙釣る女郎の側に藥鍋
- 〔花〕 日本トヤの果へ傾城トヤ所替
- 〔花〕 鳥屋トヤにつく女郎は客を歸トヤ(解)す也
- 〔花〕 客帳の紙(髪)ゲツソリと鳥屋で減り
- 〔安〕 鳥屋あがり藥罐がヤット茶釜なり
- ▲ 鳥屋の子を出して日濟へいひわけし

一 済ました顔付
一 二人禿

一 苦海十年は普通の年季也麻詞を面壁九年の拂子の語呂にせし趣向
一 十八日二十八日

一 九月九日十九日廿九日を三九日として茄子を喰へば運よしといふ
一 御負さる下心
一 三月の夜櫻、十度目には二十七明となる

一 星に言掛けたる趣向、次句亦同じ

安 色情のぬけたこといふ鳥屋の嬢
 安 鳥屋の子姉御くくと立てられる
 安 前髪のからまつてゐる鳥屋の嬢
 寶 傾城もさびしくなると名を替える
 花 ジャ 馬は時々鞍を替えるなり
 花 鞍替に出る氣遣手をたておろし
 寶 鞍替に遣手をねめてズット出る
 寶 鞍替に鶉のくぐつたるつらを出し
 寶 鞍替のあはれは禿對に泣き
 保 十六夜で賣られて闇に受出され
 政 十年はオツス九年はホツス也
 政 観音で賣られ不動で受出され
 花 二十七思へば嘘もつきあさめ
 保 是までは未顯眞實二十七
 政 月雪と花で三苦(九)の二十七
 安 美しい花を散らすと二十七
 安 色を賣る茄子も三九で年が明き
 保 傾城が客を見立てる二十七
 花 ぢれつたさ年明前の 閏月
 政 植ゑる櫻は七明ケの一里塚
 保 七明ケは年季證文まで小皺
 政 北極の分野を出る二十八

一 眉を落とす

一 とらうく 部屋持にもならず

一 遊女は足袋をはかず、次の章参照

一 老松の文句取

一 子の日遊を寓す

政 二十八宿で北斗の年が明き
 寬 二十八から草と木と一所なり
 花 娑婆も額も廣うなる二十八
 明 床柱しよつても見ずに年が明き
 寶 川竹の流れ止りは遣手なり
 安 つきぬけて客をとること三ヶ年
 天 年明の内て四手は酔つ拂ひ
 寶 地女になつて昔のたなゑろし
 安 年明が一人りアハハが五六人
 保 傾城は二十八にてヤット足袋
 政 何文の足袋やら二十七の暮
 保 二十七推量で買ふ八文半
 政 誰が年が明けたと足袋屋聞いて見る
 花 泥水を洗つて白い足袋をはき
 花 足袋はいて思へば二十五年の非
 保 はき初めた日はじれつたい足袋の紐
 花 年があいて足を袋に入れるなり
 花 ぁいらんの足を袋に息子入れ
 花 我足の寸初に知る運のよさ
 政 柳松のめでたきは足袋をはき
 保 道中をしなければ妻の足袋ぎらひ
 花 さとの松引くのは金の右(有)大臣(盡)

仲の丁茶屋、前に云へり

- 〔保〕 お齒黒を出すには鐵漿(金)がたと入り
- 〔安〕 わつちらも受出してよと禿泣き
- 〔明〕 嬉しがる側に禿は泣いてゐる
- 〔明〕 七軒が同じ祝儀の言葉なり
- 〔天〕 傾城の好事は門を出づるなり
- 〔寛〕 女人成佛 四郎兵衛へ暇乞
- 〔政〕 白堀(四郎兵衛)を出て黒堀に圍はれる
- 〔寛〕 桐の光で鳳凰も籠を出る
- 〔政〕 嬉しさは廣い籠から狭い駕、孝行に賣られ不孝に受け出され
- 〔明〕 後指さされた女郎 天上し
- 〔明〕 四五人をべら棒にして受出され
- 〔明〕 後金が遅いと見世へ出すといふ
- 〔保〕 不屈な工夫一旦受け出され
- 〔政〕 親元へわたつて松の根を廻はし
- 〔保〕 荒神にする氣で松に入れあげる
- 〔天〕 きついでと男にせずと連れて出る
- 〔花〕 白齒になると駒下駄に年が明き
- 〔寛〕 身がまゝになるとふんどし迄白し
- 〔明〕 二十八からふんどしが白うなり
- 〔政〕 よい娘をしい事には齒が黒し
- 〔政〕 北斗の星が嫁入にさはるなり

踏段

親引の體にて太夫を根引す

女房、松は荒神に捧ぐる花

公然との義(第二編第八章参照)

お齒黒を剃きて素人になる

緋縮緬を廢す

齒を染めた痕あり

曆の星を山形の星に利せたる趣向

筭の痕あり

伊達巻

第二編第四章参照

黒塗の耳皿にあらず

命と云ふ字を腕にほる也

手不調法

- 〔安〕 山形の星結納にさしさはり
- 〔安〕 他人の中を見て來たで縁遠し
- 〔政〕 ひよめきの外は抜目のねえ女
- 〔花〕 ひよめきの毛は薄いでもいゝ女房
- 〔花〕 八の字の筆法今にある女
- 〔花〕 受出すと亂筆になる八文字
- 〔明〕 女房になつて無筆のあるきやう
- 〔保〕 名も顔も變つてじみな後帯
- 〔寛〕 受出され脊中に帯が落ちつかず
- 〔政〕 細帯の女房で内がしまりかね
- 〔政〕 鈴の音今は鉄にきく身儘
- 〔花〕 鈴虫の音にも目さます出た當座
- 〔花〕 とんだ花嫁鼻紙で火をおこし
- 〔寛〕 鼻紙で手をふく女房酒も成り
- 〔明〕 兩耳のないで内儀はかねを付け
- 〔明〕 鼻の下長く女房のお針つき
- 〔花〕 彫るより外に針業は知らぬ嫁
- 〔花〕 針(張)をすて又針を持つ二十八
- 〔花〕 三十に成るやならずのでぶつてう
- 〔花〕 二十七長屋一番手ぶつてう
- 〔花〕 此度のは二十八九のいくぢなし
- 〔花〕 二十七八の花嫁しやれたもの

厄年の女房

(保) 三十三を追出して二十七
 (保) 去り状を取つた顔ふむ上草履
 (可) 案の中去られた後へ年が明き
 (天) 悪い量見子を抓る者をよび
 (花) 後妻の元直を聞けば三分なり
 先妻に世話を焼かせた今のなり
 (政) 大金で七去兼備を受けいだし
 (安) 數千兩出してしぶといものを買ひ
 (天) 是は百兩と申す嫁にてさふらふ
 (花) 受出した時分はこゝらの暮らし
 (花) 女房がいつち踏めると見倒屋
 (保) 荒神と成つては松のふりもなし
 ▲ 分散の先づ金高が女房なり
 (安) 御新造ははやつた人と御用いひ
 (政) 受出して見れば晝間の螢也
 (保) 櫛一つへらして今は女夫鬘
 (保) 受出した女房は舌が二枚あり
 (花) 其あがり口は八町手は二町
 (花) 口も手も土手をも越えた女房なり
 (天) あつちからのお馴染と内儀さげ
 ▲ 受けられて引ヶ四つ頃は太軒
 (政) 主といつたをモシといふうまい中

|伯龍の洒落、勿
 論天人の如き美貌
 を寓す
 |界限切つての分
 限

|「手にとるな矢
 張り野におけ蓮華
 草」の類

|二の町、下手の
 俗言
 |皆八町

|情婦のこと、當
 時の通言

|命に灸を据えた
 痕
 |入墨なし

翁煙

立膝横座

姑婆

(天) 大不量見えて吉を息子入れ
 (保) かうなつて見れば小指も惜しくなり
 (保) 行きとゞく女房足らぬは指ばかり
 (政) 九本半小指になつて見れば疵
 (花) いゝ女房里と小指をかくすなり
 (政) いはずとも夫と知れかし尼の痣
 (政) なまくらは腕も無銘で年が明き
 (寶) 母の名は親仁の腕にしなびてゐ
 (花) 腕に名をほつた女房は子が出来ず
 (保) 稀なこと根引の松にとまる月
 (政) 根引した松高砂の氣に入らず
 (政) まつの字をさかさまにする身受の日
 (寶) 奥様になつても松の脂アサが見え
 (寶) 吉原のまだ氣のぬけぬいびつ也
 (可) 受けられて來ても譜代のやりてあり
 (可) 鐘四つと云はつしやるなと姑いひ
 (保) 年明の眉毛内所へおいて行き
 (保) 鐵漿買はぬ身となり足袋のきそはじめ
 (保) 二十八不沙汰の墓へ泣いてわび
 (政) ありんすが第一姑氣に入らず
 (花) ありんすで嫁來なんした里が知れ
 (花) よしなんといつて氣のつく變な嫁

- ③ たしなんで見ても辨天鳥訛
- ④ 受けられて初めて並の口をき
- ⑤ 帯代も二歩位のは水も汲み
- ⑥ 連れて来た女房ヨヂく一手桶
- ⑦ 山形も今は戸張で世帯じみ
- ⑧ 新世帯はらしい手になりんした
- ⑨ あべこべさ足袋をはいたらひびが切れ
- ▲ 随分となぶりなんしと米を漸し

第二章 遊女の風俗

部屋——服装——粉装——言語——起居——動作等

- ① 床の間に女郎の藝はありつたけ
- ② 琴棋書畫並べたばかり知りんせん
- ③ 座敷持琴はあゝして置くばかり
- ④ 音なしの瀧床の間にかざる琴
- ⑤ 座敷持小道具屋程かざりつけ
- ⑥ じんだ瓶持たぬばかりの座敷持
- ⑦ 座敷持親和とやらが書きんした
- ⑧ 仕立屋の無筆親和を裏がへし

里に出入し女郎の遊
需に應じて揮毫し
爲に少しく名聲を
おとしたりといふ
袖打掛の裏等に縦

横の健筆を振へり
と花屋来つて活く
るを常とす

参照

おくまりたるかたのざうし(部屋)にいりゐて、おのくけさう
(化粧)し、みがきさわぐ、わかきは、衣びつ長持にうちたる金
具など磨く。物の蓋に花の枝こちたく積み持来て、部屋ごとの
花瓶にさしていぬるは、花賣るをのこ(男)なるべし云々。(吉原
十二時、午時)

若い女の結ふ髪
の名

- ① 打掛の孔雀衣桁へ羽根をのし
- ② 三保の松ともいひさうな衣桁也
- ③ 羽衣を衣桁へ着せるさとの松
- ④ 衣桁には一ぱい箆筒何もなし
- ⑤ 唐(空)草のたんす文庫は金梨(無)地
- ⑥ 明店と書いて張たきたんす也
- ⑦ 書にかいて置いても濟んだたんす也
- ⑧ 眞鍮の鍵であけると何もなし
- ⑨ 空箆筒ありんす様にピンとしめ
- ⑩ 長船も乗出す引ケの帆立貝
- ⑪ 傾城のたんすはホンの犬あどし
- ⑫ 箆筒をからと見踏めねえ座敷なり
- ⑬ 譲りもの通り名及びからたんす
- ⑭ 疊屋が野暮でたんすをヒョイとのけ
- ⑮ 疊刺部屋持の名は覚えてゐ
- ⑯ 無一物たんすに坐禪豆ばかり

如何なる食品なるや詳ならず但し天保代の句に「ちりめん紫蘇を切込んて更紗梅」などあり参考すべし

眞鍮のしかみ火鉢、江口の太夫なれば白象なるべし吉原の菩薩は獅子によりかゝる所可笑し

立兵庫

江口の遊君に似たる美人

- たんすから縮緬雑魚やさらさ梅
- 傾城のたんす飯時あけるなり
- 二々間持つでもないものは榎松瓶
- 花塗のたんすから出す櫻炭
- たんすから駒下駄の出る判じ物
- 金の茶釜もありんすといふ風情
- 安女郎たんすもないが錠(情)もなし
- 長持の間に四五寸禿道
- 三つ足の獅子に普賢はよりかゝり
- 唐獅子に坐すは遊女の目貫也
- 遣手衆へ似たと火鉢へ指をさし
- 傾城の火燧は住所定まらず
- 太夫號だけに髪まで百官名
- 玉くしげ二見渦めく兵庫鬻
- 全盛な菩薩後光をたんとさし
- 北國の彌陀三尊の立姿
- 二枚櫛傾く城の龍頭
- 白象に打乗りさうな二ツ櫛
- 傾城は二枚の舌を櫛に見せ
- 天窓をば挽き割るやうな櫛をさし
- 御迎がかゝつて後光さして出る
- 天井が低くなるのは三步なり

素人の初鐵漿は七所より貫ひ集めて附くるの慣例あるより一文づゝ七軒にて買ふとの作意なり

太夫、仲又は猫などを愛養す

齒を磨くの效あり

鐵漿の光澤を増すとして入る、給、その中一本禿へのお駄賃なれば眉を落さず、寒の紅の代、本町二丁目の玉屋、紅と江戸一の角、玉屋との兩方を利かす

- 足袋屋さんばかりに借がありんせん
- 寝返りに客は目鼻をあぶながら
- かんざしをくゞり禿の耳こすり
- かんざしでしたとは派手な突目也
- とれでゞも掻きなと天窓出して貸し
- 二朱以上金紋對の箱 枕
- 小間物屋来て床花をむしつてく
- お針が進物首玉を花魁へ
- 御齒黒をつけく禿にらみつけ
- 自身にはお齒黒つける事ばかり
- 一文の鐵漿(金)とは見えぬ八文字
- 傾城のかね七文丈買ひはじめ
- お齒黒の小買三步の玉にきざ
- 松も昔はお齒黒を買に行き
- 平服で禿お齒黒買に出る
- お齒黒に禿は廊下練つてくる
- お齒黒を暖めやと梨子かじつて
- お齒黒の駄賃に一本しやぶらせる
- お齒黒を酢かさかしほのやうに買ひ
- 地女に毛虫二つで化けられず
- 寒が入らんしたと三文もなし
- 角の玉屋で約束の寒の紅

玉屋山三郎、十間店の玉山に利かす

細摺れの香と鼠泣との雨を籠めたる作意、吉原に限りて凡て花柳社界にて帯自然に結ばるを吉兆となす

鬼の禪一人のみに許るさぬとの意

昔はたいぐるぐると巻付けて紐にて結ばざりしものなり

砥粉塗

原武雜記吉原女郎の風俗を叙する條に天氣の好い日も下駄がけ云々の句あり

一枚摺の錦繪

前帯になれば後がはるか増し
 玉山の見世に三分の生た雛
 身ごしらへ禿が帯は茶屋がべ
 結ばつた帯をチュウ〜と解さ
 鼻紙を褙と一所に持添へて
 緋縮緬虎の皮よりおそろしい
 ひぢりめん幾所にも裁ちわけ
 下紐といふは木綿のことぞなし
 ひぢりめん紐のないのがほんのこと
 ▲ 駒下駄の鼻緒をなめる緋縮緬
 天鷲絨の鼻緒をなめる赤い舌
 唐人の鬻でから〜下駄の音
 塗下駄も元はといへば泥下地
 下駄草履履いて平な孝の道
 日和下駄は女のある時はいたま
 吉原の足袋屋はほんの片仕事
 禿ばかりが眞白な足である
 吉原の足袋屋禿が得意也
 たまさかに遣手へ賣れる女足袋
 新造が履いて見たがる客の足袋
 若旦那足袋がさらひで嫁がもめ
 おいらんは故郷へ錦着てもどり

父母

通油町繪草紙屋、道中委翌日は早既に見世先に曝らさる

飛跳ると言葉尻に撥音多きとを言掛く
五丁町限

六べん摺の女郎丈うつくしい
 錦繪の妻は母の癪の種
 錦繪の孝に時雨るゝ海と山
 母の目に涙娘の一枚繪
 道中は早し鶴屋で八文字
 母親は夜の鶴屋へ迷ひくる
 初會にはよく吠えたなと狎をなで
 太鼓持狎の女街で二歩儲け
 りんすしいすは北狄の言葉也
 おすざんす是通人の寝言也
 北國訛どうしんすかうしんす
 馬鹿らしうありんす國のおもしろさ
 ありんの國化物のすむところ
 籠の鳥どうしんせうと鳴いてゐる
 泥水にすめば言葉も濁りんす
 傾城ははねられる丈はねるなり
 おいらんは六町と出ぬ言葉なり
 さと言葉ならふも抜くも一苦勞
 傾城はキツト坐るとげびるなり
 チンマリと坐ると女郎下卑るなり
 立膝で文を書くのも姿なり
 上封じ問夫へ書かせる無心文

仕掛をさばく形
容 筆止のかしくを
禿の名に言掛けた
る作意猶女郎の文
は第三編第六章參
照すべし

寶 張肘をしてもヨウウ〜よい女郎衆
 花 傾城は一網打つて坐るなり
 天 もう書くことがないさうでかしくヤア
 花 問夫へやる文は禿を筆でよび
 保 極内の用は禿も目でよばれ
 明 わる紙へ紅と墨との文もかき
 安 文の先禿そろ〜巻いてゐる
 寔 禿に持たせ据風呂でよんでゐる
 安 氣のもめる文で禿もた〜かれる
 天 腹立ちのそれ矢禿へ八つ當り
 天 鶴の一聲折掛けて禿立ち
 安 様づけに禿をよぶはふきげんさ
 花 冷酒の肴に禿しかられる
 明 禿よぶ二度目の聲は幫間なり
 明 さう言つて來や其前は耳に口
 明 ほれ帳を九十九夜目に消しておき
 參照 九十九夜通ひつめた少將が、死んだと聞き、小町局をよんで、
 コレ其他帳を出して、少將殿のそこを消しておきな。(開卷百
 笑)

花 性は善なりと〜さんの日でござんす
 花 なき父母を箆筒から出す精進日
 寔 精進日女郎たんすへ手を合はせ
 花 せめてもと禿を寝かす精進日

焼飯の茶碗酒な
るべし

馴染客の控帳に
や参考句として挿
みおく

其上に位牌をか
ざる

松葉釵を算木に
使ふ也
市松模様染め
たる花簾

本尊は工藤めき

左右に禿をつく
二人禿

花 女郎花根べにつかふ禿菊
 花 さき揃ふ花の根べは禿ぎく
 花 兩方の禿は松の根べなり
 花 姦しくなるは女郎の手柄也
 花 鳳凰の羽がいに巢立二羽ならび
 保 親の恩禿を二人り持つて知り
 寔 三尊の右と左はすねかじり
 寔 鬢づら結うた厄介を二人り持ち
 安 笑はせに自鬢の禿つ〜き出し
 花 遣手は近江新造は八幡めき
 寔 吸殻を禿をよんで尋ねさせ
 花 愛想も折檻もする長烟管
 花 我を立てかける憂き日の段階子
 明 烟草屋のたより待つ間の日の長さ
 待人に良(來ぬ)の卦狐ふさいでる
 花 松葉のめどぎ待人を考へる
 花 疊算蘆功記にも見えぬ法
 花 疊算大跨に行く浮世ござ
 花 疊算二本の指の千鳥足
 保 仕舞には來るにしておく疊算
 花 裏(二會目)返へす客の氣を引く疊算
 花 胸算の側で新造た〜みざん

— 細い日

- ◎ 傾城の嫉妬は釘の場を鉄
- ◎ 桐のない鳳凰テン／＼舞をする
- ◎ 鳳凰もしほの目をする桐の花
- ◎ さとの松三十日／＼に青くなり
- ◎ 振袖を又着ようではなければ
- ◎ 打見には何不足なき女郎也
- ◎ 座敷持日なしを借りぬばかりなり
- ▲ やりくりに禿を對に裸にし
- ◎ 北國の阿彌陀御光を質におき
- ◎ 太夫職百で四文もくらからず
- ◎ 質の利は知りんせんとはいはれまい
- ◎ こざかしき禿二月まけなんし
- ◎ 風呂敷と三分握つて禿かけ
- ◎ 中指に金をく／＼つて禿かけ
- ◎ 禿曰くそれだつて貸しんせん
- ◎ 三度ヅ、食つて遣手にいぢめられ
- ◎ あぶれ女郎夜食を食ふが思也
- ▲ 惣菜は荒布と禿くちばしり
- ◎ ちつぽけな湯桶で醬油買ひに行き
- ▲ 生醬油で食ふ女郎は通り者
- ◎ 大たばな顔で附木の買ひぐらひ
- ◎ 取寄せて附木へ點の買ひぐらひ

— 九十六文を百文として九六百といふ

— 品書をしたる附木

◎ 惣菜を聞いて向ふの人をよび

◎ 孔雀のひよつ子向ふの人と鳴き

参照

振新の着附は、孔雀の染模様と稱つて居ましたが、何時頃からの事か、餘程昔からの事と見えます。一體吉原では、孔雀が宜と見えて、女郎屋の入口の壁には、孔雀が附いて居ました云々。(『趣味研究』大江戸某老妓の話)

◎ 山出シの禿向ふのふとら(人)

◎ 内藝者迄も向ふの人をよび

◎ 河岸づとめ向ふの人に事をかぎ

参照

黄昏の頃、わらはの格子の内に立ちて、差向ひたる家の前人をよびて物買ふとて、向ひの人／＼と、聲上げて呼ぶも、うつくしげ也云々。(吉原十二時、酉時)

第三章 新造 附老人客

新造とは、禿上りの年若き、突出し前の見習女郎で、未だ勿論一本立の部屋持とは參らぬ。先づ、太夫附の妹女郎といつた格である。揚代金は、二朱が通相場で、句面では、多く柳下恵を氣取つた老人客に、可愛がられたものらしく、通例、赤味勝の振袖を着て居たので、振袖新造、略して振新など、呼ばれ、其太夫附古參の筆頭が、所謂番新、即ち番頭新造なるものである。又一種、引込新造といふのは、内所にて育て上げられた、云はゞ家附の新造であつて、こ

れらは、お梅お松など、俗名を用ゐ、源氏名を呼ばせぬ慣例となつて居たのである。

一杯の助太刀

八間の吊行燈と
淀川口の八軒屋と
を利かす

三條小鍛冶に
言寄せたる趣向
御看をはさむ

廿歳なり新造と
しては少々年増過
ぎたり
相手は多くは源
三位ほどの老武者
なり

五位の赤ン坊

- 引込と號しおの字ではやらせる
- 引込は縫ふことに勝ち織るに負け
- きやうこつな御子だと遣手蜘蛛をすて
- 此お子はなど、遣手の丁とうけ
- 突出す迄は手習の君となり
- 名代に出したり下で使つたり
- 新造になるまで三度名が變り
- 新造の夜舟八けんの火もはるか
- 傾城に番頭の名は堅すぎる
- 振袖で番頭をする別世界
- 振袖の前帯餘所にない姿
- 番頭新造そるばんに合はぬ玉
- からくりの絲を番新引いてゐる
- 合槌に出る番新も古狐
- 振新は尺(酌)取虫にはさみむし
- 新造の願身揚りて寝て見たい
- 厄除けに行く振袖は賣れ残り
- 壁際に皆 緋威の鎧着て
- 緋ちぢみを着たが隠居の目に留り
- 五位の装束で居るのを隠居揚げ

新造は壁際の後
方に見世を張る

入齒の御客なる
べし
第二編第四章參
照

五十才

年寄

補腎藥

十六、六十

淨土

父の道を改めず

豆腐屋(第二編
第二章參照)

寶永山噴出

- 壁に立てかけてあるのを隠居揚げ
- 引ヶ前のあくびは壁のわきから出
- 吉原は振袖に目のつかぬ所
- 新造は眉をひそめて見立てられ
- 毛氈へ乗つて新造叱られる
- 天命を知つて新造買に行き
- 新造を冷水が來て揚げるなり
- 阿彌陀を賣つて新造を買ひにゆき
- 新造と白牛酪に入れあげる
- 新造に異見いはれる年でなし
- さかさまに讀めば新造同いどし
- 振袖の前帯を好く色親爺
- 親仁まだ西より北へ行く氣也
- 親仁のは息子が買ふた妹なり
- 三年は新造買ふも孝の道
- 振袖の温石で寝るい、隠居
- 新造の馴染實盛仕立なり
- 新造の客へ山屋の平をつけ
- 新造の客は山屋のこといふ
- 新造へ砂のふつたる物語
- 新造の座敷枯木に花が咲き
- 新造の口説かた、古い聲

死んだ孫の面ざしに其儘
佛語、逆に冥福を祈ること、孫の如き新造の腕に我名を刻ましむ
オ、五月蠅イ、耳ツ遠

二階の階子段浮雲なし

構はずに眠る

旅に寝て夢は枯野を駆けめぐる
芭蕉の句

- 明 新造は入歯はづして見なといふ
- 政 新造の悪留入歯ひつたくり
- 花 新造の格氣片鬘ひつばづし
- 政 氣をかへて忘れに行けば似た禿
- ▲ 新造の腕に逆修キヤウシュを入れておき
- ▲ 新造は三度聞かれて耳ツ遠
- 明 雪の晩かちけて来ぬと新造いひ
- 明 新造は死にはぐれめとソツといひ
- 明 とかまつて下りなと新造聲をかけ
- 花 孝行にしなと新造いやがらせ
- 安 新造は後家になる氣で受出され
- 明 疱瘡で惜しい隠居が一人り切れ
- 明 ねごいのが隠居のだよと大一座
- 明 新造はふる氣ではなし寝る氣也
- 政 ほれ捨にして新造は高軒
- 安 つつ伏すと新造音も沙汰もなし
- 政 新造はしびれ薬をのんだやう
- 保 抓ヒらさんしよが叩かんしよが眠うおす
- 安 轡虫ぐらゐる新造かんませず
- ▲ 新造の夢は廊下を駆けめぐり
- 政 白河の夜舟新造の遊山なり
- 明 毎朝のことゝ新造ひつばがれ

第一編第二章

下腹部

四火の灸、腹と脊とに二ヶ所づゝ据うるもの、寸白などに効ありと

- 安 新造の鼻をつまんで歸るなり
- 安 居續に毎朝鼻をつまられる
- 政 眠くさへないと新造笑つてる
- 天 新造は寝るも笑ふも二人り前
- 天 笑はせて見なと新造しやちこばり
- 安 もう笑ふまいと新造かしこまり
- 明 追つかけて行くと新造ちこまり
- 花 振袖をグットすくつて新造逃げ
- 安 四所が火だに居眠るむごいこと
- 安 振袖を着飽きて四火の沙汰となり
- 明 見世へ出る年までちり毛据ゑてやり
- 保 其當座新造我名を覺えかね
- ▲ 新造の聲は氣海の邊から出
- 明 一の絲新造よんでくひ切らせ
- 保 かけて来た新造前髪はふり上げ
- 花 新造をはやして太鼓たゝかれる
- 天 新造の鼠を太鼓おんにがし
- 明 新造のうきが友には鼠なり
- 寶 新造の厄介にする鼠の子
- 明 新造の寝ぬも一つのふじきなり
- ▲ 楊弓は新造程な張をもち
- 花 新造も水引ほどはしまりあり

奇應丸なるべし
御客に對し癩など云はぬ誓言

二人の新造を突出した上
振袖を止めて留袖となし一人前の女郎となすこと

葬式の用意に貯へ置きたる金

醜婦の異名

- ▲ 新造は可愛がられて裾が切れ
- 明 新造は飲むと力が強うなり
- 寶 新造は茶碗で飲んでツイと逃げ
- 明 新造の親仁は村の飲んだくれ
- 寶 新造のつまんであるく虫樂
- 明 新造の癩とはこいつ太え奴
- 天 わづらはぬ筈で新造ゆるされる
- 保 三界に家なし新造廻し部屋
- 寶 新造はまだ床(常)間の夜具布團
- 明 兩袖を出してしよひ込む夜具布團
- 明 袖留がすむと明部屋授けられ
- 寶 新造を部屋持にして身退き
- 安 新造を宿なしにして義理はすみ
- 花 袖留は孫のかたづく程かゝり
- 明 新造の袖死金に疵をつけ
- 明 袖留をくらつて來たが厄おとし
- 寬 吉原の袖はお強ぢや留められず
- 安 愛敬のない振袖は内でとめ
- 花 寝て果報松(待つ)の位に新造成り
- 花 齒を染めてやるは實盛程な客

第四章 禿

髪丈出來て衣裳を着換へず

出の衣裳を脱ぎて不斷着になる

撥元結鬘の上に高しアイと長く引く

前髪と兩鬢の邊に少し毛を残して其他丸坊主に剃りたる禿

男性の禿
掠即ち隠シ子の意にや

臨時雇入れの禿

- 花 晝前の禿の首はついでやう
- 花 平服の禿頗る天窓がち
- 花 着換へると禿はみんな大天窓
- 花 花かんざしに風負けの芥子禿
- 保 進物のやうに禿の花元結
- 保 短つかな着物返辭は長くひき
- 安 禿が返辭ひちりきの調子なり
- 保 いらんの紙では鶴は出來いせん
- 花 鳳凰の巢立は長い返し也
- 寶 捨子ぢやと坊主禿をなでまはし
- 明 よい音の折檻坊主禿なり
- 安 二つとは男禿のたゝかれず
- 安 たまゝ男とらまれ禿なり
- 花 禿の坊主いらんのかすり也
- 天 奥(逢)州が禿白河夜舟なり
- 天 眠らぬを賭に禿は肩をもみ
- ▲ 毛の赤い禿一たん坊主にし
- 寬 初午は男禿に世話が焼け
- ▲ 紙籬で男禿は火をおこし
- 安 アノ是さ備禿の名を忘れ

女郎の産んだ子を遣手の子として育つることあり

必しも禿ならず
参照の爲にあぐ

酸漿

参照

十一二の小供、編笠に役者の紋をつけ、中形の襦袢をはき、竹の先に辨慶をつけ、上段へ十串、中段へ五串さし、下段に三つ二つ指して、見事にならば、ほうづきやんくと呼びあるく云々。(反古籠)

湯の中に落して
搜がす

- 花 とつさんと備禿は芋を呼び
- 安 まし子根生の餓鬼だと遣手いひ
- 安 今のかゝさんは憎いと禿いひ
- ▲ 禿呼びや遣手の尻を廻り道
- 明 キャツといふ禿は晝の毛虫なり
- 安 鶴ほどに騒ぐを聞けば毛虫なり
- ▲ 光りの木禿は至極大事にし
- 明 十オざしを貫つて禿蚊が苦勞
- 明 十オざしを禿起きると出して見る
- 花 ほゝづきを湯殿で禿滑川
- 實 ほゝづきは禿へはさむ水肴
- 明 ほゝづきを口から出して合をする
- 花 禿の返じ酸漿へひつかゝり
- 明 ふる雪を口へ入れんと禿そり
- 實 禁句だに禿雪コンク(来ヌク)といふ
- 花 稻光り禿二人りをぶつちがへ
- 安 ごろついてくると禿の鮓が出来
- 安 巻紙で禿は土手を遠目鏡
- 明 くやくしくも禿に負ける紙摺引

再びからかはぬ
誓

- 實 大勢の火鉢をくゞる禿の手
- 明 輪に吹くの稽古で禿目をまはし
- 安 やつた菓子禿どこでか食つてくる
- 安 菓子持つて禿たいこに赤んべい
- 明 泣やんだ禿太鼓と指ッ切り
- 明 太鼓持禿に爪をとれといふ
- 安 ナゼ舌を出したと禿くすぐられ
- 明 アレ御客さんがと禿とちぐるひ
- 安 くすぐれば禿チヒヒと笑ふなり
- 安 くすぐれば禿丸めたやうになり
- 明 鍵持つて禿春駒唄うて來
- 實 くろもじを嗅ぎく禿持つてくる
- 安 禿の御みくじ黒文字の箱をふり
- 安 駈けて來て禿アノネを三ついひ
- 花 早打の禿アノネで息を切り
- 明 かけて來た禿しばらく耳に口
- 實 そり橋へくると禿は對になり
- 安 俄雨禿四手に二人リ乗り
- 實 錠前に禿三つ四つ口をまげ
- 安 物を出す禿箆筒へはひるやう
- 實 叱られて禿たんすへよりかゝり
- 實 隅つこへ來ては禿の腹をたて

(保) 長烟管禿鐵砲よりおそれ
 寛 たゝかれる烟管禿はみがいてる
 (政) 情こはい禿脊中はやにだらけ
 (明) 手がきゝんせんとメソク禿泣き
 (天) 馴染客禿の繩を解いてやり
 (寛) 新造が叱ると禿真似をする
 (政) 岩永のやうに琴柱を遣手責め
 (政) 十三でざんず琴柱と申しんす
 (政) 寝 小便 禿 布團の境論
 (花) 舟を折りかけて禿は漕いでゐる
 (保) あはれさは風呂に禿の浮寝鳥
 (安) 居眠を烟管でおこすむごいこと
 (政) おいらんに叱られやすと蚊にくはれ
 (天) 呼ばつても來ぬ管禿蚊の餌食
 (寶) 蚊の中に坊主禿のあはれなり
 (寶) 一ト網にうたれた禿蚊にくはれ
 (花) はせよせたやうに禿を寝せておき
 (明) 火廻に禿引ケ四つたんといひ
 (政) サア寝やといはれて禿よみがへり
 (花) ゆすぶつて禿をおこす雪の朝
 (寶) 禿よくあぶないことを云はぬなり

|禿の名、琴責を
 寓したる句作
 |禿の年を琴の糸
 に利かせたる趣向

— 花魁の秘事 —

(安) 寝たふりをして居りや禿何かいひ
 (天) 性わると禿そばから才はじけ
 (明) 我が口で切れたと禿しかられる
 (明) 告げ口をすると箕輪へ返すなり
 (安) つまむのがやまず箕輪へかへされる
 (安) イッソ尻をひると箕輪へ返すなり
 (政) ませたふり箕輪の寮へ禿菊
 ▲ 鼻糞を食つて禿は叱られる
 (寶) 叱つてもあつたら禿炭をくひ
 (政) 正直をつくなと禿しかられる
 (明) 禿さへ桃色程は嘘をつき
 (寛) 物になる禿即席嘘をつき
 (保) 禿でも楊弓程は張をもち
 (花) 浅草へみどりちどりの放生會
 (政) 越路ヤと呼んでも見たき禿の名
 (保) 其當座禿我が名を人にきゝ
 (寶) 醫者よりも禿の力癩になれ
 (寶) まんざらな腰を禿は押しならひ
 (政) 鼻筋も今に通名切り禿
 (花) 花の里芥子から育つ女郎花
 (花) 親の爲禿も孝の二葉なり
 鳳凰の玉子八文にする氣なり

|疳の蟲
 |前に同じ

— 越後出なるべし —

！追々と突出シの世話あり

- ⑧ 八文に賣るまで世話な禿菊
- ⑨ 折檻の杖をしよはせる松つくり
- ⑩ 雛鶴は千兩にするつもりの名
- ⑪ 伸びる禿においらんの氣がちぢみ
- ⑫ 薦たけて来ておいらんの苦勞なり
- ⑬ 年越に十二の禿なぶられる
- ⑭ 十三になると禿を厨子に入れ
- ⑮ チット見ぬ内に縁が松となり
- ⑯ 早いこと縁が松の太夫職
- ⑰ 姉の恩縁が松になつて知り

第五章 鴉母

照 第二編第七章參

- ① 細見の鬼門になほる遣手の名
- ② 細見で見れば香車の場所に槍(遣)
- ③ 細見にまでのけものゝやうに書き
- ④ 細見の隅を新造ヒツ抓り
- ⑤ 隅つこに居ても遣手はやかましひ
- ⑥ 憎まれればあ一軒に一入づゝ
- ⑦ 細見の隅から一步とりに出る
- ⑧ 百疋分が愛想を遣手する

照 第二編第六章參

！能の流派に言掛ぞかしきものなりと

- ① 一步だけ遣手は尻をどたつかせ
- ② しほの目で遣手一步をにぎ／＼し
- ③ をかしくはなけれど一步丈わらひ
- ④ 一步で面ンをかけかへる遣手ばゝ
- ⑤ 一たび笑むと一步とる婆々アなり
- ⑥ 一步やらねば剃きさうなば々なり
- ⑦ やるものをやらねば婆々アおこるなり
- ⑧ ふんばいで来ようとはば々江戸へ出る
- ⑨ 駕よりは槍(遣)の一步は高いもの
- ⑩ 吉原でいつち高いはば々なり
- ⑪ 折ふしは小粒もあたる遣手の齒
- ⑫ 齒に當る肴を遣手嬉しがり
- ⑬ 食物をはさむと遣手不人相
- ⑭ 遣手とは假の名實はもらひてえ
- ⑮ 松の影婆々ア一分かきよせる
- ⑯ 松の木に今も熊手のば々出る
- ⑰ 北流の婆々アこいつもむづかしい
- ⑱ 小山のやうにゆるぎいで一步とり
- ⑲ それ／＼で瘡せた遣手も疵のやう
- ⑳ 慾の皮張裂けさうな婆々ア出る
- ㉑ 遣手よくおつこちもせず上り下り
- ㉒ 中症をこはがつて居るやりてば々

遣手姿
禿の名

▲ やりてば、毛抜合せにゆもじをし
 ① みづくのやうな遣手の影法師
 ② ミッシミシ來ると禿はかしくまり
 ③ 眉毛のないのが禿にこはがられ
 ④ しげみヤアなと、呼んでは又いぢめ
 ⑤ 雷が飲むと叱ると禿いひ
 ⑥ 遣手の子アノ女郎衆がなど泣き
 ⑦ 更けわたる廊下を遣手ノッサノサ
 ⑧ 只の名の女新造こはいなり
 ⑨ 小供ヤアなど、廊下を呼びあるき
 ⑩ 小供衆など、遣手はべめたとき
 ⑪ 階子から上は私があづかりさ
 ⑫ 二階から遣手風が見世へ吹き
 ⑬ 賣残る手の筋だると遣手いひ
 ⑭ 新やりて一日増に憎くがられ
 ⑮ おめへ方慾を知りなと遣手いひ
 ⑯ 正直をなほしなんとやりていひ
 ⑰ よくしなよ觸頭だと遣手いひ
 ⑱ 北國の鬼は柴田と遣手なり
 ⑲ アイわつちや鬼神などと遣手いひ
 ⑳ くだばる程どやしなとやりていひ
 ㉑ 賣られる程の根性と遣手いひ

第六章 女郎屋者總幕裡

鍵袋
鍵の根附

遣手仲居等の異名

㉒ 折檻を仕掛け笑に婆々ア出る
 ㉓ 木魚程なもの遣手は提げてゐる
 ㉔ 變り錢やりての腰に五六文
 ㉕ 立間のやりては鍵をにぎりつめ
 ㉖ やりて婆々おんなじやうに棲をとり
 ㉗ わつちやアたべんせんと遣手おきあがれ
 ㉘ 連合ヒの日さと遣手は梨をくひ
 ㉙ たいこもち遣手が立つと舌を出し
 ㉚ たゝかれる太鼓きんちやくべめるまね
 ㉛ 巾着とやりて一所に口を明き
 ㉜ 巾着をしめ、下りるやりて婆々
 ㉝ おかしさは遣手巾着切にあひ
 ㉞ 巾着は亭主を砂利場邊におき
 ㉟ 箕輪にて見れば遣手も凡夫也
 ㊱ 珠數を持つ遣手は内が不首尾也
 ㊲ 後生へは尻をむけてるやりて婆々
 ㊳ 叱らせて聞くが遣手の目見えなり

吉原藝者——幫問——お針——若い者——
—妓夫——消炭——文使附女郎の艶書等

第二編第四章參照

(明) すがききを律義に弾くは出た當座
 (明) すがききをわたして指をポッキボキ
 (明) 引ケ四ツに撥をあくびの蓋にして
 (孫) 聲のいゝ藝者内所へよく通り
 (明) お齒黒は藝者一生いやといふ
 (寛) 好なこと藝者附けたり剃がしたり
 (花) 仲の町歌舞の菩薩は後帶
 (政) 錆びた聲刀尾張の内藝者
 (花) アノたぼは町だぜなど、百棧敷
 (寛) 是切の小袖着てねる太鼓持
 (明) 羽二重のしらみ太鼓がたけはじめ
 (安) 不斷着てたいこはどつこ迄も行き
 (安) 行丈ケの合はぬを太鼓ぶつ重ね
 (明) 太鼓持本田の分ン地程に結ひ
 (花) たいこづらには撥鬢がよく似合ひ
 (花) 太鼓持アリンヌ國の通辭也
 (明) 大門の内は太鼓のたなごゝろ
 (花) 太鼓持お針の側で眞つ裸
 (安) ほころびを縫ふ内たいこ土俵入

—女郎娼賣
 —御齒黒(第五編第三章參照)
 —吉原藝者の芝居見

—多くばお下り頂戴
 —撥鬢奴

—綻の修繕

—幫問の取巻

(明) 口端をたいこ遣手に抓められる
 (安) 追つかける遣手蜜柑の皮をもち
 (明) いや氣味をぬかす婆々々とたいこ云ひ
 (明) 邪氣のある婆々々とたいこ申上げ
 (孫) 櫻川三筋の中に花をもち
 (寛) トテチリの内に太鼓は白湯をのみ
 (明) 三味線がやむと扇を鼻へあて
 (安) 叱られるそばで疊をたいこ飲み
 (安) 口を書入レにたいこは一步借り
 (明) とるものを取ると太鼓は靜也
 (安) 笑ひ顔現が金だとたいこ云ひ
 (明) 太鼓持何をあいても飛んで出る
 (孫) どらを打つ側から太鼓たゝき立て
 (花) 太鼓持どらを打たせて陣をひき
 (▲) 生息子に太鼓は打たせたがるなり
 (花) 息子をばどんつくにする太鼓持
 (御) 御むほんをお勧め申す太鼓持
 (安) 太鼓持使はせるより惡氣なし
 (孫) 尋ねてる息子末社の神かくし
 (明) 親御様だかと太鼓は惡くいひ
 (安) 死なれると三日にあげず太鼓くる
 (安) 鳴りこんで来るが太鼓の年始也

—こぼれた酒

懐中の温り

寛 久し振たいこも一つ胴突かれ
 寛 太鼓持宗旨ばかりは負けてゐず
 寛 まだ息があると太鼓は附きまとい
 天 親仁より先づ見限るはたいこもち
 天 本性になると太鼓は寄りつかず
 明 しつをかく太鼓身代破滅なり
 天 どんつくな奴にはなれぬ太鼓持
 天 身代をなげて見ねばと太鼓持
 寛 太鼓持粹がかうじて乞食めき
 安 こゝいらへ見世を出さうとお針いひ
 明 サア見世を仕舞ひやせうと針をさし
 政 よせ裁ちで通ひお針の長襦袢
 明 ありんすを通ひお針もちつといひ
 安 糠袋ばかりもお針いゝ仕事
 明 もみを縫ふお針四五杯飲んだやう
 明 ふんどしのほころび迄もお針なり
 天 ほころびを縫ふをお針はをかしがり
 明 五六寸お針の留守に才ばじけ
 明 覚えんしたとお針のをひつたくり
 安 分別が出たかお針の邪魔をする
 天 二十六心から出て縫ひならひ
 天 傾城の鉄を持つと情なし

女郎屋の縫針をなす女

昔は女の腰巻をもふんどしといへり
女郎の縫針甚だ覺束なし

一年明の前年

良家にては針妙と呼びてお針といはず

第二編第八章 參照

風呂敷に布圍を包んで奪取した風態は釣鐘を擔ぎたる辨慶に似たりと

女郎屋の若い者の通稱多く料理人の通稱多く下働の男にいふ

情交を結ぶ、次の句亦同じ

政 おいらんの寝かし物あり糸切齒
 天 おいらんの急所お針が知つてゐる
 保 針の古手で槍(遣)となる別世界
 安 針妙をお針といつて叱られる
 明 若いもの羽織ひつかけ江戸を出る
 明 あんぼつに致しませうと若い者
 安 どれなりとおつしやつてはと若い者
 政 片手握つて若い者飲んでゐる
 明 若い者天窓かきくかしこまり
 政 馬になる日あり轡(亡八)の若いもの
 明 ぬけ裏をうるさく妓夫はつきまとい
 安 妓夫臺に結跏趺座して髯をぬき
 保 三井寺といふ身階子を床廻し
 保 母衣の身で階子を夜具の逆落し
 保 硯蓋喜助二君に仕へさせ
 政 消炭までも起される夜更客
 政 附木をとつて消炭を起らせる
 政 消炭のおこるは河岸の廻し部屋
 政 消炭にくつつき二階大さわぎ
 保 消炭をくふも新造の虫のせい
 安 文使嘘と誠をしよひあるき
 政 嘘を束ねて脊負つて行く文使

情交を結ぶ、次の句亦同じ

御師の案内状、
紋切形にて開封の
用なし、猶第三
編第二章参照すべし

野馬寮ほど讀み
にくしとの意

- 文や〜といふ程持つて行き
- 戀の重荷を一束バにさと飛脚
- まづいこと東ねた文を抜いて出し
- 文使そら小便を度々たれる
- 文使道など聞いておびき出し
- 文使そらつとぼけが上手なり
- 文使御用にチョッと呼出させ
- 文使息子をはすに呼出し
- 文使よつぼど粹な氣で咄し
- 文使或はいさめ又しやくり
- 封のまゝおく初會文伊勢の狀
- 紅筆の文赤腹をたれちらし
- 御簾紙の文透通る嘘をかき
- うらに出す文も傳授の呼子鳥
- 下書をして新造は見てもらひ
- これでは地文だと突出し叱られる
- 釣針のやうなかくで客をつり
- のたくつた蚯蚓をゑさに客をつり
- ちらし書田舎へ行くと蜘蛛が下り
- 吹降のやうに讀ませる散らしがき
- 素人のよつても讀めぬ廓の文
- 傾城の文に女のよりたかり

の字形似た
るよりいふ

松花堂昭乗の流
派にして假名に巧
なり、寛政より文
化頃に至る間遊女
の妙を得たるも
の少からず、松葉
屋半蔵抱桂、松村
など特に名ありし
といふ

破れかぶれの拾
撥也

置いた儘にて返
事を要せぬ手紙

喜多流

雁

今日の義

- 無心文きゝかねる筈釘の折レ
- 虚無僧の押合つてゐるくどい文
- 傾城の能書は顔のたしに成り
- 金で買はれぬみす紙の松花堂
- チトやにつこい番新の松花堂
- 松花堂様の御文と女房出し
- 紋日前十返りもくる松花堂
- 客招く文に雁皮の尾花ずり
- きつとした用とは見えぬ繪半切
- 吉野川膝を流れる 繪半切
- 繪半切通ふ千鳥の中をさき
- 切れ文にさかれる鴛鴦の繪半切
- 切れ文の奥へ飯盛殿と書き
- 切れ文にせめて使のむなづくし
- 差置と書かぬばかりの初會文
- 文使ひつ裂く迄を見てかへり
- 目かさめりや枕紙にもならぬ文
- 北流の文奉書(寶生)の小口紅
- 北流の文巻口も 觀世水
- 鳥でさへ北から来るは文使
- けふしとは曆に見えぬ日附也
- いつなりと届いた時がけふしなり

飛脚屋の元便にやあらん

鈴鹿山の田村丸を利せたる趣向

性急なること、天地紅の眞赤な巻紙なることを言掛く

コン畜生驕れ驕れ也

只でくる文の日附はけふしなり
 吉原へてんねき配る十七屋
 旅迎太鼓四五通持つてくる
 北國の矢文で客の城が落ち
 金的の客へ矢を射る文使
 金的と見込まれ矢文やたらくる
 鬼籠るさとかから千の矢文なり
 川竹の文はごげんの節だらけ
 御げんとはとらこの方の詞なり
 めもじならでは解らぬと畜生奴
 そこらをばぬかる物かことづかり
 そらごとを有りがたさうに息子よみ
 腮を剃るうち見る文をひつたり
 嬉しがる奴だと文でくらはせる
 傾城は人をたのんで一つぶち
 封ちがひふきげんな客二人り出来
 其客が来て三尋程反古になり
 巻紙もやせる苦海の紋日前
 節句前封を切らずに中がよめ
 二十日過文でおつかけおんまはし
 玉章といふもの、降る二十日過
 火のついたやうな文だとよんでゐる

文面には切髪とある所面白しと

かしくにあらずほしく也

文字太夫、常盤津文句入の口説文

窓分們分赫分喧今の地口

二十尋もある重き文

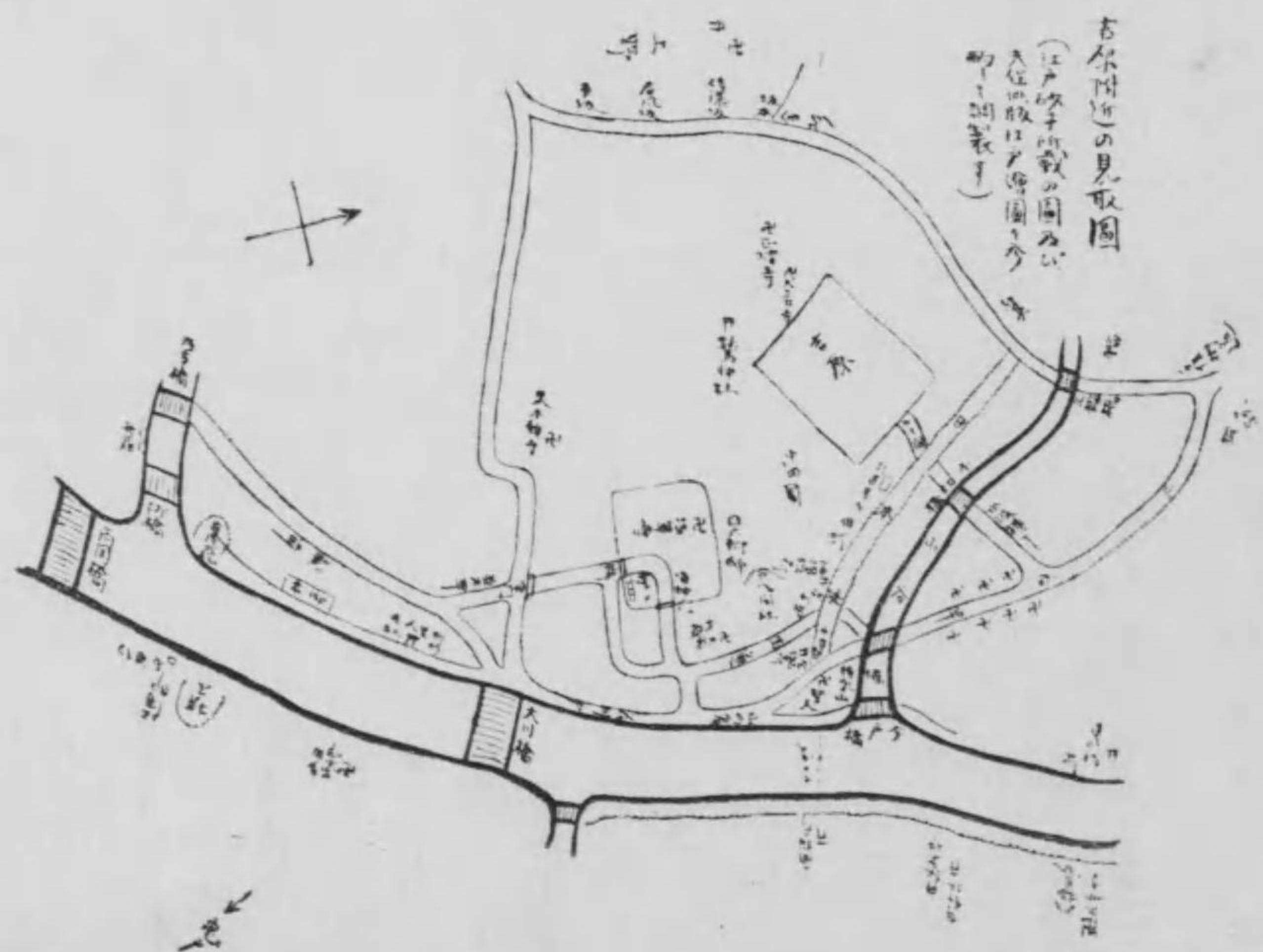
手の平を秤につかふ文が来て
 幕の文廿尋ばかり恐ろしい
 玉櫛笥二(蓋)尋ほどの幕の文
 物前に三尋程ある蚯蚓くる
 書いたり揉んだり消したり嚙んだり幕の文
 幕の文候べく候に書かぬなり
 文の末禿の風邪も書いてやり
 おもしろさ文にも文字を入れてくる
 幕の文何がどうでもよこせなり
 幕の文ほしくと留めぬばかり也
 さととやの所から下卑る幕の文
 さつかしくゆかしくそして金と書き
 一札で貸さずかしくで金が出来
 證文で借りては文へ金を貸し
 おもしろさ文へかもじを入れてくる

第四編 吉原の遊客

歌舞の菩薩の濟度に預らんと、隨喜渴仰の涎を垂らして、西より東より、通ひ曲輪の御客の數は、三萬三千三百の佛の數よりも多く、淺草の觀音を煮出に售つて往く若旦那あれば、山谷の葬式を道具に使つて來るどら息子あり、法衣を羽織に世を忍ぶ、賈醫者の一本指あれば、田樂の豆腐から浮かれ出す、淺黄裏の二本指あり。貴賤老若、粹不粹、日本堤に四ツ手を飛ばすもの、大川筋を猪牙に走らす者、千態萬様、宛然走馬燈を覗くが如き觀がある。されば、各種の遊客を記す前に、順序として、吉原に關係ある附近の地理に屬する句から、先に拾ひ上げて見ることにしたのである。

第一章 吉原附近の地理

向島(隅田、梅若、竹屋)——柳島——龜戸
 ——柳島——柳橋——船宿附猪牙卅——
 首尾の松——嬉の森——駒留石——多田
 藥師——駒形人丸堂——待乳山聖天——
 山谷附葬式——真崎稻荷——淺草觀音附
 年の市——馬道——六郷邸——富士淺間





社——田町——八丁十堤附四手駕——鶯
 神社附西の町——正燈寺（附録真間の紅
 葉）——大音寺——箕輪——阪下——上
 野等

- ① けちな音を出すなとそびく隅田川
- ② 何にせへ向ふへ越せとすみ田川
- ③ 隅田川煙管をはたきサアどうだ
- ④ いゝ年で然らばといふ隅田川
- ⑤ 隅田川歸は階子のぼるなり
- ⑥ 隅田川品によつたらあそいとこ
- ⑦ さそふ水あつて隅田を渡るなり
- ⑧ 其氣では出ぬよくとひきずられ
- ⑨ 今以て氣ちがひのくる隅田川
- ⑩ 隅田川今でも母に苦をかける
- ⑪ 隅田川とかくに親の迷ふとこ
- ⑫ 花の暮身に附いて皆かう參れ
- ⑬ 隅田川我思ふ子は向ふなり
- ⑭ 甘い酔で梅若を又母はくひ
- ⑮ 梅若へ行くのは嘘でよし（吉）にする
- ⑯ 見れば見渡すで梅若やめになり
- ⑰ 梅若はこゝで拜めと堀へつけ
- ⑱ 口を酸くして梅若から別れ

——梅若の母に言掛
 く、以下數句同じ

——見れば見渡す穂
 に穂がさいて云々
 の俗謡を利かす
 ——山谷堀

梅若を勾引した
信夫の總太に言
掛く次の句亦然り
三月十五日

向島のみならず
眞崎稻荷にも多く
ありされば田樂の
數句は兩方共通の
ものもありと知る
べし

天 隅田川連が悪いとかどはかし
 夜 歸には人買となる梅若忌
 夜 梅若のわびごとの手が櫻餅
 夜 宿引のやうに遣手の隅田川
 明 田樂屋イザラつたてといふ所
 明 田樂ぢや飲めぬが事のはじめ也
 安 田樂で飲むうち飛んだ智恵が出る
 明 相談が出来て田樂せつくなり
 明 田樂の途中からやむおもしろさ
 夜 田樂でくづす小判は當があり
 天 田樂を飛越して出てコリヤどこへ
 明 田樂の味噌をふきく堀へさし
 天 田樂のなぐれ奴らさと遣手いひ
 安 ふところは田樂ぎりの仕度なり
 明 田樂の足手まとひは女づれ
 明 隅田川までにあれこれヤットまさ
 明 まくことがならぬで息子行きはぐれ
 天 年寄は皆白鬚でまくつもり
 明 白鬚の邊から持病再發し
 安 鞆を押えて白鬚で一分かり
 夜 隅田ざりて歸れば花も安上り
 天 秋葉から天狗が着いて川を越し

寺島村音羽屋
隠宅

竹實の觸聲、參
考句として挿む

一夜櫻

「名にしおはじ
いざこととはん都
鳥我思ふ人はあり
やなしやと葉平、
次句亦出所同源

鯉濃汁の名物

葛西太樓

安 三圍でひぐらしの鳴くいゝ時分
 夜 竹屋呼ぶ顔は夕日に櫻色
 夜 竹やは意氣だが其あととは樋竹
 夜 向島女護の島に遠からず
 夜 面白さ向島から女じま
 夜 櫻から櫻へこけるおもしろさ
 夜 是からは楊貴妃櫻だとそびき
 安 かくあらんと存じ羽織持參なり
 明 そのきざしあつて羽織は持たせたり
 明 道をかへ歸るものだと引きずられ
 ▲ 氣はありやなしやとそびく隅田川
 夜 あくる日はいざこざ聞かん都鳥
 安 都鳥どらの傳授をうけるとこ
 夜 鳥の名もかはり息子の氣もかはり
 夜 戀(鯉)はくせもの武藏屋で氣がかはり
 夜 戀と鯉中を隔つる隅田川
 夜 さびらば鯉から戀へ舟渡し
 夜 葛西の鯉魚に懲りたとけちな儒者
 天 太郎からべら棒になり川を越し
 夜 太郎から人間僅などゝ越し
 天 鯉のあつものを喰つて鞆わかれ
 夜 松隠居あたりから鞆立わかれ

- 一 龜戸
 - 一 孔明臥龍の趣向
次の句亦然リ
 - 一 託言
カコナク
 - 一 梅見から太夫買
 - 一 梅屋敷 正燈寺
 - 一 吉原の太夫を連
れて柳島參詣
 - 一 長命寺附近萩の
名所
- (花) 名にしおふ名所かぎりて聲かへり
 (姿) 入聲のつらさ花なら花つきり
 (姿) 花を見すてると謠で聲かへり
 (花) スハ事(琴)と臥龍梅から聲は逃げ
 (姿) 北國へ出師の表も臥龍梅
 (天) 臥龍梅見て妙計をたくひなり
 (姿) 鶯(嘘)の賣物龜井戸と息子出る
 (姿) 梅から松へ氣が變り竹屋ア
 (天) 春屋敷秋は寺にて不首尾なり
 (姿) 妙見へ遊山北斗の星をつれ
 (姿) 賣つて出る萩買つてくる女郎花
 (姿) 外聞は萩で實義は女郎花
 (姿) 朝歸さのふの萩に味噌をつけ
 (明) 枯野見に一分あまして持てあまし
 (姿) 彼の(枯野)これのと名をつけて誘出し

こゝで鳥渡、船宿なるものに就て一言しておく必用があらうと思ふ。船宿とは、當時柳橋の沿岸、聖天下山谷堀の入口等に、ずらり軒を並べ、専ら遊客の送り迎へをなしたる茶屋であつて、其山谷にありしものは、多く吉原行の引手茶屋をも兼ねて居たものである。尤も柳橋の方は、深川通ひのお客も少からざるべく、又、普通の花見や、雪見や汐干や、釣魚や、凡て一切の遊船の世話をなしたるは勿論

のことで、結局兩方とも、吉原通ひのみと限つた譯ではなく、後には、此所ぎりにて濟ます淺唱低酌の御客も、随分迎へる様に成つたのであるが、今日の待合茶屋なるものは、多くは、其後身であるとの事である。夫は借置き、當時、船便によれる吉原行の道筋を云つて見れば、先づ、柳橋を漕出し、右に首尾の松、左に嬉の森の間を通り、駒留石を横に睨み、駒形堂の下を抜け、懸て、聖天下の船宿に着き、それから山谷町、日本堤へさし掛るといふ順路であつたのである。

- 一 其頃流行せし羽織の名
 - 一 柳島にありし料理屋
 - 一 同上、懸飛脚の文句使ひ果して二歩破るに言掛く
- (姿) 青柳へよる蝙蝠の羽織づれ
 (姿) 青柳へ息子舟から飛上り
 (姿) 残つた二歩は梅川でおごるなり
 (明) お見限りなど、船宿櫓をおろし
 (明) 船宿の女房深みへツイと突き
 (姿) 愛想に客を突き出す柳橋
 (姿) 船宿の女房お客のかちをとり
 (天) 柳橋(ら)放蕩(や)たいこ(幫間)をつんで出し
 (明) 二つ三つ振つて火繩を猪牙へ入れ
 (天) 堀までのつもりで火繩切つておく
 (姿) 布圍かいてみゆんでめて火繩箱
 (天) 繩がなくなつて妓樓で吸付る
 (明) 柳橋川へ布圍をはふり込み

猪牙の見立、次の句亦同じ

- 〔保〕肩の布圍を投込んで堀だによ
- 〔花〕柳から乗つて櫻へこぎつける
- 〔安〕もてる筈なびく橋から乗つてゆき
- 〔花〕相談がきまり柳を北へ向け
- 〔明〕吉原の方へ柳の葉をとばし
- 〔明〕一葉づゝ岸をはなれる柳橋
- 〔安〕香車先づ突くやうに出す柳橋
- 〔明〕柳橋出ると一かぢグイとやり
- 〔安〕火をとぼす頃大川へ猪牙をまき
- 〔明〕柳橋如渡得船と乗つて出る
- 〔明〕六つ七つ漕いで何屋でござります
- 〔花〕どこへ碇をさうと猪牙でいひ
- 〔保〕川といふ字に船宿の清め鹽
- 〔天〕編笠を笑顔でかぶる柳橋
- 〔辰〕辰巳へも北へもなびく柳橋
- 〔砂〕砂干と櫻こぎわける柳橋
- 〔天〕五つ目はいくらとけちな柳橋
- 〔寶〕中宿で先づ初手のから封を切り
- 〔花〕封じ文川へ投げこむ柳橋
- 〔明〕柳ばし乗出してから封を切り
- 〔安〕猪牙の文へんぼんとして讀んでゆき
- 〔天〕くりかへし猪牙半分は文になり

元來は棺の後に泣顔にて被るもの

深川

洲崎品川方面

五百羅漢見物

―首尾の松

- 〔安〕猪牙でよむ文のぞくのは松ばかり
- 〔花〕よみ切らぬうち堀へつく長い文
- 〔花〕船宿の腰張見れば無心文
- 〔保〕戸棚へ下りる船宿の裏階子
- 〔保〕首尾の松風サツク(颯々)と猪牙で行き
- 〔安〕吸附ける内に柳が松となり
- 〔花〕首と尾のあるのは松もおもしろし
- 〔安〕餘の舟で見ればやつぱり唯の松
- 〔安〕首尾の松あれば不首尾の柳あり
- 〔天〕首尾の松たびく見たて不首尾なり
- 〔保〕十返りも見ると不首尾の松となり
- 〔花〕右に見る時は不首尾の木振なり
- 〔安〕首尾の松あたり息子はゆすぶられ
- 〔花〕親仁は白河息子は夜舟也
- 〔安〕布圍から首松へ出し椎へ出し
- 〔寛〕柏餅椎と松との間を漕ぎ
- 〔砂〕芋蟲ごろく猪牙舟の柏餅
- 〔花〕あるいて行つちやア氣のつかぬ松と椎
- 〔保〕柳から松椎そして夕櫻
- 〔花〕うれしい(椎)と首尾の間を猪牙でゆき

松の縁語

猪牙にて歸る時

松浦邸の椎の木

参照

松浦邸の椎の木を、嬉の森といふは、吉原通ひの人、船にて歸るに、此所にて曉なれば、歸るに首尾もよく、嬉しといふより

名づけたるなり。向ふの岸の松を、首尾の松といふも、これに同じ。(墨本消夏録)

一 椎松

一 赤澤山椎の木

- (保) 頼政と始皇の間をおもかぢイ
- (天) 家根船を追ひぬいてもう松浦潟
- (寛) おもしろや猪牙にて松浦潟を行き
- (寛) 椎の木を曾我では怨み猪牙でほめ
- (天) さぞ椎の實がならうとは野暮な猪牙
- (政) 一廻りほども猪牙から見えるなり
- (政) 椎の木も左に見ればうす眠し
- (天) 目がさめてから椎の木をくがで見る
- (政) 名木と名石の間ッツと漕ぎ
- (花) 舟留の石もあれやと母の愚痴
- (政) 不風流駒留石へけつまづき
- (保) 此石かへと駒下駄でけつまづき
- (天) 多田(唯)でない薬師と女房見ぬいたり
- (花) さそひ出す時まで多田(唯)の薬師也
- (天) 多田(唯)の薬師迄は伊勢屋も連になり
- (安) ほのくくと人丸堂を矢の如し
- (花) ほのくくと馬鹿(和歌)三人の朝がへり
- (保) かへる猪牙とりの鳴く頃吾妻橋
- (寛) 戻る猪牙達磨もあれば寢釋迦あり
- (政) 如意輪と寢釋迦で猪牙の朝がへり

一 首尾の松と駒留石

一 源義家奥羽征討下向の途次馬を繋ぎたる石なりと

一 駒形

一 「ほのく」と明石の浦の朝霧に」の歌に言寄す

一 「旅に寝て」の洒落

一 北へ向つて飛ぶものなりといふ

一 聖天

- (政) 猪牙へ寝て夢は二階をかけめぐり
- (保) 極樂へ急ぐも猪牙の涅槃像
- (明) 歸る猪牙赤蜻蛉と行きちがひ
- (政) 朝がへり竹屋の舟で松を越し
- (政) 聖天は舟と駕との相の山
- (天) 待乳山今では猪牙の目當也
- (安) 名木を越すとおだんの下につき
- (天) 吉原が田圃へひけて猪牙が出来

参照

前略、兩國の笹屋利兵衛といふ人と、淺草御門の外河岸なる玉屋勘五兵衛といふ人が、造らせ初て、お客を乗せ、元押送りの長吉舟より思付たる小舟なれば、長吉舟といふべきを、略してちよきと呼ならはし、今又、猪牙と文字に書くは、小舟の形が猪の牙に似てあるからこじつけなり、下略。(英對暖語序文)

- (明) 後を見ぬ人の乗る故猪牙といふ
- (安) 野暮なのを猪牙へそびくのらんがしさ
- (安) たのもしい奴猪牙舟へかじりつき
- (安) 手をついて猪牙に乗つてはづかしさ
- (天) 見ともなさ猪牙へ二三度ふちかへり
- (保) 野暮の飛切り舟に酔ひ駕に酔ひ
- (花) 江戸つ子の生れそこなひ猪牙に酔ひ
- (明) ひらり乗る猪牙は元手の入つた奴

参照

欄卸てたしなませられるやうな藤さんなら、小べりへ手を掛け、小舟へ乗移りやしねへぞ。(『梅曆』巻四通客藤兵衛の文句)

猪牙で小便千兩もすてた奴
 船中の小便巧者二人立ち
 一時に立つて猪牙舟叱られる
 振舞で行くのは猪牙へかきこまり
 ▲飛ぶやうな舟であらうと問ひおとし
 舟ざらひ一人は川のふちを行き
 明 その舟はどうするのだと矢の如し
 安 舟の兩ぶちをとらまへる早いこと
 安 丸々の中を矢を射るやうに漕ぎ
 猪牙のあと都鳥までゆれてゐる
 花 量見もグレリとちがふ猪の牙
 安 舟までがほつそりしたが息子すき
 花 猪牙に乗る息子親仁の手にのらず
 花 花散里へ浮舟で息子ゆき
 花 夕筑波みよしを向けるおもしろさ
 明 猪牙の鼻づらに一足やはたぐる
 安 御亭主が猪牙で女房があたけ丸
 安 かぜひかぬ様に召しませ猪牙とやら
 猪牙と釣舟兩方でべら棒め
 花 早いこと暫時に渡ッ二つ抜け
 天 ぐらつかあ〜つひ堀へ着き

吉野丸川一丸等の屋形船

吉原猪牙、源氏の巻を利かす

當時流行の男物革鼻緒
格氣すること、安宅丸の洒落

どら息子の親に
睨まる
地者

御足の足らぬ御
客なるべし

堀の船宿

涅槃像

本性寺秋山自雲
の墓、痔の病に靈
現あり

猪牙へ腰坐ると内がぐらつかあ
 明 銀烟管にて下知をして堀へ着け
 猪牙もしろさ日本の隅へ舟がつか
 安 決着もせぬに船頭堀へつけ
 安 あやかしが附いて家根船堀へつけ
 明 猪牙を呑むやうに吉野を堀へつけ
 安 大一座先陣既に堀へ着き
 明 大一座後陣は未だ秋葉に
 猪の神を賣つた祟で尻を抱き
 安 御女儀の御無用とたつて堀でとめ
 船頭が多く山谷へ客を上げ
 頭北西面猪牙へ寝て堀へつき
 花 細長い聲で呼んでる山谷堀
 寛 へうたん屋山から里へ漕いでる
 猪 内は野となれ山谷から引きかへし
 保 星のある方へ日暮の山谷舟
 安 ぎう(妓夫)に手をとられてびつこ舟にのり
 寛 目うつりがして船宿を寒がらせ
 ▲堀の茶は味も覺えず飲残し
 明 中宿は行燈張ると反古にされ
 明 中宿はにらまれてゐる藏を建て
 明 中宿で地は御無用とたつてとめ

— 第四編 吉原の遊客 —
堀の船宿

〔保〕 武藏屋で居眠の出るもてたやつ
 〔明〕 仲宿へお袋のくる一大事
 〔明〕 お宿から文と船宿にがわらひ
 〔寔〕 ふられたを船宿なだめく来る
 〔明〕 もてぬ奴船宿へ来て割をいひ
 〔保〕 吉原でふられ山谷で突出され
 堀の妻たしかに一度買った奴
 〔安〕 引つばづればづれて堀の女房也
 昔たが腕に命を彫り(堀)の妻
 〔政〕 泥臭いおぼこ(齧子)は堀の茶屋娘
 今戸の焼物や、浅草紙の製造に關する句多少あれども、吉
 原史料として拾ふべきものは、存の外少きに引かへ、山谷
 町、及び其界限に多き寺院の葬式から、極樂浄土に迷ひ込
 み、命の洗濯をなす銅鑼息子の句は、頗る豊富である。
 — 浅草紙渡場多し —
 〔政〕 寝ぬ里へひびく山谷の紙ぎぬた
 〔天〕 紙漉の耳にさびしい四手駕
 〔保〕 重箱を出て蒸籠(青樓)と思ひつき
 〔花〕 コレヤ事だ寺は山谷で七つ過
 〔政〕 正四つはいゝが野郎はやられまい
 〔天〕 弔が山谷と聞いて親仁行き
 〔政〕 隠謀露見弔に親仁行き
 〔花〕 葬禮の連吟味して叱られる

— 山谷重箱鮫

— 欺かれて引込まれること、御強に言掛く

— 吉原百膳とて牡丹に蝶などの詩繪を施したるもの

— 第一章 吉原の附近地理 —

〔保〕 ふける氣と見えて強飯邪魔にする
 〔明〕 相談をしいく輿のあとを歩き
 〔明〕 鏡鉢で行く相談が聞えかね
 〔天〕 施主が聞いて居るに行かうの行くまいの
 〔安〕 先供のうち女郎買五六人
 寔 吉原へ廻らぬものは施主ばかり
 〔安〕 七日には入るのだと施主一歩かし
 〔政〕 色即是空弔からそれる
 〔天〕 弔に行衛知れずが二三人
 堀の油揚はとつひ口がすべり
 〔明〕 弔をよろしい筋と息子いひ
 〔花〕 人の憂を喜んで息子出る
 〔明〕 弔の天窓にしては光りすぎ
 〔安〕 弔に息子おこはにかけられる
 〔明〕 四五兩のおこはを息子ゆんべ食ひ
 〔明〕 なま長い経であつたと土手でいひ
 〔天〕 普門品半分頃で横に切れ
 〔花〕 めりやすとお経の聲は大ちがひ
 〔天〕 吉原と知らずにあてる袴腰
 〔明〕 肩衣で女房をばかす門徒宗
 〔天〕 肩衣をかけ百膳をくひに行き
 〔政〕 百膳の餘慶(横へ)楊子を添へて出し

—吉原雀の文句取

(保) 上下は歸宅伴は出たつきり
 (政) 上下と嘘をたのまれ聲かへり
 (明) 上下に附く駕舁はたけたやつ
 (花) 編笠の内をお駕に見ぬかれる
 (政) ソレあみがさもそこへすて大一座
 (安) それもさうだと上下をぬぐやつさ
 (明) 船宿で上下抜くが他人なり
 (明) 上下をぬぐと無常も戀になり
 (天) お客様だはとけちな上下でいひ
 (天) 無常の風にさそはれた大一座
 (明) 戀無常などとおどける大一座
 (天) 人といふものは知れぬと大一座
 (安) これでけがれが淨まると大一座
 (安) ▲大一座もとが弔軍なり
 (安) 死花がさくとは今日の大一座
 (安) 焼香の順にと笑ふ大一座
 (明) 大一座黒豆のある反吐をつき
 (天) 大一座松葉の中へつつばひり
 (花) 弔のくづれ簾をおろさせる
 (明) 大一座今日の佛と口ばしり
 (安) 大一座焼場の分も二人揚げ
 (政) 帳附の分をも一人揚げておき

—弔の御強に黒豆
 を入る
 —松葉屋
 —弔を出す家の簾
 を臭はしたる趣向

—小塚原焼物の臭
 を消す爲
 —骨壺

—大一座均等主義
 にて太夫などを買
 はず
 —四手と早桶

(保) 焼場のかへり日本堤で煙となり
 (明) 今頃は灰になつたと燈籠を見
 (安) ▲こち風の吹く夜は見せて御羅が入り
 (安) 氣のどくさあくる日土手で壺にあひ
 (明) 朝歸灰よせなど、すれらがひ
 (明) 素見物骨を持つたは土手にゐる
 (安) 強飯の腹で素見をしてあるき
 (明) 強飯をやつた乞食に土手であひ
 (天) 弔のくづれ三分は賣れ残り
 (安) 死ぬもの損女郎屋は浮ぶなり
 (政) 駕と桶戀と無常の中田圃
 (政) 戀無常中の仕切は土手一つ
 (明) 吉原へしきみの元手借にくる
 (明) 息子まだ弔からはいやといふ
 (政) 寺ざりて歸りやれと母苦勞なり
 (明) 弔に泊つて來たが落度なり
 (安) 上下で行く吉原は小言なり
 (花) コハふらち麻上下で朝がへり
 (政) 親仁の談義上下で聞いてゐる
 (花) 施主方へ對しすまぬと親仁いひ
 (安) 弔に附合づくが入るものか
 (天) おれが死んでも弔にやるか見ろ

⑤ 朝喧嘩四五軒先に忌中札
 ⑥ 懲りもせず禮から直に息子行き
 ⑦ 町内で間もなく死んでうらへ行き
 ⑧ 弔のうらはどうぢやと湯屋でいひ
 ⑨ 袂から今日は是ぢやと珠數を出し
 ⑩ 其珠數は仕舞つてくれと土手でいひ
 夫から、隅田川の右岸に添うて、少し北方へ進めば、例の紀伊の國で誼はれたる仲人は真先の御稻荷様に出るのである。

① 白狐、供物を穴の口に置き御出御出と呼べば狐出てたりと

- ① 真崎と云つちやア内が出にくいよ
- ② 真崎(真先)へよる口振と内儀いひ
- ③ 真崎の稻荷に女房化かされる
- ④ 真崎の稻荷お先につかはれる
- ⑤ 真崎で息子あいでにとりつかれ
- ⑥ 真崎でされば位はだまされる
- ⑦ 真崎で聞けばげにもが二三人
- ⑧ 真崎はこゝまで来てといふ所
- ⑨ 真崎へ着けたが事のおこり也
- ⑩ 餘儀(夜着)もないと真崎で日がくれる
- ⑪ 真崎の田樂みそのつけはじめ
- ⑫ 真崎は息子を化かす色に焼き
- ⑬ 真崎の迎へ箱提灯でくる
- ⑭ 真崎で股がすくみんしたといふ

① 午の日の黎明 ② あやまつた稻荷末の口にかへり
 参照 真崎稻荷はやり出て、田樂茶屋の出来たるは、寶曆六七年の頃なるべし。中略、其後大に繁昌し、青樓の婦人をいざなひて遊ぶ人も多かりき。下略。(平澤平格著「後は昔物語」)
 扱、此次が、世にも名高き、金龍山淺草寺、并に其附近の地誌に關する御話であるが、推古天皇の三十六年、熊成、濱成、武成の三人兄弟が、宮戸川に網して、一寸八分の觀音の尊像を拾ひ上げ、葺爾たる藜堂に奉祀したる其時より、十八間四面の大伽藍となりたる今日に至る、凡そ千三百餘年の間に互れる故事來歴より、境内殷賑の狀を詠出せる柳句の數は、非常に澤山あるのであるが、その中より吉原史に關係あるものばかりを拾上げて見れば、ざつと左の通りである。就ては、此方面を経て、吉原に至る當時の順路につき、前以て、其大略を述べて置く必要があらうと思はる。先づ、其頃、並木町の突當に、巍然として聳えたりし雷門を潜り仁王門、前例の二十軒茶屋の手前より右へ折れ、馬道南谷北谷を過ぎ、六郷邸及び富士淺間の社を左に眺め、砂利より田町にかへり、袖摺稻荷の邊を經、禿坂から八丁土手、即ち日本堤といふ順になるのである。

- ① 丹前でくると藏宿うんざりし
- ② 玉に疵藏宿を出て、猪牙にのり
- ③ 運慶の作のそばから乗つて行き
- ④ 藏宿に其後親仁ばかりくる

① 玉米は疵をつく
 ② 藏前の關慶

並木町を作者の五瓶に言掛けたる句作
一ツ家の石枕
浅茅ヶ原にありたりと云ふ

上野兩太郎

吉原を見る

手洗鉢の手拭

提灯奉納

蔵宿へ引馬でくるけちな武家
 狂言を書いて並木を息子行き
 そのほとり石よりこはい塗枕
 花までも浅黄櫻は一人たち
 金龍の裏は遊女(祐乘)の目貫なり
 太師から観音までは嘘はなし
 観音を道草にするおもしろさ
 観音はつかひでのある佛也
 神佛もいぢるも息子道具なり
 親類も浅草邊は邪魔なもの
 浅草で拾うた金は内を見ず
 繁昌さ女郎と役者ぶらさがり
 明るい信心傾城と役者也
 おいらんの奉納ふくて數多なり
 清めの御手水傾城が濡れてゐる
 細見をつるしたやうな浅草寺
 尻くらへ観音様をすぐ通り
 極樂へ大悲の道を通りぬけ
 おもしろさ一寸八分先はやみ
 花塚の蔭で色あるたくみする
 観音の脇を如意輪駕で飛び
 天人を見ながらさらばどうせうか

観音御丈一寸八分
奥山にあり

浅草寺火井の繪

仁王門の前より折れて馬道の方へ抜く

馬道の方へ抜けずに引返す

王褒を利かしたる趣向
隨身門を脱ぐれば直に馬道

七月十日
居抜して十二三日に歸る

一、金三步也

雷を這入り稻妻形にぬけ
 母の臍ぬいて雷門を抜け
 雷でお待申すとたいこ(幫間)しやれ
 よい思案雷門を二度通り
 堅い奴臍をほしがる門から出
 母へ孝雷門もぬけぬなり
 抜けるのを弓矢をもつてねめてゐる
 それる筈矢大臣から抜けて行き
 どうせうの相談をさく矢大臣
 矢大臣まかりならぬのおん姿
 伊勢屋與惣治(廢さうじ)矢大臣から別れ
 一夜のしくじり四万六千日に向ひ
 四万六千二三日目に歸宅
 正月の買物に出て氣がそれる
 買物は裏白根松女郎なり
 親の目を股引でぬく年の市
 ふんごみでよもやは女房油斷なり
 小使帳のべ際に松一本
 市のどら飾りたてたる松を買ひ
 市歸り二百あまつて氣にかゝり
 かこつけの仕舞が市と息子行き
 あてはめた市を息子はとめられる